

鹿児島県史料集(43)

薩藩名勝志(その二)

鹿児島県史料刊行会

刊行のことば

県史料集の刊行は、資料の保存を図るとともに、地方史の研究や県民の文化向上に役立てることを目的としております。

今回は、鹿児島県史料集第四十三集として「薩藩名勝志（その二）」を刊行することになりました。

本書は、昨年刊行した「薩摩名勝志（その一）」の続編であり、薩藩名勝志のうち巻之六（川辺郡）から巻之十（高城郡）までを掲載した史料集で、現在の揖宿、川辺、川内、出水及び甕島地区の名勝地や寺社などを、豊富な絵図を添えて紹介した史料となっています。

昨年度に引き続き御執筆くださいました、鹿児島県立加治木高等学校長の吉元正幸氏に、心から感謝を申し上げます。

平成十六年三月

鹿児島県立図書館長

小倉 順

例言

- 一 本史料集には、鹿児島県立図書館所蔵の薩藩名勝志のうち卷之六から卷之十を収載した。
- 二 県立図書館本で省略されている絵図部分については、鹿児島大学附属図書館所蔵の玉里文庫本により補充収載した。収載の便宜を与えて下さった鹿児島大学に謝意を表する。
- 三 漢字については常用漢字に改めたものも少なくない。また、変体仮名はすべて通用体の平仮名に改めた。
- 四 誤字、脱字、脱文等については、玉里文庫本により適宜修正・補充した。
- 五 難読の漢字について一部玉里文庫本の読みにならないよみ仮名を付した。
- 六 本文には適宜、読点等を付した。

鹿児島県史料集(43)

薩藩名勝志(その二)

薩藩名勝志 卷之六

薩藩名勝志卷之六目錄

カハノヘノコホリ
河邊郡

カラノミナト
唐湊

バウツハツケイ
坊津八景

ススリカワ
硯川

クタマタイミヤウシン
九玉大明神

ダイチキン
大智院

ホフクハウジ
法光寺

タテカミイハ
立神岩

クタマタイミヤウシン
九玉大明神

イロカハシマツ
色変松

オカリヤアトアキメラフ
御飯屋跡 秋田浦

ビラウシマ
檳榔島

カサ、ノミサキノマツ、
笠狭御崎 野間嶽

カミワタリ
神渡

コノエヤシキ
近衛屋鋪

イチジヤウキン
一乘院

トマリノミナト
泊湊

コウゼンキン
洪禅院

カイキンジ
海印寺

マクラサキ
枕崎

キンサン
金山

クシウラ
久志浦

アンヤウキン
安養院

シヤウホウジ
正法寺

クタマタイミヤウシン
九玉大明神

ノマゴンゲン
野間権現

タナカノミヤ
田中宮

モロハクカワ
諸白川

カタウラミナト
片浦湊

マツシマ
松島

タカヤタイミヤウシン
鷹屋大明神 太浦瀉

ジツシンジ
日新寺

コンセンシ
今泉寺

アイゼンキン
愛染院

スハノヤシロ
諏訪神社

クロイシハマ
黒石濱

サシキンマ
棧敷島

カサイン
笠石

タカヤガウ
竹屋郷

ジヤウジュンキン
常潤院

スギモトジ
杉本寺

ヤハタハチマンダウ
八幡八幡宮

河邊郡

坊泊

唐湊 坊津のことをいふなり、湊口は申酉に向ひ廣サ三町四拾間餘、湊入拾貳町、廻り三拾町餘、口深さ三拾六尋、唐船掛り拾八尋といふ、湊中に双劍石といふ二の岩あり双劍とハむかし唐土人の名付くといひ伝ふ、其高大なるハ凡拾五間、小なるハ拾貳間なり、また、鷗鵲瀬ウセといふ岩島あり、また南に栗子島クリコシマあり、潮汐其左右を漲り通り海崖高く怪石多く磯山の松のみとり眺望の風景絶妙にして名所方角抄等に記載せ、こし潮なとよめりと記す、こし潮とハ湊中に凡百間の長き岩瀬あり、干潮の時にあらはれ満潮の時にはかくる、其岩瀬を潮の越すをいへ

るなるへし、いにしへ我朝三津の其一にして遣唐使も此湊より出帆し、唐土の商船もあまた来りて今の肥前長崎の如き地なり

故に唐の湊といふといへり

筑前博多伊勢安濃津薩摩坊津を日本三津といふとそ

人皇八十五代後堀河院の御宇、坊津飯田備前、土佐篠原孫右衛門、兵庫辻村新兵衛此三人を鎌倉に召して船法三十一ヶ條をさためらる

或

説に波字浦といひ舞鶴浦ともいふ

坊津旧跡記を按するに浦の

形勢梵文の鑿といふ字に似たるゆへ波字の浦と云

又浦の南に飯盛山ありこれによてはしの浦といふともいへり 紀州飯盛山にはしの浦あり 舞

鶴の浦とは舞鶴の形象に似たるとなり

此説皆

一乘院より出て其證とすること考ふへからず

「坊津旧跡記」脱カ

讀人しらす

誰も見よ唐の湊はあし原の国に異なる岩

根松か根

七月十二夜宿坊津偶成

佐々助三郎

今宵坊嶋景 遠客動吟情 潮韻侵墻響 月

光透戸清 澄心懷往昔 屈指數歸程 不覺

窓燈滅 村鷄報五更

坊津即興

圓峯曲岸極奇幽 靈勝古来甲薩州 面海背

山民古故 故尋耆老問琉球

新續大筑波集

はうの津にこゑふり出よ郭公 快温

鹿兒島是枝氏

松葉集

頼めともあまのこなたに見えぬ哉いか、
ハすへきからのみなどに



近衛屋鋪 坊津中島の東にあり、近衛左大臣

信輔公配所の宅地なり

信輔公ハ龍山前久公の御子なり文
祿三年五月御下向、御名を岡佐兵

衛佐と改め給ふ慶
長元年七月御帰洛

天明中地頭仮屋を建る

仮屋初め泊
津にあり

庭に古藤あり近衛藤といへり、昔は松樹に

かゝり蔓延して花咲今ハ松枯れて大なる

イヌマキ

羅漢樹にまとへり、御坐敷の旧跡ハ豎五間

横四間はかり石の圍ひをなす、はしめ信輔

公左遷し給ひし時建仁寺十如院にて永雄和

尚狂歌

道すから車にハあらて大臣をのする鹿兒

島になふ棒の津

此歌ハ松永貞徳の歌道載恩記に見へたり、

公御送別の時御親戚たかひの御詠歌あり

別に記せしものあり爰に略しぬ、御帰路の

クハイチウ

時一乗院住僧快忠法印御別れおしミ奉る歌

に

及びなき雲の上までのほる月の影をしま

れてぬる、袖かな

信輔公御返し

みとせまてすきし浦はにすみ染の袖には

をしき名残なりけり

坊津八景 近衛信輔公當津に左遷し給ひし時

八景の題撰ひて各和歌を詠し給ふ、中島晴

嵐

中島ハ近衛屋
敷の前にあり

深浦夜雨

深浦ハ中島にならひた
る入江にて人家あり

鐘

近衛屋敷南に曹洞宗松山
寺あり、今廢してなし

龜浦帰帆

湊中に在り
桜樹あり

雪

湊口西の
岡なり

網代夕照

網代ハ湊口南に在り、灣曲の所にて濱有
り 恵美須祠を安す 双剣石などあり

御崎秋月

湊を出て南志里に在り、坊津
御崎といふ 大岩に洞穴あり

田代落雁

田代ハ御
崎を廻り

て鹿等の方なり湊を
出て海上凡壹里餘

今其景を写して尊詠を誌す

中島晴嵐

松原やふもとにつゝく中島のあらしには

る、峯のしら雲

深浦夜雨

船とめて苦もる露ハ深浦のおとも渚のよ
るのあめかな

松山晚鐘

けふもはや暮にかたふく松山のかねのひ、
きにいそく山人

亀浦帰帆

かめかうらやつりせぬさきに白浪のうき
たつと見て帰る舟人

鶴崎暮雪

鶴か崎や松の梢もしろたへにときはの色
も雪の夕くれ

網代夕照

磯きはのくらきあしろの海面もゆふ日の

あとに照す篝火

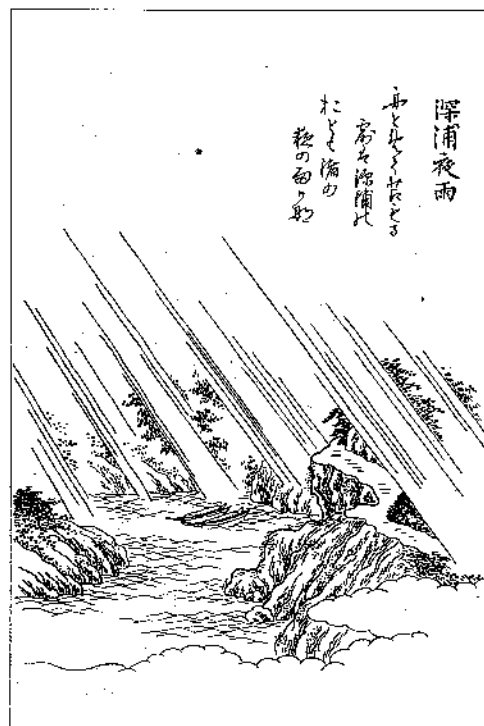
御崎秋月

荒磯のいはまく、りしあきの月かけを御
さきの浪にひたして

田代落雁

行すえハ南のうミの遠方やたしろにくた
るかりの一つら







サイカイコンカウホウニヨイシユサンリウゴンジ
 西海金剛峯如意珠山龍巖寺一乗院

坊津に在り、地頭仮屋を距ること子方式町
 式拾間、広沢派京都仁和寺の末にして真言
 秘密の浄場也、由来記を按するに 由米記ハ延宝元
 年癸丑臘月、前
 住覺山法印達述にて新納又左衛門久了に請て書す所の一巻な
 り。覺山当寺十五世の住持にして後鹿兒島大乘院に移転す 開基ハ
 人皇三十一代敏達帝ビタツ十二年百濟国日羅来朝
 して名山靈崛を遊戲し手自弥陀の像三軀を



彫刻して上之坊中之坊上中坊と坊舎を三所

に當ミ弥陀の像を安置す、而後七百有餘歳の星霜を経て荒廢す、延文二年丁酉の春、

成円セイエン法印旧跡の廢に及びしを歎き今の地に

再營して中興第一の祖となり本尊虚空蔵坐像

定朝作、脇立を安置す、一二王門に如意珠山、本

門に龍嚴寺、客殿に勅願場、持仏堂に大上

皇殿仁和寺孝源大僧正筆の額を掛く、四世ライシヤン頼俊法印ハ聰

敏博覽にして高野根来に遊て教相の奥旨を

極め根来寺快憲學頭に随ひ沢流の玄旨を受、

又、仁和寺智恵門院ユウカイ宥海和尚に随ひ深旨を

承く、和尚之を器として授るに自宗肝心密

法淵源を以てし一流附法の弟子と為す、仏

像道具若干の書籍に至りて附属し国に還り

て密法を弘通すへしと云々、頼俊応永十五

年根来寺を辭して当山に歸り所得の仏像書

籍等を安藏して根来寺の別院となる、根来

寺ハ人皇七十四代鳥羽院の御願所也、故に

毎年七月二日当寺におひて眞影を掛けて饗饌

を備へ追福を脩薦すとなり廿八世住僧快宝所記勅願由來記及び御照覽寶物記等を

按するに、如意珠山一乘院の号ハ鳥羽院の勅号にて長承二年十一月三日当

寺をもて根来寺別院となさしむと云々、此事鳥山所記由來記に見えず、不

審少なからず再考すへし、また日羅開基の時、鳥越山龍嚴寺と名付る所と

寛延四年十月快宝所記寶物案内記に見えたり、此事いか、あるへき鳥山由

來記に載せず、日羅の時ハ坊舎を三所に建て自刻の弥陀を安置し寺号山号

見えず、如意珠山龍嚴寺一乘院の号ハ成円法印再建の時名付る所歟、今一

乘院の後に鳥越といふ地名あり、是によて快宝作る所ならん、快宝以

來鳥越山の号ハ見えたり、快宝筆記にはまこと、しかたきこと多し

八世頼忠法院の時天文十五年三月四日、

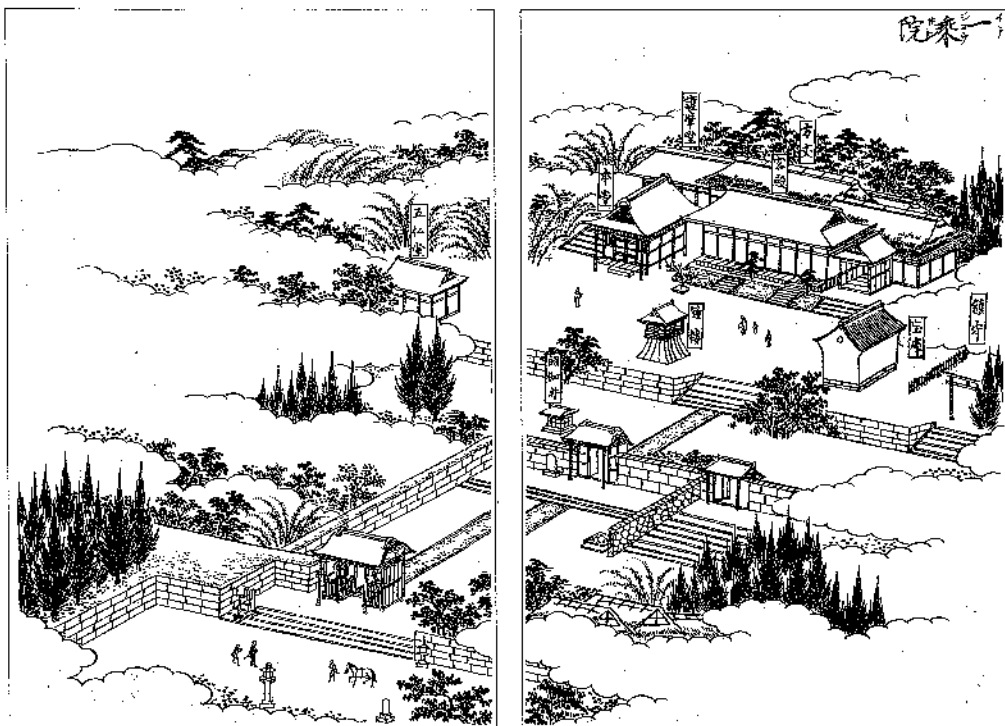
百六代後奈良院の勅願所に補せらる繪旨今に伝へて存せり

又、西海金剛峯五字の勅額震筆の短冊廿枚

を賜ふ、十七世快義上人邦君寛陽公の命を

蒙り上京して寛文五年乙巳九月二日仁和寺

惣法務入道二品親王仁和寺廿七世の令旨を蒙り永く



マニシユキン
摩尼珠院の院家を兼帶せしむ、延宝二年七月十日代々上人号を許さる、又、菊金紋先箱を用ゆ、いにしへより相伝の仏像什物若干あり計るに違あらず、宝物記に詳かなり、寺内十二の名勝あり

十二景

詩仏国高泉禪師

日羅禪石 寺境内山中に在り

林間誰置盤陀石 日與羅公靜結跏 公去年

深石尚在 半対苔蘚半煙霞

加持瓶水 護摩堂の後北方に在り

見説開山精秘典 曾將淨水密加持 疇知法

力難思議 一滴能令湧四維

太守學亭 宮殿の後に在り、大中公實明公御手習の御坐敷なり

邦伯当年德化清 日揮草聖踞斯亭 至今亭

際煙雲跡 猶是龍蛇筆陣形

供奉石牀 宮殿前左
方にあり

片々瓊瑤鋪作席 霜摩雨洗絶苔紋 昔為供

奉人清坐 今也何妨賃白雲

瑞嶺春日 寺の後山
中にあり

廟貌崢嶸嶺路斜 青紅棟宇鎖煙霞 神聰赫々

長如在 為瑞為祥祐國家

石窟白山 前に
同じ

玲瓏乳竇勝瓊丘 誰立靈祠邃且幽 自是神

祇能護國 故存香火享千秋

三寶珠山 宮殿の南に
三山あり

鬱々佳山世所無 千秋屹立對浮圖 幾回夜

半月輪轉 疑是神龍獻寶珠

岩間硯川 二王門の西南三
十間計りに在り

兩畔寒石如削壁 稜々瘦骨立千秋 誰將一

滴陶泓水 化作長川無尽流

關白天神 近衛信輔公手自作り給ひ
て當寺に安置し鎮守とす

力扶社稷平生志 酷愛梅花千里飛 喜有欽

風同志士 精營廟宇壯神威

關伽泉涌 本門の内
右にあり

賴公德業衆推尊 道是羅師七代孫 偶爾着

衣持密咒 關伽涌出水如盆

門外長溪 二王門の前
溪川をいふ

走碧梯藍發遠源 泓澄竟日繞山門 不須喚

作長溪水 正是琅々演密言

聯芳梅花 宮殿の前にある
坐論梅なり

誰移異種此中栽 不是羅浮瘦嶺來 兩々聯

芳如仲伯 任地霜雪了難摧

登如意珠山一乘院 佐々助三郎

千歲道場景況濃 四圍山水幾重々 寺開百

濟羅公力 僧唱中天薩埵宗 奇樹怪岩青蘚

鎖崇堂傑閣白雲封 苾芻七十精神健 往事

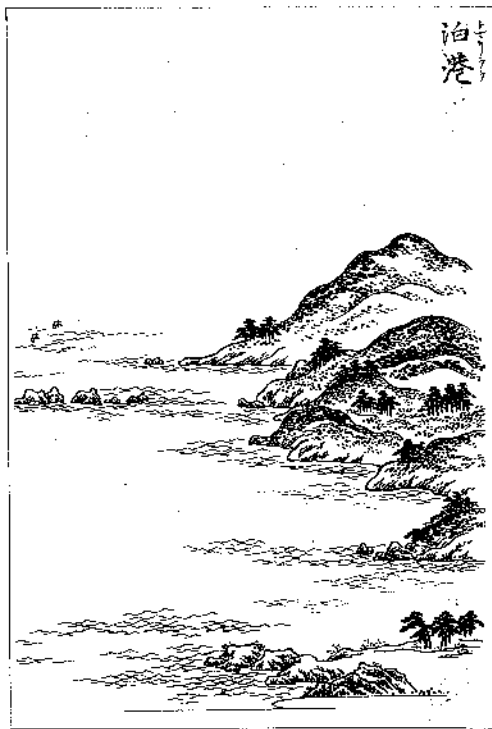
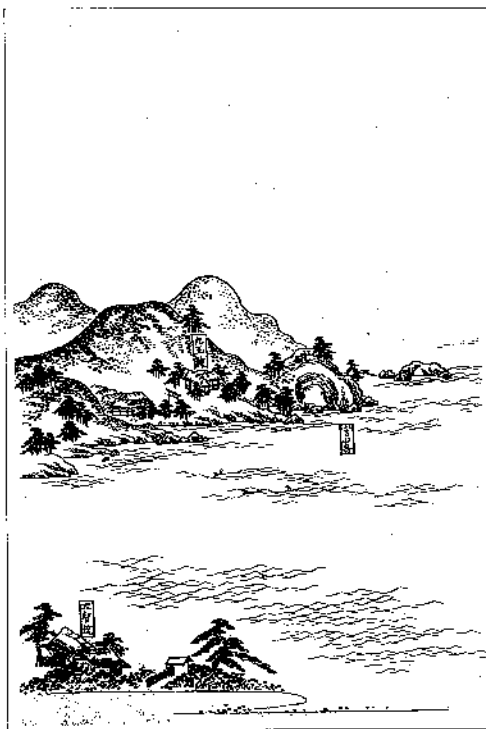
談來至暮鐘

硯川 一乘院二王門の西南三十間許り濱手の
方路の左、岩間より出る少しの流水なり、
信輔公硯水に用られしとなり、一乘院十二
景岩間硯川とハ是なり

泊湊 泊村にあり、この浦の湊ハ廻り凡壺里
許りの入海にして、口ハ西方に向ひ深きこ
と纔に拾尋許り岩瀬多くして大船の繫泊な
りがたし、風景ハ尤よし、無量壽山大智院
の下海濱一松樹のもとより見る所の図を写
して左に載す

九玉大明神 泊村に鎮座 祭神一座 猿田彦命正祭
十月廿八日

神社考云、梅岳公勸請し給ひしといひ伝ふ
坊泊一郷の惣鎮守なり



洪禪院 坊村にあり、地頭飯屋を距ること亥

方式町余、一乗院の末にして開山日羅、本

尊地藏菩薩作者未詳

無量壽山西勝寺大智院 泊村にあり、地頭飯

屋より丑寅方十一町 一乗院の末寺なり、

三十一代敏達帝の時百濟国日羅開基にして

本尊阿弥陀如来立像は日羅白作のよいひ

伝ふ

東光山海印寺 泊村にあり、地頭飯屋を距る

こと子方十八町余、開基延文二丁酉の歳な

り、本尊薬師如来長一尺 作者未詳 開山光叟和尚貞治元年壬寅

六月十七日遷化 伊集院広濟寺の末となる、邦君大岳

公の牌を安置して大檀那とす、大岳公泊浦

におはしまして文明二年正月廿日逝去し給

ふ故ならん、御飯屋の旧跡当寺の申方二町

余にあり、又、茅野村にも御飯屋の跡あり

海室山清水院法光寺カインツサンセイスイセン 泊村海辺にあり、地頭

飯屋を距ること子方十九町余、藤沢山の末

にして開山寂然其阿上人シヤクチンキアシヨウニン、開基年月詳かな

らず、本尊阿弥陀如来長一尺七寸五分 観音勢至一尺六分

春日作にして日本三昧の阿弥陀なりといへ

り一を二條誓願寺本尊二を日州福島昌福寺本尊三を当寺本尊といふ 寺は小地なりといへ

とも本尊希代の靈仏にて祈れハ必す感応あ

り、初め宝光寺といひしを大濤の為に崩れ

し時、遊行三十五世法ホフジ介上人宝字を改め法

字となすといへり

鹿籠

枕崎 枕崎村にあり枕崎村ハ鹿籠村の枝なり、喜入主水久欽領分にて飯屋ハこゝにあり 麓

を距ること午方廿五町余、凡廻り一里の入

江にして眺望の景甚た美なる川湊あり、文

祿中近衛信輔公坊津に左遷し給ひし時　こ
の浦より船おりし給ひて和田濱松樹の下に
休み給ひ一首の御詠歌ありといひ伝ふ

薩摩かた和田の崎なるひとつ松きりのう
ちより船よほらむ

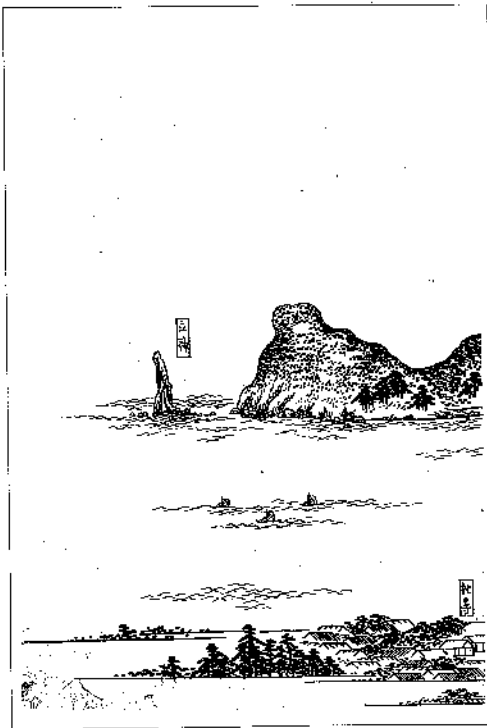
邑人其松を伝へて近衛一松といふ、古への
松は風波潮水の為に侵れて枯れたりといへ
り、寛陽公此浦にて鹿籠絶景の尊作あり

鹿籠絶景

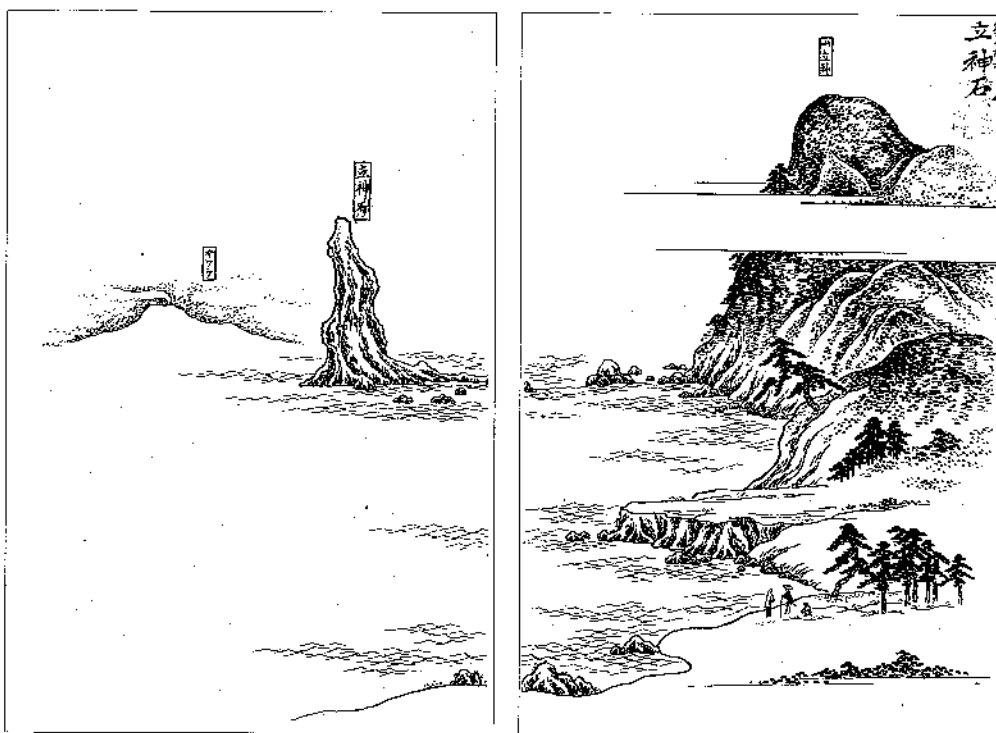
光久漫製

村縣暮蕭森　立神護海心　風聲清蔓舫　日
影淡飾金　鷗睡沙何遠　魚游水自深　垂漁
寒凜々　望眼縦高吟

立神岩　枕崎未方海上二里にあり、山立神を
距ること辰巳方海上八十間許り、海中に突
出して其高きこと三十間、廻り八十間、南



枕崎海濱自傳
在可也



海うけて風濤あらく瀬岩多し

金山 鹿籠村にあり、凡一里二十余町、一團の山なり、日日山中に入り金石を鑿、手籠に入れて腰に付山を下り鍬鋤をもてくたき、碓に入れて粉となし、又 石礪にのせて細抹にし、ゆり鉢に入れて水に浮へ砂金をゆり、石と黄金とを分るなり、夫より風竈をもて玉金となす 金山の事隅州桑原郡横川金山のところに詳かなり

久志秋目

九玉大明神 久志村礼辻の上に鎮座、地頭飯屋の辰巳方一町余 飯屋今無し宅地あり 祭神一座 猿田彦命正祭九月十五
 勸請年月詳かならず、寛正五年甲申九月八日棟札に領主藤原国久、地頭藤原秀家と見へたり、造立再興を記さす、国久ハ島津薩摩守国久なり、本田親盈所記神社考に梅

岳公勸請し給ふと志るす、寛正は梅岳公以前の年号にして誤なり、是を久志村の惣鎮守とす

久志浦 久志村に在り、入江にして廻り凡三十五町余、深きこと凡七尋唐船入十二町余博多浦網代などいふ所あり、曹洞宗東泉寺の下より遠望する所の図爰に載す

色変松 久志村桑原といふ所にあり、地頭仮屋の卯方三町余、廻り三抱許りの松の一本、春は枝葉を生して緑色深く、秋に至れば葉色を変して黄色となり嵐の音も吹上の濱松かえの如くなり、又、来春に至りてもとの如し、故に邑人いろがはしの松といふ、むかし此所桑原寺といふ寺ありて庭中の松なりといひ伝ふ、桑原寺ハ廢して今なし、



久志港
自東泉寺
下所見

宝亀山阿弥陀寺安養院 久志村博多浦にあり

地頭飯屋を距ること巳午方十五町余、真言

宗坊津一乗院の末にして本尊地藏菩薩、開

基年月詳かならず、開山中天竺法幢仙人チウテンチクホウドウセンニン 嗣

化法不詳宝亀年中來朝して開基、宝亀山と号す

又、宝亀中亀ありて海中より弥陀の像を背

ひ米りたり、よて宝亀山と名くといひ伝ふ、

今其阿弥陀如来木像立像ハ当寺の戌亥二町許り

に安置す、或説にむかしの如来ハ行脚僧盜

みたりといへり

御飯屋跡 秋目村清水川のほとりにありて海

辺なり、木船山を後にして前ハ入江是を秋目浦と云ふ 深

きこと磯に四尋許りにして南海を
受て波高く大船繋ること能はず大島小島あり大島に天満自在
天神を安し小島

に弁財天を置く西南の方に鶴はみ崎立神など見えて

風景尤よし、持明君琴月公夫人御飯屋ありし所と

云ひ伝ふ今、辺牟木周蔵
国郷宅地となる御飯屋跡異三十間許りに

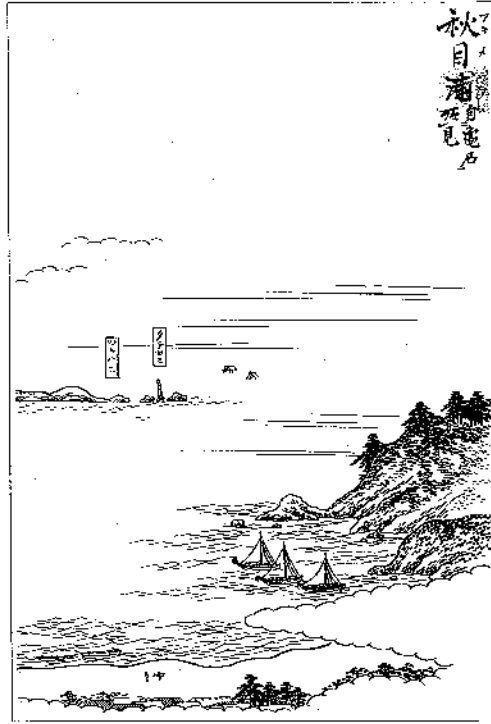
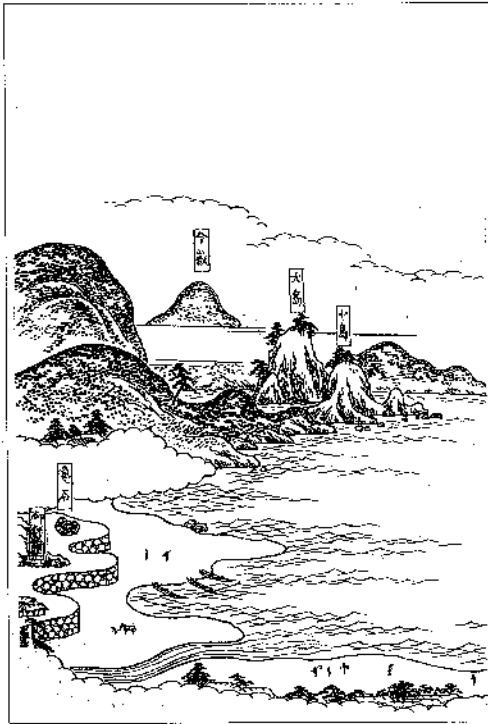
亀石と名付く石あり竪六尺四
寸横四尺近衛信輔公坊津

におはします時遊行し給ひ爰に來りて御腰

を掛られしと云ひ伝ふ、亀石より望める秋

日浦の風景を写して爰に載す

秋目浦
見



仏徳山正法寺 秋目浦にあり、曹洞宗加世田

日新寺末にして開基年月詳かならず、開山

玉渚等璵和尚日新寺 坐像長二尺三寸 五分作者未詳 本尊阿弥陀如来

初め海蔵寺といひしを元和六年庚申八月持

明君琴月公 夫人再営して田を寄附し菩提寺となし

正法寺と改め給ふといへり、故に牌を安置

す 本尊弥陀の脇に聖観音を安置して寛暲公元和六年八月彩色を再興し坐像の下に其事を記し給ふと前住唯大記由緒帳に見へたり、是誤なり

今其坐像の記を見るに藤氏光秀再興とあり、光秀ハ君夫人秋目村を領し給ふ時地頭飯牟禮権右衛門光秀なり

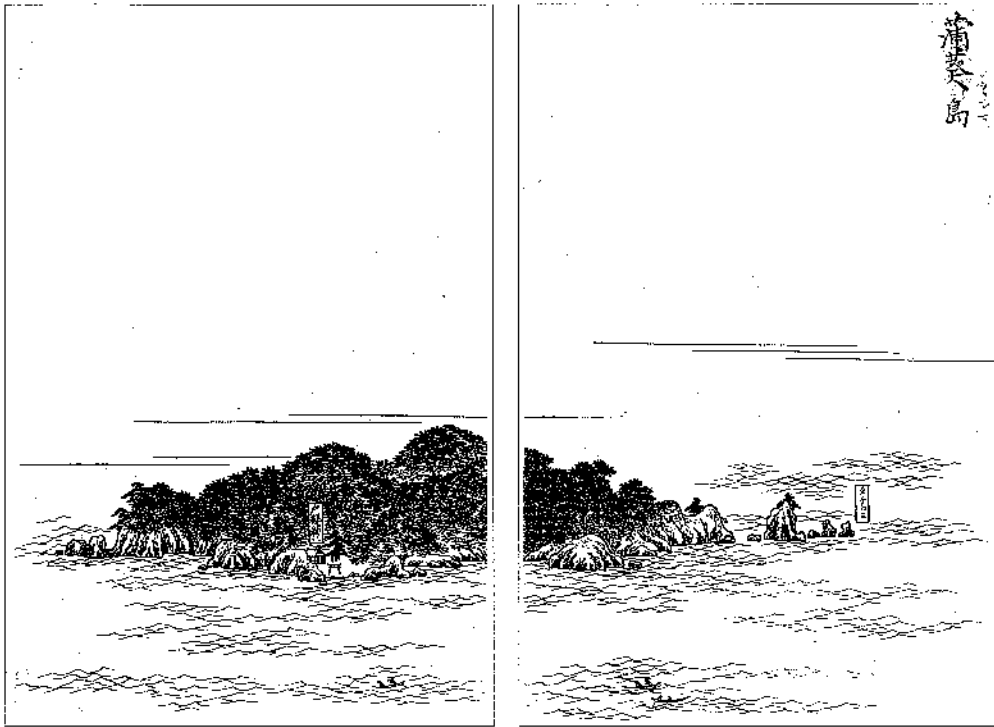
檳榔島 秋目村の属島にして浦を距ること海

上一里にあり、島廻り凡一里、枇根樹多し

戸柱大明神素戔鳴尊稻出姫 命祭八月十五日を安置す、古昔此島を

秋目島といひ今の秋目村ハ木下村といひし

といへり、下大瀬より図を写して爰に載す



九玉大明神 秋目村に鎮座 地頭飯屋を距る

こと子方凡二里 祭神一座 猿田彦命止 祭九月九日 元龜二年

戊午卯月以来の棟札あり、梅岳公九玉社を

七ヶ所に建立し給ふ其一なりといひ伝ふ明

和五年戊子二月廿七日社火災にかゝり来由

委からず、久志秋目 秋目村八口加世田の内にして持明君御領なり 地頭東郷十左衛門か時久志村

に属す 一郷の惣鎮守なり

加世田

笠狭御崎 片浦村、赤生木村両邑に跨り辰巳

を赤生木村、亥子を片浦村といふ、周廻詳

かならず、野間嶽といふ片浦の人家を出て

巔に至る行程凡一里、地頭飯屋を距ること

酉戌方五里十七町餘、地神三代瓊々ニ、キノミゴト許尊日

向襲之高千穂峯に天降りして、しつまり給

ふへき所をもとめられしに事勝国勝といふ コトカツクニカツ

神参りて吾居たる吾田^{アタナカヤカサ}長屋笠狭の御崎なん
 よろしかるへしと申て此所に到り、すみ給
 ひけりと神代巻に見へたり、能因法師か歌
 枕に薩摩国名所かさし野といふあり、今按
 するにかさ、をかさしと伝写の誤れるなる
 へし 絶頂に娘媽^{ラウマ}権現社を安置すゆへに今
 是を野間嶽といふといへり 野間ハ娘媽の唐
 音の転語なり

沖は夜立月はかさ、の御崎かな 南暁

大日本國鎮西薩摩州娘媽山碑記^並 銘

記稱、滑州神姑、顯跡久矣、銅鑪遡流、

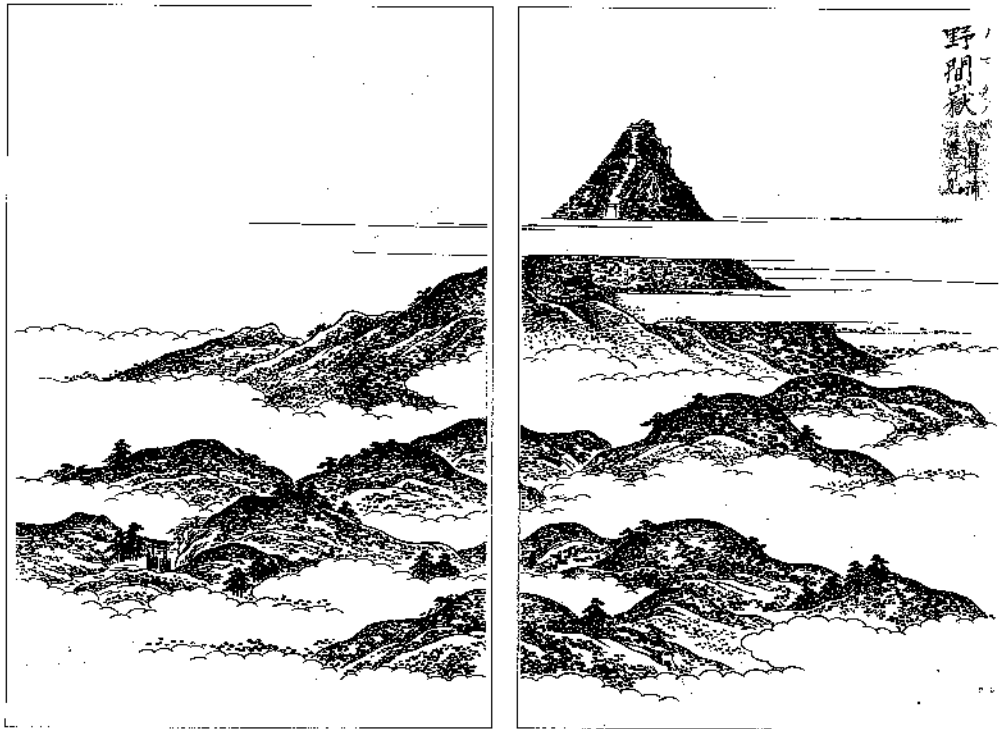
枯槎顯聖、騰雲駕空、叱風驅波、或如嚴

馭鏘鏘、閃忽往来有聲 是皆神之所依托

而通現^要通現、不一其方、猶如大士三十二

相普應幻化之罔窮也、隨跡立廟、有廟必

祀榮貽慶封 曆代有命、天下府州縣衙、



海濱河陬、列土崇祀、望秩等於嶽瀆、誥命準乎天后、有宋以來神祀未有如是之享盛也、蓋其護國庇民搗邪扶正、為萬世不磨之典已爾至如我、大日本國薩摩州川邊郡加世田娘媽山宮廟、其來尚矣哉、古老之言曰、有中華神女、機上閉睫遊神、顏色頓變、手持梭足踏機軸而眠、狀若有所挾、母怪急呼之醒而梭墜、神女泣曰、阿父無恙、兄沒矣、頓而報至果然、彼時父於怒濤中幾溺、似有護者獲安、兄舟忽然舵摧、顛覆莫救、神女酷哀出柔輦音、誓願曰、當來世海中遇難者、念我乞救護、我必應之、令得度脫遂投身入海、其內身臨此、皮膚麗如桃花、身體煥如活人、觀者如堵、遠近大驚之、知其非凡人也、舉

而以禮葬焉、後三年中華來尋、彼欲分其神骨以歸葬云、噫、神變固罔極、此蓋顯跡之最著者也、國君特立廟山巔號曰西宮、春秋二祀、虔依典禮其像馥郁甚香、識者謂伽南木、恒封鎖閤不獲觀、有三華表、自一華表至巔十八里而遙、山皆樹木蔭森、多堅木、鋸可棟梁、人懼雷霆之震、即樵者不敢加斧、有通天小徑、苟非攀蘿捫葛、則弗能躋最巔、巨石層層如玉版然、三面俱海、西北衝溟渤之外、卓立雲端、望之儼如寶幢、信為一方尊標也、凡高牆大舶、一葦片帆、靠海為利者、莫不遙拜默祝、而咸賴焉、座主僧歲以八月至九月終舍二華表本地堂、脩瑜伽密法、禱禳國家太平風順雨若海天寧靖、賈舶通利訖十月朔下

山原夫東宮者居先而西宮配焉、傳言中天竺摩伽陀國王子乘飛車來止於山下、旌其駐蹕曰神渡、既而此去他山脫其玉冠留之、國人名其山曰冠嶽山、立祠號冠嶽權現、又去他山卸紫衣裾留山、立祠號紫尾權現、終去之紀州熊野山、其國人立祠號曰熊野大權現、吾聞之、熊野大權現ハ伊弉冊尊而女神也、今夫尊與后配祀東海西鄙之極、偶爾会成、陰與陰濟不可測識矣、恭惟、后閭興化莆田縣人也、始祖唐太子詹事上柱国林坡公生子九人俱賢、憲宗時、各授州刺史號九牧、林氏曾祖保吉公、乃邵州刺史蘊公六世孫州牧圍公子也、五代周顯德中、為統軍兵馬使、時劉崇自立為北漢、周世宗命都檢點趙匡胤、督戰於高平

山、保吉與有功焉、後棄官隱於莆之湄州嶼、保吉公子孚承襲世勲、為福建總管、孚子惟慤諱愿 為都巡官、即后父也、而邵州刺史蘊公九世孫女也、娶王氏生男一名洪毅女六后其第六乳也、二人陰隲施濟敬祀觀音大士、願得哲胤為宗支、夢大士告之曰、爾家世敦善行、上帝式佑、乃出丸藥示之云、服此當得慈濟之貺、既寤歆歆然如有所感、遂娠、二人私喜曰、天必賜我賢嗣矣、越次年宋太祖建隆元年、庚申三月二十三日方夕見一道紅光、從西北射室中、晶輝奪目、異香氤氳、俄而王氏腹震、即誕后、里隣異之、后彌月不聞啼聲、因名曰默、(九八七)雍熙四年丁亥、后年二十九秋九月八日、后告家人曰、心好清淨、

塵寰所不樂、明辰乃重陽日適有登高之願、預別衆以為登臨遠眺、不知其將仙也次晨后焚香誦經畢、偕諸姊以行、后独徑上湄峰高處、衆莫隨之、恍聞空中絲管、直徹鈞天之奏、恰乘翱翔風翼、靄靄于蒼旻、衆咸歔歔驚嘆、但見雲端之內、徘徊俯視、若隱若現、忽彩雲布合、不可復見、嗣後靈異、鄉人或見諸山巖水洞、或得之升降處跌坐、常福庇於民、里人敬之畏之、相率立祠祀焉、號曰通玄靈女、今以重九日係后昇天之期、后嘗化靈光降伏順風耳千里眼二將、次伏晏公為總管、三伏嘉應嘉祐、列為水闕仙班一十八位內、凡舟人值危厄時、披髮虔請求救、悉得默祐云、昇哉后也出沒隱顯滄海浩宵、出凡情之表、

若其肉身之臨、昇天之化、事蹟齟齬、難以確從、論者將孰與乎、吾謂振古載籍、豈盡為耳提目擊而傳者耶、即今土老之言、渺不足信、然亦斷碑殘碣爾、其昇化之於肉身、豈容視為二哉、綜乎蹟跡已焉、山麓一十二里有龍泉寺愛染院、別構祠祀便於四來香火、閩客某懇請尊像暨二將奉置焉、閩魏氏裝載一小舟金銀珠玉綿繡綾羅等物供之、謂答神庥、當日施者紛拏、未易彈述、今歲冬座主榮昌特航海、手携國叔久達公書啟至、兼齋廟貌山嶽凶形蹟跡來由、謁予徵為文記、勒諸貞珉永為不朽計、予惟謏陋無似、奚敢應諾、然於國有旧、分宜底傲、是不顧文之不文、直叙神之為神、謬考史籍用為記焉、并繫之以銘、

銘曰

大哉聖母、万古英靈、廻天幹地、是緯是經、
蠅蟲草木、風雨雷霆、有求必応、炯不間聴、
昭昭神爽穆玄冥、葦龍馴伏、魔衆來寧、
下自篙老、上及朝廷、範金挺土、靡弗資型、
分身云舍、喬嶽永停、祥雲瑞靄、映蔽藩屏、
煌煌日域、斯昉斯銘

時

宝永三年丙戌臘月日

肥 長崎後学高玄岱謹撰

愛染院現住澤周房榮昌

野間山大権現略縁記

抑薩摩の国野間山といへるハ、大悲の靈場也
往古唐土福建の南海に甫田といふところあり
此浦の漁家林氏の娘生れて靈異あり、十餘

歳にして我ハ是海神の化身なり、海洋に入て
往來の舟を守護すへしとて、忽海水に没死す、
則甫田に廟神を建て船神と是を崇祭りて今に
あり、時に大明の天子より天妃姥媽の謚号を
賜り、則觀世音菩薩の化身として唐土の諸船
甚た尊敬し奉ぬ、其海洋に没せし尊骸ハ流れ
て薩州の海邊に寄來れるを取あけ、則山上に
葬奉り畢ぬ、其後種々靈異の事とも有て往來
の船の諸願を叶へ給り、仍て長崎往來唐船も
洋中にて初て此靈山を見れハ紙錢を焼金鼓を
ならして拝祭せり、是よりして此山を野間山
権現と号せり、野間の和訓ハこれ娘媽の唐韻
の転語なり、又長崎の津外七里南に野母とい
へる浦里あり、高山の麓に寺あり、本尊一体
御長七尺行基菩薩の作にて元亨釈書にいへる

曰御崎觀世音これなり、此高山の下を日の御崎といふ、唐船も又是を遙拝す、野間と野母の通音にて殊にいつれも觀世音の靈地なればなり、皆姥媽の転韻なり、故に野間野母の両山ともに唐土の人ハ天堂山と号し奉りぬ

右ハ崎陽西川先生の文にして則是を長崎夜話草と題し五卷の草紙にしてありしを^予乞^乞求めひしてつれくなる雨夜の折にひとり寝の友と詠めしに、如何して洩なん薩陽の聖師娘媽の卷計りを写しくれよとせちに乞給ふによりて求に応し侍る

于時天明六稔丙午仲冬二日

崎山一人瓢軒 恕柳

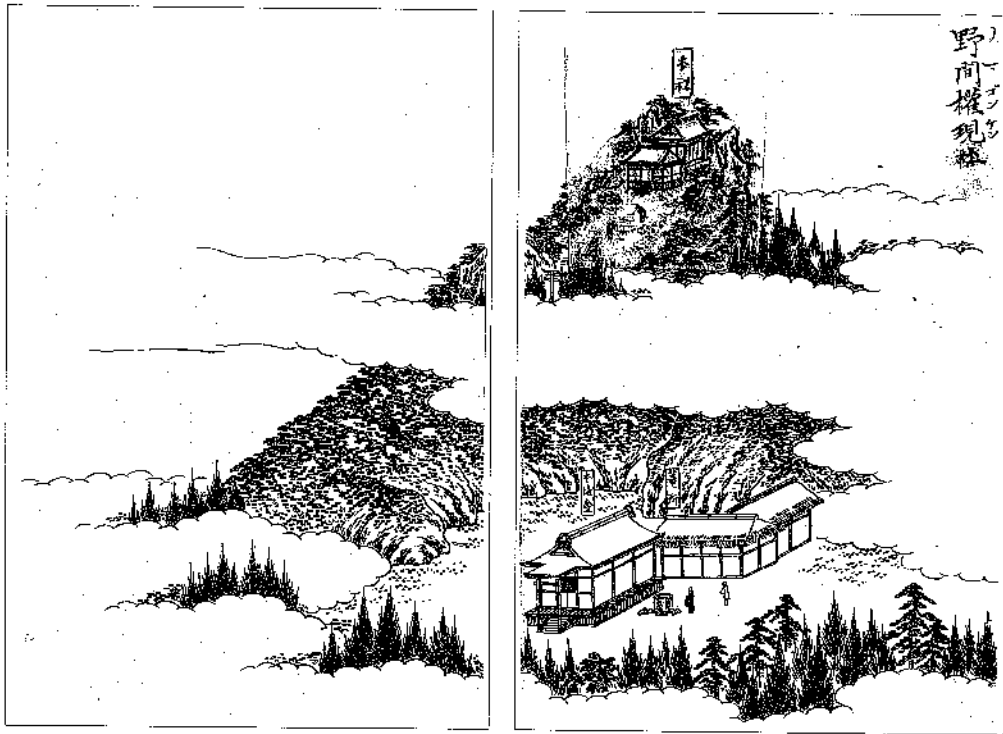
野間山権現 笠狭御崎の巔に鎮坐^{即赤生木村なり} 一

社に両殿を安置し東宮西宮と云ふ、勸請年

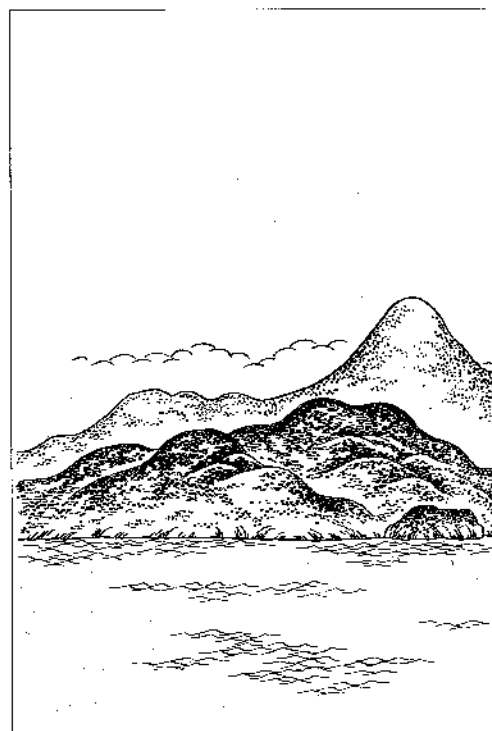
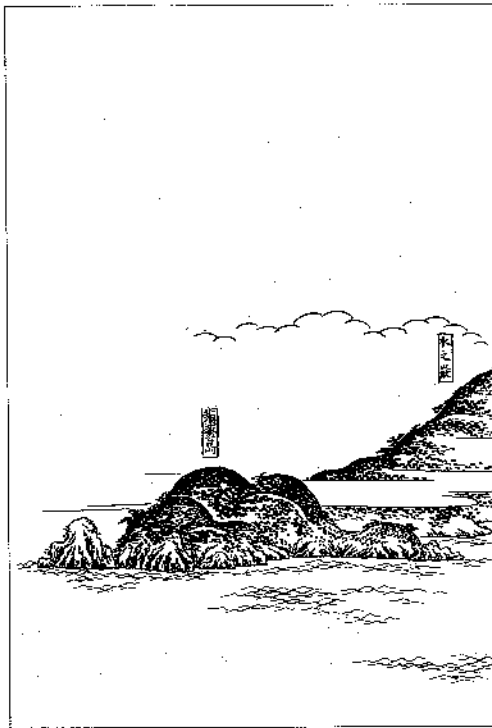
歴詳かならず、東宮二坐^{伊弉諾尊伊弉冊尊} 西宮

三坐<sup>娘媽神女左右千里
眼順風耳共に本像</sup> 正祭正月廿日、神官本田

親盈所記神社考に野間権現祭神六坐、東宮瓊々杵尊、鹿葦津姫、西宮火闌降命、火々出見尊、火明命、其後娘媽国の婦人流れ来りて当社に会祭す、よて野間権現と号すと云々、今謹て按するに天津彦々火瓊々杵尊日向高千穗峰に天降りし吾田長屋笠狭御崎に至り住給ひ鹿葦津姫をめして妃となし給ふ事神代卷に見へ侍れハ、ここに此二神を祭神となすという説據ところなきにもあらず、然れとも社司及ひ代宮司別当寺等の伝ふる所とたかへり、西宮に火闌降命火々出見尊、火明命を祭り、後娘媽の婦人を会祭すと云説おほつかなし、今神体を拝するに



西宮ハまさしく天妃の像と千里眼順風耳にして、彼の三神の体にあらず、神ハ体顕ハささるをもて神とし、其妙用測るへからすとハいへとも東宮に二神の像を安し西宮に三神の像を置さること心得かたし再考すへし、されハもとより一社ありしに天妃を此嶽に祭り社殿を建るに及て東西を分ちて東宮西宮とよひ神号を野間山権現といふなるへし、天妃の事ハ宝永中肥州長崎高玄岱撰する所の碑銘及ひ近頃一瓢軒恕柳贈る所の略縁記に委し、よて爰に略す、一華表ハ片浦赤生木両村の境に建、二華表に至ること一里餘、二華表ハ三の華表をさること凡六町餘三の華表ハ本社の前にあり、本地堂阿弥陀を安す、新仏娘媽山の扁額を掛く、二華表の外に安す、側に別当



籠所あり、古へ東西宮殿を別にして、東宮

八天文廿三年九月、西宮ハ永祿十年九月梅

岳公再興し給ひ小社といへとも神殿の美麗

他社に異なりしに、一旦大風の為に廢し姑

く仮殿を建て東西の兩宮を一社に安すと云

ふ、梅岳公以来代々の邦君崇敬厚く正祭に

ハ毎歲番頭役のものをして代拝をなさしめ

地頭飯屋の庭上におひて神幣を勧請し旧式

の祭祀あり

宝曆六年六月愛染院住僧若す所の由緒記を按ずるに、梅岳公の加世田城を攻るや誓願の旨あり、よ

て別當寺愛染院を再興し御縁に参詣し給ひ一華表に至り給ふに守護不入山

といふ扁額あり、公奇異に思ひ即ち引返し給ひ神幣を庭上に勧請して祭祀

をなさしめ、はからずも緑林の害をまぬかれ給ふ、實に天文九年正月廿日

なり。公逝し給ひて後も正祭にハ神幣を守下り庭上に勧請して祭祀ありし

に、冢作をこほち除しめ給ひしにて地頭飯屋の 社司鮫島三

太夫、代宮司宮原大助、別當寺を愛染院と

いふ 神渡 野間山の南赤生木の海濱にあり、昔時

娘媽神女の尊体流れて来り着たる所と云ふ

近世辨巧ベンコウ トモカラフトの徒浮屠の妄説を信し天竺摩加陀

国王子来りて此所に止るにより名つけしな

と生民の耳目を塗るもの多し

田中宮 片浦村にあり、娘媽山の麓戌亥方一

里許、大当の内なり、田間に小社を営ミ別

火所を造り野間山代宮司八月朔日爰に参籠

して別火をなし野間山権現を祭り別火所に

籠り十月朔日祭りをはるといふ、今其故事

を問ふに、いにしへより伝へたりし祭とて

答を詳かにせず、正祭ハ八月十五日、九月

九日兩度なり、娘媽山祭祀の神酒を造り神

供を調進する所なり

諸白川 赤生木村にあり、秋目村境の小川な

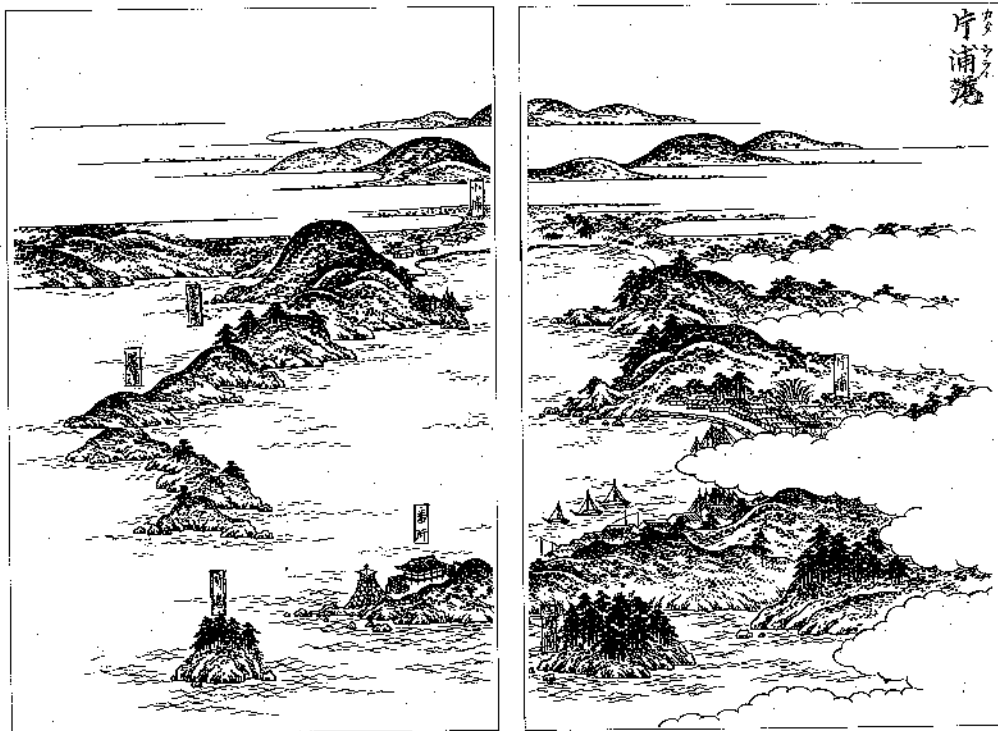
り秋目浦より子方凡十町許近衛信輔公此水を吞給ひて諸白

の如しとの給ひしと云ひ伝ふ、傍に御腰掛の石もあり

黒石濱 片浦村にあり、棧敷島の酉戌方にて凡五十間許りの濱なり、黒石大小を打寄て奇麗にして邑人碁石濱と名付遊観するもの多しといへり

片浦湊 片浦村にあり、娘媽山亥子方なり、地頭飯屋を距ること酉戌方五里四町餘、湊口北に向入十三町横六町餘、深きこと十八尋、湊口に立場島あり、森々たる松林にして能風波を凌ぎ、又立場島戌亥の方高島といふ小島あり、湊辰巳の方に人家ありて小浦といふ

棧敷島 小浦の海中にあり、廻り凡六町、梅岳公御船にして遊行し給ひし所とて御棧敷



の旧跡あり

松島 小浦の海中棧敷島の寅方にあり、廻り凡六十間許りの岩島にて三四株の松樹あり、梅岳公御詠歌あり

日新記

立かへりまたや来て見ん松島に

うちおとろかすおひの白波

笠石 赤生木村にあり、高一丈許りの岩にて笠を着たるに似たり、下に小社を安し笠石権現といふ、大浦村の渚つゝきにして潮入の所なり、享保中石を築き田地となしむかの風景今ハなし、梅岳公御詠歌に

旅人の時雨にぬれし大浦渚

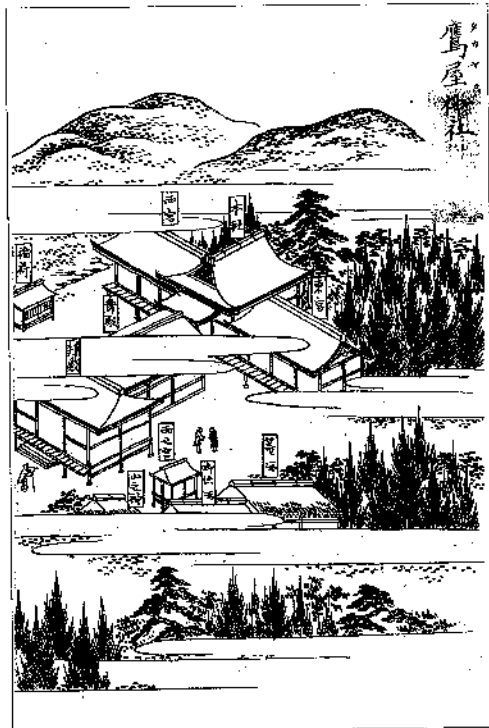
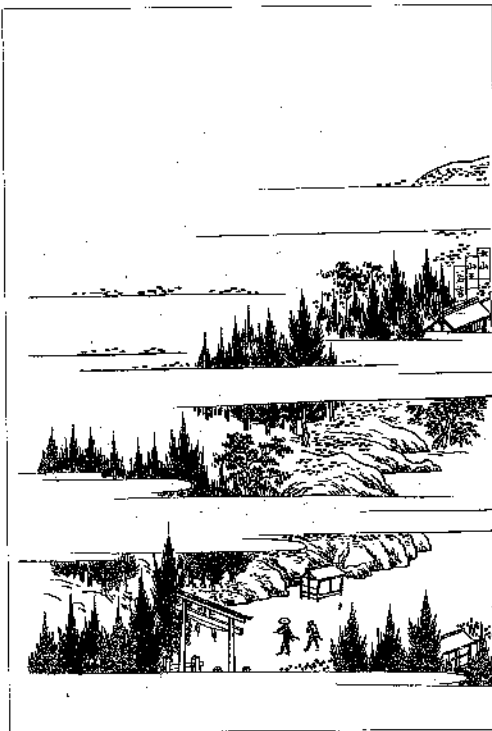
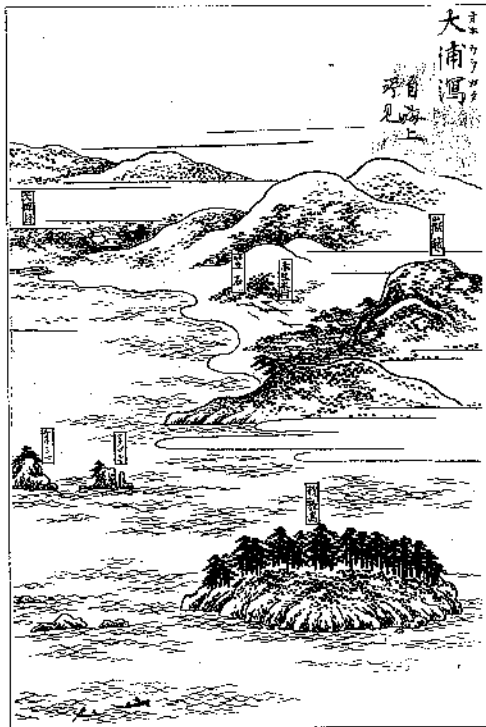
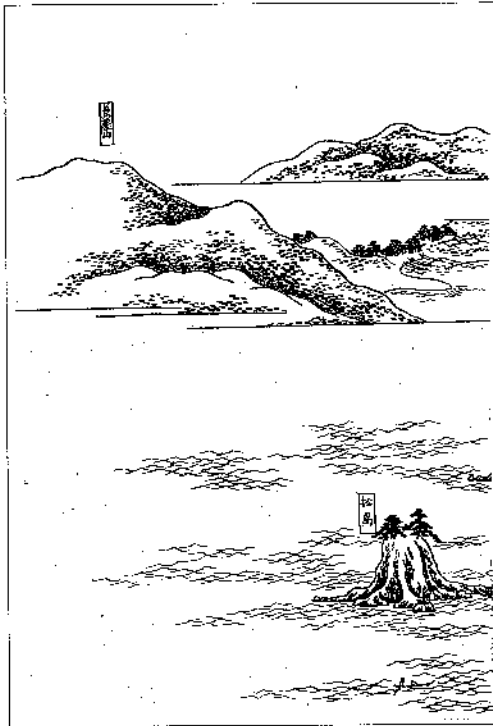
かさいしもあり笠松もあり

鷹屋大明神 宮原村に鎮坐す、地頭飯屋の亥

方十九町、祭神三坐

本殿に彦火々出見尊、東宮火闌降命西宮火明命 正祭九月九日 初め

内山田村竹屋郷に鎮坐ありしを此所に遷坐したりといひ伝ふ、慶長十五年六月十四日再興あり、其棟札裏に応保元年十月七日造立畢と見へたり、応保ハ人皇七十八代二條院の年号なり、此時初て社殿を草創したるにや、また、今の地に遷したるにや詳かならず、竹屋ハ神代巻に所謂三神降誕の地なる故に三神をもて勧請したるなるへし、今に本社の方二里許に竹屋郷といふ嶽あり、絶頂に二畦許りの平地ありて邑人宮跡なりと云ひ伝ふ鷹屋ハ竹屋の同訓にて通し用ゆといへり是を加世田の惣鎮守とす



竹屋郷 内山田村にあり、地頭飯屋を距るこ

と辰巳方凡一里餘、河邊郡山田の境なり山下

田村の境にて里民竹ヶ尾と云ふ此所ハ地神三代天津彦々火瓊々杵

尊日向国襲之高千穂峰に天降りし吾田長屋

笠狭御崎に至りて住給ひし時、此国の美人

鹿葦津姫一名吾田津姫亦名木花開耶姫といふ天神大山祇神を娶りて生ミ給ふ子なりと云々をめして

妃となす、一夜に娠ぬ、尊あやしめ給ひけ

れハ姫腹立て無戸室ウツムロを作り篋り居て誓曰、

天孫アメミズノミコの胤に非らすんハ焼亡ひなん、天孫の

胤ならハ害する所なからんとてミつから火

を放ちしに、三人の御子生れ給ふ 焔のお

こりける時生ますを火闌降尊と云ふ、火の

盛りなりしに生ますを彦火々出見尊と云ふ

後に生ますを火明命と申す、此三人の御子

をハ火もやかす、母の神もそこなはれ給は

す、時に竹刀をもて其児の臍帶を截、其棄

てし竹刀終に竹林となる 故に彼地を号し

て竹屋と云ふと日本紀第二卷に見へたり

竹屋郷即ち其無戸室の遺跡にして高山なり

今ハ草木生ひ茂り容易に登ることなりかた

し、一日山上に到りて其地形を觀るに巔に

二畦許りの平地あり、邑人伝へて鷹屋神社

宮跡なりと云ふ、亥の方十町許り嶽の下に

舞敷野モシキノと云ふ広々たり地あり、上古社殿の

爰にありし時社官住居せし所といふ里俗上舞敷野、下舞敷

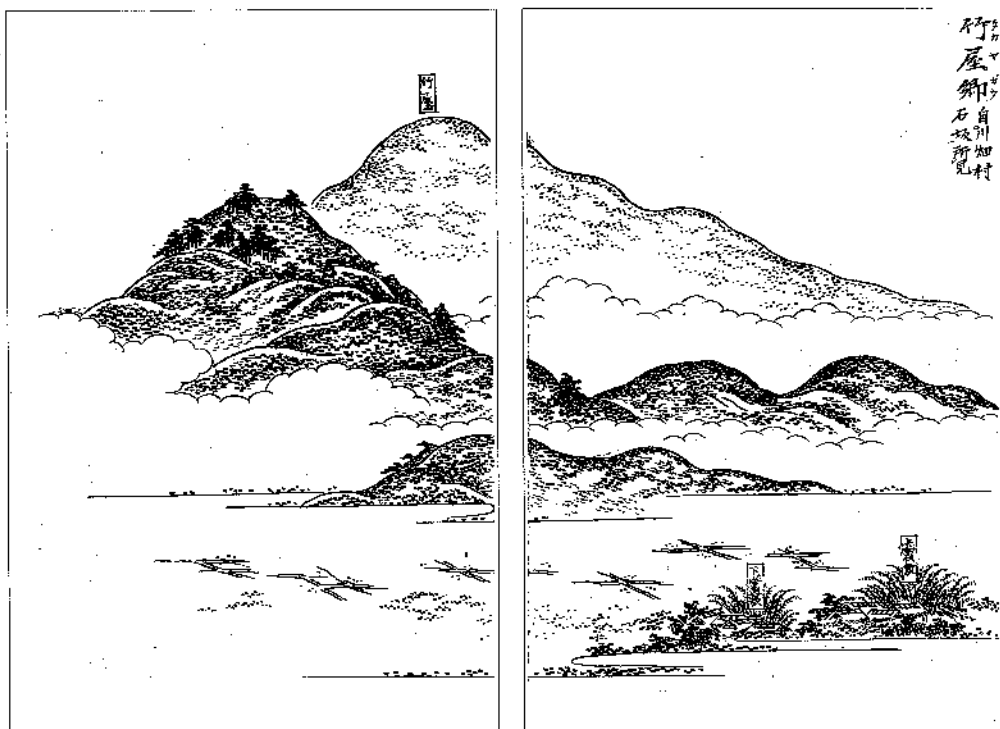
丑寅の方二十町許りの所に鳥居口と

いふ畠地の字あり、鳥居のありし所なりと

いひ伝ふ、前にいへることく無戸室の遺跡

三神降誕の所ゆへ三神をもて勧請したるな

るへし、また、巔を下り凡五六十間許りキン篋



竹^{チク}という竹生したり、所謂竹刀を棄て竹林となりし遺跡ならずや、今に吾藩竹を刀に作りて臍の緒を切こと此故事を尋てかくすると云ふ、笠狭の御崎ハ申酉の方にありて長永といふ高山前に横リ嶽の巔はかり見へ^{「たハ脱カ」}たり、長永ハ大浦村にありて神代吾田の長屋と云ひしハ此長永の事ならんか、長屋をちやうゑと訓し後世誤りて長永と書たるならん、再考を待へし、辰巳の方に開聞嶽も見へたり、神代卷日向吾田と記すハ薩摩国ハ旧日向なるゆへなり、倭名鈔に薩摩国阿多郡鷹屋あり、加世田郷ハいにしへ阿多郡なれはなり^{河邊郡に属せし年月未考}

龍護山日新寺^{リウゴサン} 武田村にあり、地頭飯屋を距ること未方三町餘、曹洞宗田布施常珠寺の

末なり、島津薩摩守国久の開基にして年月

詳かならず、本尊釈迦如来作者 未詳開山泰翁有タイソウユウ

仙和尚文政十二年七月十八日遷化初め保泉寺と号して谷山皇

徳寺の末なり、永禄七年甲子の歳梅岳公重

興し給ひ菩提寺となし位牌を安置し、公没

後泰翁七世の住僧梅安和尚遷化年月未詳保泉寺の号

を改め日新寺となすと由緒記に見へたり

寛政十年戊午正月十五日夜火ありて寺屋悉

く焼亡す、旧範に従ひスミヤカ亟に寺を造営し山門

を修し龍護山の扁額を掲げ、今公照天の二

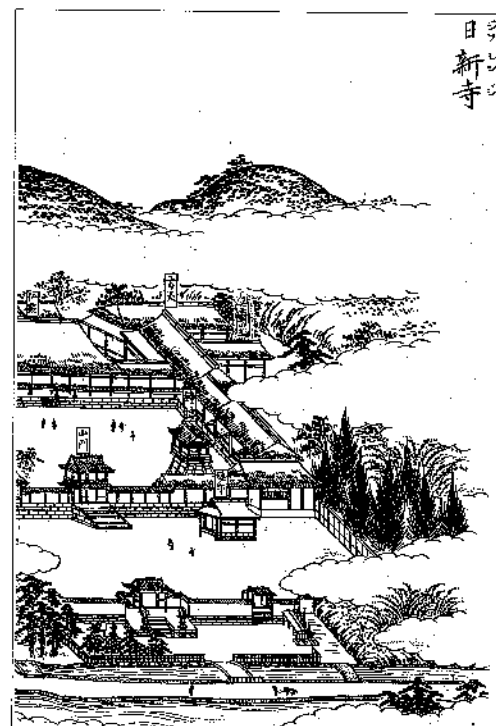
字を親書して牌殿の正面に掛け給ひ莊嚴旧

日に倍すといへり

常潤院 日新寺境内にあり、天文申梅岳公の

創建にして開山盤忠和尚ハンチウ、本尊長谷寺観音

なり、公在世の日屢当院来り給ひて或時大



雪降けれハ御詠あり

日新記 音に聞野山の雪のあけほのも

かゝるときにやすたれまきけん

初め弥陀の像を安置し尊影をなさしめ給ふ、

後京都仏師光嚴クハウゲン 隋州加治木に住すをして尊影を彫刻し

左右に地藏を安し寛庭芳有大姉文質桂才庵

主の形代カタシロなりといひ伝ふ、御影堂の後に御

廟あり靈骨を納め給ふ、籬の内右に従臣中

條次郎左衛門、左に満富郷八左衛門石塔あ

り、公に殉死の士なり、又、井尻神力坊ハ

公命によって国家長久祈願の為国ことに法華

經奉納の命を奉り薩摩神力と札を打、日本

廻国をなして二十有二年を経て帰国し天正

三年十二月廿七日殉死すといふ、石塔ハ柿

本地蔵堂脇にあり

天正三年ハ公卒
去八年の後なり

ウンリンサンホウシヤウイン 雲林山寶生院今泉寺

川畑村に在り、地頭飯

屋の卯方四町餘、真言宗大乘院末にして本

尊薬師如来作者未詳開山賢範法印、嘉吉年中領

主島津国久の開基なり、天文九年住僧政譽セイコ

法印の時梅岳公寺を再興し水田十二町を寄

附すと日新記に見へたり日新記ハ日新寺八代泰円
守見六十三歳にして書す故

に当寺梅岳公をもて大檀那とし政譽法印を

もて中興とす

ミヤウジヤウサンジャウレンイン 明星山淨蓮院杉本寺

武田村に在り、真言宗

坊津一乗院の末にして開基年月詳かならず

百濟国日羅聖者開基な
りといへとも據所なし

本尊十一面觀音、開山慶範僧都、邦君大岳

公の廟所六角堂を安置奉る、公初め泊津に

おハしまして一乗院看坊杉本寺住僧頼政法

印に帰依して御約束の旨ありしとて文明二

年庚寅正月廿日泊におひて逝去給ふ時、御遺体を杉本寺に守り奉りて引導し奉ると云々事ハ石棺銘に見へたり

野間山龍泉寺愛染院 川畑村今泉寺の末にして寺門外にあり、地頭飯屋の卯方四町余、野間山権現の別当寺なり、野間山を隔るこ
と五里、開基年月詳かならず、梅岳公天文九年再興し給ふといふ、開山輪慶法印、本尊阿弥陀如来、脇立の薬師千手ハ初め春日作の靈仏三軀安置ありしを住僧盛伝法印公に奉りしにて其代となして賜ふ所といへり

八幡八幡宮 益山村に鎮坐、地頭飯屋を距ること子方凡十五町餘、人皇七十三代堀川院御宇康和二年池田某、藤宮某石清水八幡を

守り下り益山村中村といふ所に勧請すとい

ひ伝ふ正祭九月九日其後貞永以来屢再興ありて文明

十年今の所に遷坐し永祿六年梅岳公再興し給ひ崇敬厚く金襴の旗歌仙の額を寄進し給ふ、安永八年己亥の歳公命ありて社頭拝殿を造替し給ひ戸帳鐘緒及び扁額を寄進し給ふ、社司江田左膳、別当寺八幡山満徳寺真光院真言宗今泉寺の末寺開基年月詳かならず、開山日證法印なり

諏訪大明神 益山村にあり、八幡八幡宮の子方なり、地頭飯屋を距ること二十三町餘、

祭神信州諏訪社に同じ正祭七月廿四日勧請年月詳か

ならず、社記を按するに天文七年戊戌十二月十八日梅岳公加世田城を攻んとして田布施筒鳴より万之瀬川を渡り給ひ別当道中軒

に陣を構へ給ふ時に加世田の軍勢相働き既に難儀に及び給ひし時、住僧宥鑑法印社内に隠し奉る敵兵公を尋求めしに、社中より鳩一羽飛出けれハ敵兵外を尋ね去て御運をひらかれし所なり、よて同年十二月廿九日加世田を隨へ給ひて翌年道中軒を再興し本尊藥師如来を安置し田三町を寄附し諏訪社を崇敬し給ふと云々、爾来屢再興ありて近頃天明元年辛丑の歳邦君再興し給ひ戸帳大鼓其外神前の器物を寄進し崇敬厚しといふ道中軒ハ其後大中公位牌を安置して今ハ諏訪山大中庵といふ

薩藩名勝志

卷之七

薩藩名勝志卷之七目錄

カワノベコホリ
河邊郡

ワラシタイミヤウシ
王子大明神

ゼンシヤクジ
善積寺

ギョクセンジ
玉泉寺

ヤカケノマツ
箭掛松

ヲノ
小野の瀧

ホウフクジ
寶福寺

アタノコホリ
阿多郡

ヒヨシサンワウ
日吉山王

シヤウグワジ
上宮寺

ハンゲツガハル
半月ヶ原

イナリノヤシロ
稻荷神社

ウチタテモト
打立本

ダイミヤウジ
大明寺

クハウミヤウジ
光明寺

イヒクラノヤシロ
飯倉神社

ホウクハウチン
寶光院

マツガト、ロ
松箇轟

コノエサクラ
近衛桜

サシキモト
棧敷本

ジャウグウクマノゴンゲン
上宮熊野権現

カウラハチマンゲウ
高良八幡宮

タイアーンジ
大年寺

カツテノヤシロ
勝手神社

ヘイセイジ
平井寺

キンブサン
金峰山

コンサウキン
金藏院

ジヨウシユジ
常珠寺

トシ
歳くらへの松

オホナムチハチマンゲウ
大汝八幡宮

ゼンシヨウジ
善勝寺

ヨクラノイヌミ
与倉泉

テントクジ
天徳寺

スハノヤシロ
諏方神社

イマクノフキアケ
今田吹上

ザワウゴンゲン
藏王権現

フキアケハマ
吹上濱

カメジャウクハウシ
亀城荒神

スハノヤシロ
諏方神社

イサクシヤウ
伊作城

サイフクジ
西福寺

クホウジ
多寶寺

カイザウキン
海蔵院

サイフクシ
西福寺

サイギヤウサカ
西行坂

山田

王子大明神

中山田村に鎮座、地頭飯屋同村にあり

をさること七町余、祭神一座願姓開闢九社の内王子宮、正祭九月九日

和銅年中王子宮垂跡ありて勧請すといひ伝

ふ、社司高良佐左衛門といふ

妙見山寶性院光明寺 中山田村にあり、地頭

飯屋をさること六町余、真言宗坊津一乘院

末にして、開基年月伝ハらず、本尊不動明

王立像作者未詳 開山ライセイホウセン 賴政法印一乘院六世遷化二月廿二日、年号詳かならず

永谷山善積寺 上山田村にあり、地頭飯屋を

さること壹里四町余、曹洞宗明峰派肥後国

八代悟真寺ゴシンジの末なり、本尊釈迦如来座像開

山東峰正菊和尚シヤウキョウ、開基年月詳かならず、由

緒記云、当山の境内に毒蛇あり、悪気を

吐里民を悩しける、正菊聞及び尋来りて蛇



穴の前に至り座禪すること三日、忽蛇体苦
身を脱したちところに村民悩をまぬかれし
といへり、邦君道鑑公此ことを聞及ひ給ひ
徳を賞し知行を下し給ふへきむねあり、時
に正菊望ミ申て薩隅日三州の邦内勸化クハシケの事
を訴へ是を許され当寺を創建す、爾来毎年
国内を巡化し其力によて国家安寧兆民快樂
を裨るといふ、其後勸化暫怠りて又寛永八
年九月九日公命あり、古に復し勸化を許さ
る免状あり、主山の巔巍然イタ、キギゼンとして衆峰に秀
て林木深々人能至ることなし、中に巖窟あ
り表裏貫通して縦横広濶高こと二丈余、窟
中に虚空蔵を安す、寺の西南隅に盤石あり、
縦横丈余平なること盤面の如し、正菊此石
上に座して静慮を修習す、よて座禪石とい

ふ、今石上に於て夏華百草を取り輯め之を
焼き和合して加持すること消災神咒一百遍
用ひて衆病を治するに、其効を得さること
なし、名を石隣香セキリンコウといふ以上寛保二年現住
鉄英和尚所記なり二王の
石凡五六拾間川越に洞穴あり近邑川辺高田村
大久保の内なり、世
に伝へて鬼穴といふ、其高式間許りにして
中に大小八の穴あり、龍峰撻鑿々の窟に似
たり、流水窟外に溢れ窟中に入り其出る處
を知らず、正菊初め川辺高田村川原谷とい
ふ所に來り庵を結び後今の地に遷したると
いひ伝ふ、邑人は是を庵元アンノモトといふまた同村に
坊守越バウスコエと云ふ所もあり皆正菊の遺跡なり

川邊

イヒクラシグウサンシヨタイミヤウシ
飯倉新宮三所大明神

宮村に鎮座、地頭仮屋

平山村 平山村 をさること未方拾五町余、祭神三座 中宮

帝皇女、東宮 天智帝西宮 勸請年月詳かならず、永 天智

倉稲魂命、正祭九月九日

正十五年戊寅十二月以来屢再興の棟札あり、

是を川辺の惣鎮守とす、伝へ称す当社ハ飯

倉山にあり、初め倉稲魂命を勸請し飯倉大

明神と崇めしに其後天智天皇の皇女を会祭

して飯倉新宮三所大明神と號す、皇女を額

娃開聞より安遷して給黎郡知覽、河辺郡川

辺両邑に守り下りし時鬢水 知覽にあと云所に

て休ミ玉ひ夫より川辺に守下りし宮を知覽

に守り、知覽に守り下りし宮を川辺に守り

しとなり、今に其所を取違 トリタカヒといふといへり、

又宮村猿山の陳上 チンに皇女のおくしけつりし

跡とて鬢石といふ石あり、いまた其據所考

へす、別当寺を飯倉山大聖寺といふ、坊津

一乗院の末にして開山圓範上人 エンハンシヤウニン

龍豊山玉泉寺 平山村にあり、地頭飯屋をさ

ること酉方式町余、飯屋馬場末なり、初め

宮村松崎と云所にありて長興寺といへり、

開基年月詳かならず 開山塔宮村田寺 本尊釈迦如来

座像 座像 某の年今の地に遷したるや年月伝ハら

す、玉泉智芳大姉 ギヨクセンチハウタイシ 邦君太岳公の息女にして薩摩守用

年丙辰七月廿三日卒するに及て菩提所とな

し玉泉寺と改め祚龐和尚を以て開山とし曹

洞宗田布施常珠寺の末とす 祚龐和尚ハ常珠寺四代江

其後梅岳公命して自身の影像を画せしめ 法

尊牌を安し給ふ、是婦人の寺ハ後世必

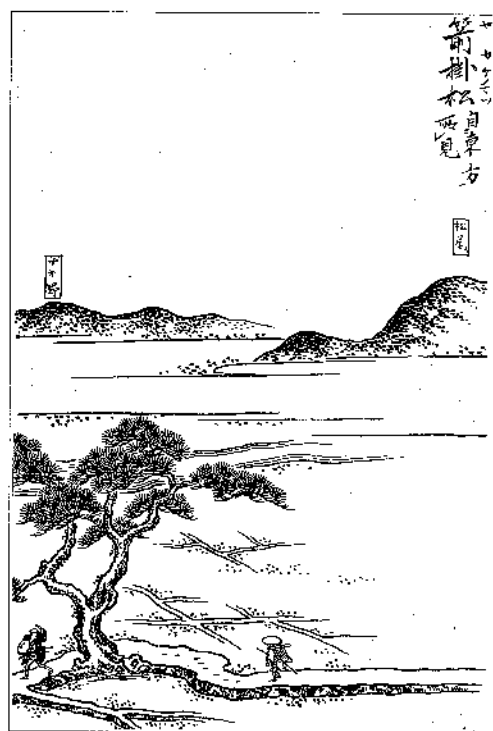
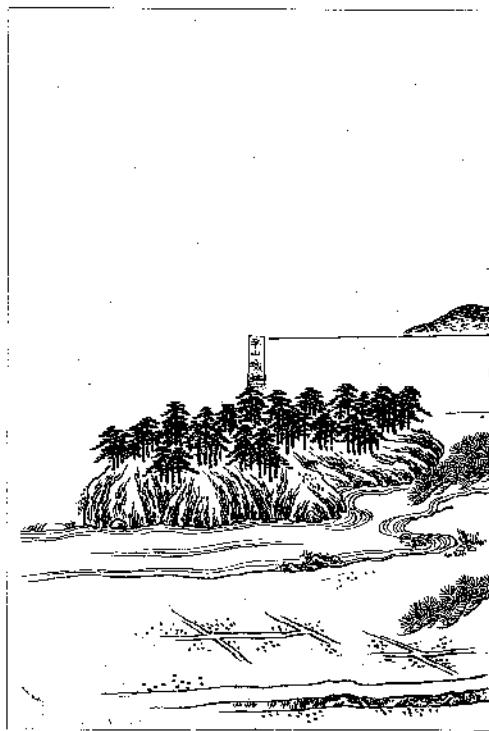
らす荒廢に及ひしあり故に深く思慮し給ふ

によてなりと云々

香芳山清水寺宝光院 カウハウサンセイスイジ 清水村にあり、地頭飯

屋をさること寅方三拾町余、真言宗大乘院の末寺なり、本尊阿弥陀如来、開基年月及ひ開山僧詳かならず、同村に岩屋といふ所あり薬師如来を安す、薬師堂西の方二町許りに高きこと数丈の岩壁あり、前に川流れ岩壁式三丈の所に五輪塔大小数十基を彫鑿したり、上古平家の門族没落の時余、族爰に住して追修の爲供養なりといひ伝ふ 其内に男女の法名を誌し永仁四年丙申三月十三日平重景敬白、弘長四年甲子二月、文明五年二月彼岸など、銘す、また、梵字も余多鑿付あり、薬師堂ハ宝光院支配すといへとも古塔の来由伝はらす

箭掛松 両添村 両添村ハ初め田之上宮下両村なりしを享保十一年合せて一村となし両添といふ の街道田間に一株の松樹あり、地頭飯屋をさる



こと寅卯方六町余、むかし嶋津上総介伊久コレヒサ平山城にありて家嫡相伝の太刀鎧を惣翁公に附属せられし時、譲渡しのありし所故一松樹を植て其しるしとす、今の松ハ二拘許

りなり

平山城の旧趾松をさること酉戌方三町許り、松尾城の旧趾松をさること丑寅方拾町余、箭樹前と名付し事由緒詳かならず

松箇轟 田部田長田両村の境にして東より西

に落ちる瀧なり、高きこと僅に六尋、深さ八尋許り、南の岸ハ長田村、北の岸ハ田部田村なり、地頭仮屋をさること戌方凡三拾町許り、清水川、野崎川、小野川、高田川の流合にて水勢おほく大石ありて岩間を漲り大小数多の瀧にして南岸より望めハ北に田之上嶽、東に田部田の村山を見曠々として瀧の風景殊に絶勝といふ



小野の瀧 小野村にあり、地頭飯屋をさること巳方三拾町許り、源ハ知覧邑にして岩石多く六尋許りの瀧なり

近衛桜 野間村下太久保屋しきにあり、地頭

飯屋の子丑方拾三町余、近衛信輔公坊津に

左遷の日故ありて爰に來り給ひて御杖を立置れ其杖根を生したるゆへ近衛桜といふといへり、むかしの木ハ六七十年前に枯て今の桜ハ朽木の上に生したるといふ、廻り五尺許り按するに坊津ハ本邑をさること七里、鹿児島に至るとき本邑ハ宿泊の所なり、麓の弓場ハ信輔公弓照覽ありて穴弓場とよひ給ふといひ伝ふ

忠徳山洞岳院宝福寺 清水村態嶽にあり、地頭飯屋をさること丑寅方式里拾七町、曹洞



宗市来金鐘寺末にして開山覺世字堂和尚

俗姓久木崎氏、日置郡伊集院の人、永享九年丁巳九月七日示寂 本尊釈迦如来、由来記を

按するに覺世嘗て熊嶽にいたり頭陀ツダの法を

行ひ日夜石上に座禪す坐禪石山中にあり 一日獵師藤田

某偶其所にいたり怪て其故を問ひ大きに苦

行をかんし、為に草庵を結びこれを与ふ、

即今の宝福寺にして実に応永三十年十月廿

一日なりと記せり、初め坐禪石の西谿にあ

りしを六世の住持雲岳和尚再興して今の地

に移す、梅岳公南室和尚ナシツ七世住持に帰依し給ひ

屢登山あり、為に国人勸化の事を許さる

これより先邦君太岳公の時命して勸化ありしといへり 寛永廿一年客殿廢す、公命

あり旧例によて国人勸化のことをなさしめ

給ひ再興す、凡当山に登るときハ壺里許り

の嶮路谿川をつたひて至る寺ハ熊嶽の八分目に阿俗

に山之寺といふ、葦酒石門に入することを許

さす、女人結界の靈山なり、初め曹洞宗賀

州瑞川寺の末たりしに本寺廢するに及んで

金鐘寺末となる

阿多郡

日本紀に日向吾田、又日向阿多とあるは皆当郡のことなり、往古薩摩八日向の國なればなり、神武帝娶り給ひし吾平津媛ハ吾田邑の人と云云、延喜式に阿多郡をもらす、今倭名鈔に従ひ阿多の字を用ゆ

阿多

日吉山王

宮崎村に鎮座宮崎村ハ松田村の枝なるへし 地頭飯屋

飯屋花瀬村にあり をさること亥方拾七町、祭神式拾一

座大日命、八千七百、大國主神、大國玉神、大物主命、顯國玉命、葦原醜男、祭正月朔日、六月十五日、九月九日、十一月初酉 本

田親盈所記神社考云、永正八年十二月八日

勸請阿多総鎮守なり、社司江田氏、加世田

今泉寺これを護る

棧敷本 宮崎村にあり、地頭飯屋の亥方凡拾

八町、天文七年十二月十八日梅岳公軍を催

し田布施城を發し加世田の境万之瀬川鎮守
之渡といふ所を渡り島津実久の加世田別府
ヶ城を攻め給ひし時陣所なり、今ハ吹上と
なる

水晶山ケザウセン花蔵院上宮寺 宮崎村にあり、地頭仮

屋の西方八町余、万之瀬川瀬高の上なり、

真言宗坊津一乗院の末にして開基年月詳か

ならず、本尊阿弥陀如来座像光嚴作中興開山快欽クハイキン

法印、永正十五年大年公再興し給ふ、天文

中梅岳公加世田城を抜の時住僧盛養法印セイヤウに

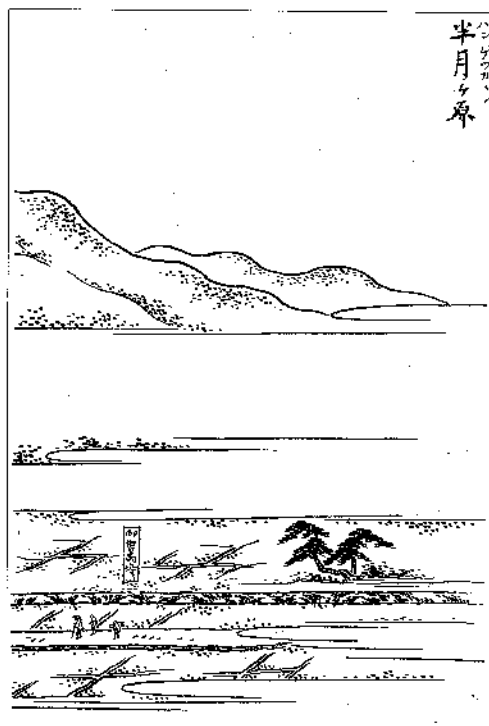
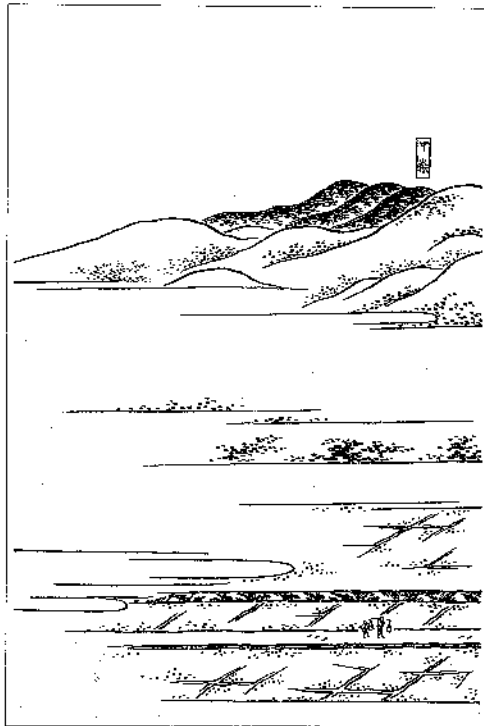
命して調伏の法を修せしむ、其時運氣を見

たる所に松を栽て勝手松といふ

上宮熊野権現 上宮寺内にあり、祭神一座伊弉冉

冊神鏡裏に大願主嶋津藤原忠幸、永正拾五年

戊寅五月廿一日と記す



半月ヶ原 宮崎村にあり、地頭飯屋を距るこ

と子方壱町余、大年公梅岳公の馬場にして
大中公の乗初めも爰にてありし所といふ、

其時御祝ひ夜中に及び中嶽山に月の半出し
を見給ひて梅岳公半月ヶ原と名付られしと

いひ伝ふ 享保十三年新田となり
て馬場の旧址今稍存す

高良八幡宮 新山村に鎮座、地頭飯屋の寅卯

方六町余、祭神三座 応神天皇、玉依姫、神功
皇后、正祭十一月三日 勸請年

月詳かならず、初め中嶽山 新山村
にあり の半腹に安

置す、梅岳公加世田城を抜の時誓願の旨に
よて永禄二年己未十一月廿日今の地に遷し

再興し給ふ

稲荷神社 花瀬村に鎮座、高良八幡宮同所な

り 祭十一
月三日 大年公永正九年壬申十二月五日勸請

し給ふといふ、神体背に銘文あり、天文七

年十二月廿九日夜梅岳公加世田城を抜の時

狐火あり稲荷明神の擁護なり、故に崇敬し
給ひまた寛陽公白銀貳拾五枚を寄附し寛文

十一年十月再興し給ふ

千手山大年寺 センジュサン 花瀬村東城の旧址にあり、地

頭飯屋より辰方式拾町余、曹洞宗田布施常

珠寺末にして開山 キウコウセンハウ
常珠寺四代
勸請開山 和尚 本尊

千手観音 坐像 天文九年庚子二月梅岳公俊安

和尚をして草創し給ひ大年 ダイネン
道登大居士 の菩

提寺となし位牌及び尊影 一幅法体の像
一幅出陳の像 を安置し

給ふ、初め寺の卯方内田と云所に建立し後

こゝに移す

打立本 花瀬村にあり、地頭飯屋の巳の方拾

五町余、天文七年十二月廿九日梅岳公田布

施城を發し別府城を夜討し給ひし時、床机

を居給ひ人数を集められし所なり、故に打立本といふ、今邑人略して立本といふ、後諏方神社祭七月十九日を（勸）観請して其古跡を伝ふといへり

田布施

勝手神社 尾下村キンブサン金峯山の麓に鎮座、地頭仮

屋尾下村にありをさること未方三町余、祭神一座愛尊

祭例度二月三日、養老中道慈法師錫を金嶽にと、

めて修念し嶽の火焼明神を爰に崇め大明寺

を建立して護持寺とす大明寺山米記にあり初め火焼大明

神と称す、永祿三年梅岳公再興して勝手大

明神の五字を書して扁額とす、此時改号な

るへし公師を出すや屢此神にいのり利ありしにて改め給ふよし云伝ふ、年月を経て扁字磨滅するに依て元祿九年十一月十五日こ

れを模写し銅製して華表に掲ぐ、又公の加世田城を攻るや天文七年十二月廿九日当方凶にして利なし、故に神にいのりて方違をなさしめ給ふ、今に其旧跡大なる榎一株華表の亥方六拾間許り島中にあり、称して方違の榎といふ是を田布施の総鎮

守とす、三代実録曰、貞観十五年四月五日正六位上多夫施神ハ此神なるへし



勝手山多門院大明寺 勝手神社の右にあり、

真言宗金藏院の末にして開山道慈法師、本

尊不動明王新其後荒廢に及しを文安の初年

邦君大岳公再興し玉ひ宥海阿闍梨をもて中興開山となす、其後又金藏院二十七世宥伝

法印重興す

イワウサンルリクハウキン
醫王山瑠璃光院平井寺

高橋村にあり、地頭

飯屋の西方式拾七町余、真言宗金藏院の末

にして開基日羅上人、ニチランヨウニン本尊藥師如来秘日羅

自作のよし云伝ふ、寛陽公崇敬し給ひ白銀

三拾枚を寄附し藥師仏鏝料となす

金峰山 嶽ハ本邑にあり、地頭飯屋をさるこ

と丑方凡壹里式拾余町、嶽の東南西は尾下

村、池辺村、大野村に属し北面ハ伊作和田

村に属す、本嶽、東嶽、北嶽とて三峰あり、

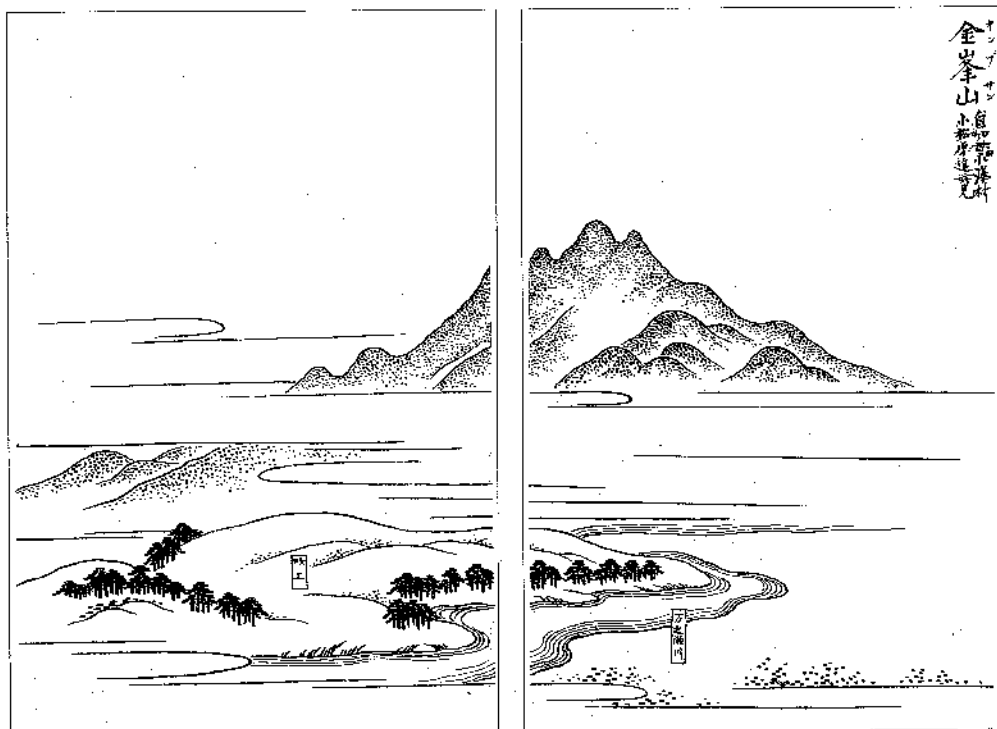
本嶽に蔵王権現を安す、此山の本社なり、

よて本社嶽といふ、東嶽に文殊堂あり、文

殊嶽といふ、北嶽に妙見堂を建つ、よて妙

見嶽と云、本嶽の高きこと詳かならず別当金藏院ニ

王門の石碑に従是
金峰山道五十三町 東北の両嶽、本嶽に比すれハ稍



申し

蔵王権現 本嶽最頂に鎮座、当山ハ和州金峰

山を移したる所なり 祭九月九日、同十九日、二十九日、和州金峰山ハ、吉野郡にあり、所祭安閑

天皇なり、蔵王権現と号す 廟の左に古塔あり、初め廟を建

る所なり、今の所に遷すに及んで石を建て

その表とす、金蔵院由来記云、人皇三十四

代推古帝二年日羅上人勅を奉し和州吉野金

剛蔵王を崇む、勅使従三位兼大宰大貳蔵人

頭高橋朝臣也と云云 由来記は金蔵院住僧決宝書する所なり、多くハ口碑に依て是を記す、故に附合

と見へしも少からず、されハ尽く信するにたらず、然とも先住僧書記と採輯し或ハ上棟文を載るあり、此等ハ拠る所なきにあらされハ引用ゆといふ

属社山上に五社を安す 逸早宮、山王、新宮、霧嶋宮、劍宮、本地堂あ

り 本地弥勒菩薩を安す 竈所あり 金蔵院住僧正月一七日二季彼岸九月中爰に登山し祭祀をなして国家安寧の祈願を禱る

所也 傍に鐘樓あり、鐘銘

奉始鑄薩州阿多郡金峰山洪鐘一口

右奉鑄志者為正朝外朝天長地久関白



金蔵院
下村寺

殿下関東武家四海守護国土安穩諸人

繁昌勸化十方檀主所祷仍如件

座主僧覺秀

応長元年辛亥十一月日

大勸進金剛弟子妙法敬白

大工沙弥根西願

日新記云、梅岳公大願ありて一七日の間、

跣足にして金峰山に詣て給ひ被川にて川ハ北
嶽の足

に
あり毎夜御被をなす、祈願成就して廟前に

て和歌を詠す

浅からぬ頼をかけていくたひものぼるみた

けの神よあはれめ

下までもにこりハあらし浅からぬこころ

の水を神しすまさは

又或時大悲権現の七字を冠にして和歌を詠

し社に奉納し玉ふ

唯たのめうき世なれはや神慮かたしけな

くもちりにましりし、

いのれ猶すくなる道ハさそなあらむ迷へ

る世をも神ハまもれは

光をはよにやハラけておろかなるこゝろ

のやミをてらすとをしれ

こゝこそハ極楽なれと御熊野のかミのひ

かりもあひに合つつ

村雲にやとりてこそ八月の名のきよくも

のほる此神も神

けにさそとたうとく思へ世の為にたちく

たりける神の御こゝろ

昔とて遠くハあらしちハやふるかミは今

日こそ御幸成けれ

金峰山観音寺金蔵院 尾下村にあり、地頭仮

屋をさること卯方式町余、真言宗坊津一乘

院の末にして開山日羅上人、本尊十一面観

音推古帝二年日羅金峰山権現を崇るや護持

の精舎を浦之名村に建て自刻の十一面観音

を安置す浦之名村ハ阿多にあり、旧寺地存す嘉吉三年大岳公一手ケ

原に移し秀範法印をもて中興とす、天文三

年梅岳公今の地に移し給ひしよし由来記に

見えたり、保延四年戊午十一月阿多郡司

平忠景阿多牟田上浦を寄附す、其状に曰、

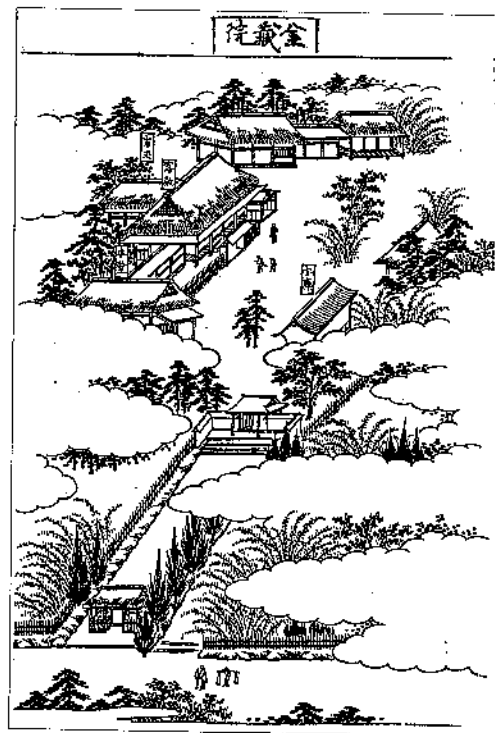
雖相伝私領依為日羅上人建立寺云云 正文二階堂家文書、保延八

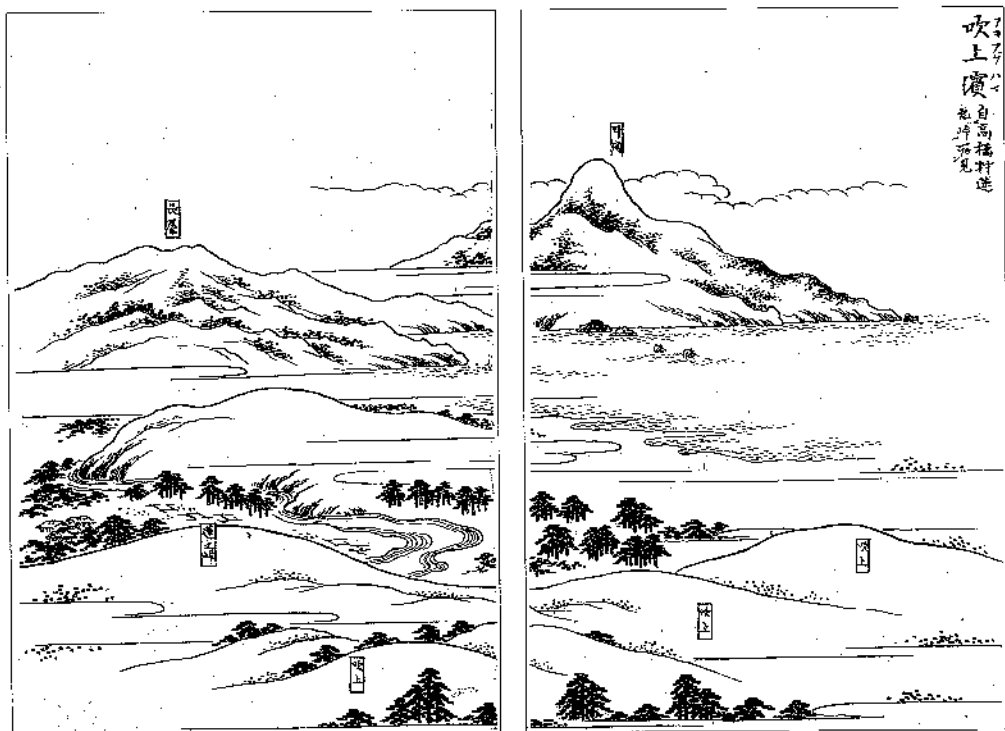
人皇七十五代崇徳帝の年号 日羅自刻の十一面観音は廃し大年

公再興ありしといへり、裏に永正五年戊辰

十一月六日作者越後国浄祐開眼権大僧都頼

政と誌す





吹上演 高橋村の海濱にあり、高橋村ハ西海

の大洋を正面に受たる数里の灘なり、西北の風あるときハ白砂を吹上山林を埋て岡となる、世に高橋の吹上といふ、其景色潔白にして絶妙の地なり、蓮之峠ハスカトウゲといふ吹上の濱見物の所あり

正木葛卷十雜部

薩摩国の娘のよみけるよしいひ伝たる

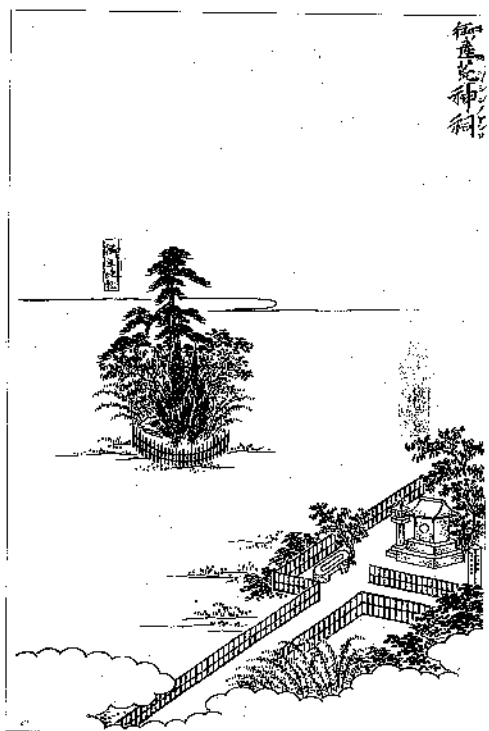
歌

吹上の濱の真砂にうつもれて老木なから
も小松原かな

俳諧名所小鏡

春風や砂吹うつむ小松原 梅船

大平山常珠寺 池辺村にあり、地頭飯屋の丑
方拾壺町余、曹洞宗福昌寺の末なり、応永



中邦君義天公の開基にして開山仲翁守邦和
尚、本尊薬師如来座像初め心伝妙宗大姉の
牌を安す妙宗大姉ハ仲翁和尚の姉なりと由來記に見へたり、其後
天勇玄機大居士邦君大岳公庶長子なり、明
應三年癸丑三月十日卒去の菩提寺と
なし靈牌を安し石塔及び灰塚当寺にあり
代後玉代慶長中廿年三たひの火災ありて
旧記尽焼失し詳かならざることおほし

龜城荒神 池辺村城中本丸西隅に安す、大中
公産所の遺跡にして天和年中田布施タフヤアツカヒ暖暖ハ一
邑官長

の称、これをあつかひ役と呼シノハラ、案原佐左衛門政盈建る所
ふ、今更めて郷土年寄といふマウブクハウシン

なり、邑人は是を御産荒神といふ、寛政六年

甲寅正月今公祠を重修し給ひ白銀拾五枚を

寄附し祠事を資しむ

歳くらへの松 本丸の遺跡にある古松をいふ、

其下に亀石といふ二石あり其形亀に似たり

荒神祠記

薩州田布施邑金峰山麓有古城焉号曰亀城、

城内有小石室号荒神祠、天和二年壬戌歲邑

人篠原佐左衛門政盈所建、仍書其陰、以為

大中公生於此、今茲寛政六年歲次甲寅、正

月公命有司、重修荒神祠繞以石欄、又以銀

六百四十五錢、付邑吏為長生錢、用資祠事、

因命臣山本正誼書其事於石、而建諸傍、謹按

公室譜牒、大中公日新公之子也、母島津氏、

以永正十一年甲戌歲五月五日、生公於田布

施之亀城、後人於其産舎遺跡、建荒神祠、

用禁芻牧即此地也、祠在子城西隅、自祠而

東南十五六歩有兩石、号曰亀石、伝是日新

公所置、自亀石而西二歩有古松、蓋大中公

始生時祝寿所栽云、竊惟大中公靖難定国、

鬱為本藩中興英主、而此地方乃其嶽降処也、

不可以弗識也、乃叙其事而繫以銘、銘曰維

南有嶽寔曰金峰、爰降哲石、神秀所鍾鎮護

是嶽、用存遺蹤、不騫不崩如石如松

諏訪神社 池辺村に鎮座、地頭仮屋より巳方

四町余、祭神前に同し例祭七月二十六日宝徳二年大岳

公本邑砂田に勸請し給ふ、延徳二年十二月

天勇君一手ヶ原に遷し天文四年正月梅岳公

更に今の所に遷鎮す

伊作

大汝八幡宮 中原村宮内に鎮座、地頭飯屋中原村

をさること凡戌亥方八町余 祭神三座 必神天
皇神功

皇后玉依姫正祭
上月廿五日 勸請年月詳かならず、社記云、

相州鎌倉鶴ヶ岡八幡を勸請し給ふ 鶴ヶ岡より京の
八幡に着給ひ船

にして薩州新田に着、また船にして伊作庄赤岩の湊に着、地名を問ひ給ひしに、烏帆柱に來りて、こからすくと鳴けるゆへ地名を小鳥とそ名付、今其旧跡に小鳥大明神を安す、夫よりして花熟里村に着後宮内に着給ふという説あり、再考すへし

伊作家及び

代々の邦君崇敬し給ひ屢再興ありて文安元

年甲子十一月廿七日以来の棟札あり、大汝

は大和国三輪の里より勸請すと遷宮の旧記

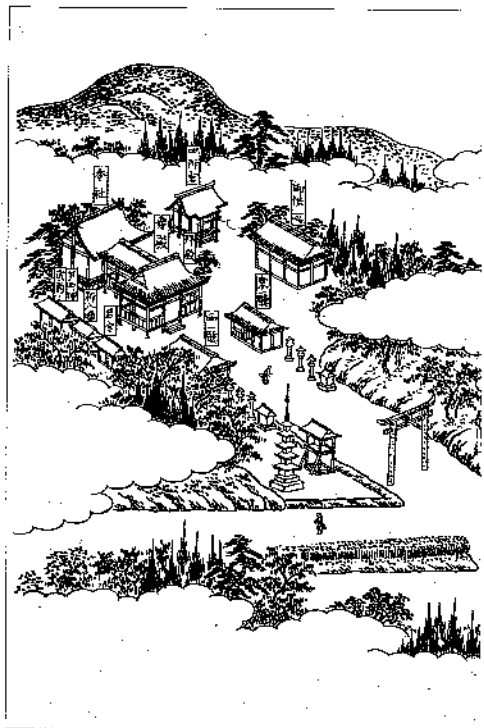
に見えたりと邦君慈眼公の書中にあり、三

輪明神ハ即大巳貴命といへり、按するに三

輪神勸請ありしに其後鶴ヶ岡八幡を守り下

りて会祭し大汝八幡と称するならん、後考

を待へし、梅岳公の加世田城を拔や予め当



社にハ式騎の鎬流馬を張行せらる、伊作総
鎮守なり、社司山内韮負真言寺海蔵院是を
護る

伊作城 湯之浦村にあり、地頭飯屋の寅卯方
拾貳町余、伊作家代々の居城にして本丸の
旧跡に越山公、梅岳公、邦君貫明公、松齡
公産所の跡あり、今石を置いて表とす、山之
城に天満大自在天神を安ず、祭八月廿五日
梅岳公勸請し給ふよし云伝ふ 貫明公法樂
短冊あり、

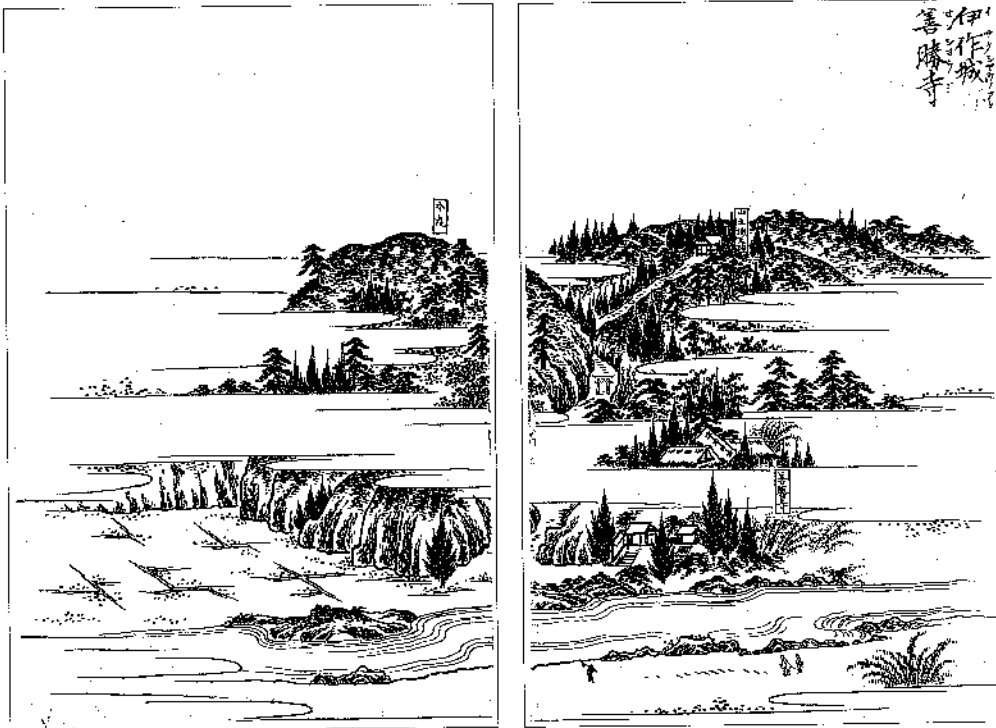
たつ霧やうへにのほらぬ嶋ね哉 龍伯

ゆかぬ我も夢は花野のかりね哉 全

瑞龜山善勝寺 ズイキサン 大手口の東山之城腰にあり、

地頭飯屋より卯方九町余、曹洞宗伊集院妙

円寺末にして開山愚丘妙智和尚 ダキウミヤウチ 邦君義天公の令子
にて徳瑞君の叔父



といふ再
考すへし 本尊釈迦如来、明応九年十一月十一

日河内守久逸君ヒサトシ 法名徳
瑞玄機加世田村原に戦死、当

時を建て菩提寺となす

法水山普光院西福寺 ホウスイサンフクハウキン 湯之浦村にあり、地頭

飯屋をさること卯方八町余、時衆宗相州藤

沢山清浄光寺の末にして開山覚阿上人、本 カクア

尊阿弥陀如来、当寺ハ大永六年梅岳公母堂

梅窓君の為に建立せらる

与倉泉 与倉村にあり、地頭飯屋の卯方式拾

貳町許り、谷山路往還岸下に涌出す、世に

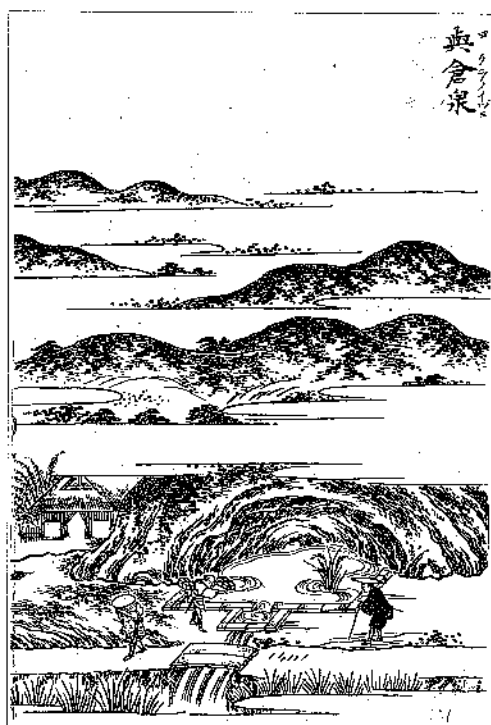
与倉の井川といふ 壁七丈三尺五寸
横七尺深式尺余 常に清水涌出し

て田地用水となる、享保中一根の稲井中に

生し今に至りて絶ることなし、毎歳五六月

実を結び農民稲穂の大小をもて其年の豊凶

を占ふといへり



仏母山多宝寺

ブツボサン 中原村にあり、地頭仮屋の亥

方六町余、臨濟宗日置郡伊集院広濟寺の末

にして伊作家四代大隅守久義明德元年庚午

三月廿六日荆翁和尚ケイゾウをして創建し伊作氏の

菩提寺となす、荆翁和尚先師益道和尚えきどうをも

て開山とす、本尊藥師如来坐像伊作家代々

位牌及び石塔あり、越山公をもて大檀那と

す、慶長十三年戊申五月十四日洪水して寺

山崩れ寺屋埋り、文書旧記尽く失ひ由来委

しからず

青峰山天徳寺

セイホウサン 湯之浦村にあり、地頭仮屋の

辰方六町余、臨濟宗多宝寺末なり、元禄四

年十二月住僧天室書す所由来記を按するに

開山実松玄昌和尚ジツシヨウケンシヤウ 建保四年丙子十

月十二日創建して道忠山東福寺といふ、道

忠ハ打越城主なり、東福の二字ハ東之丸に

ある故なり道忠姓氏詳かならず、当寺ハ初め打越城中にありしと云 伊作下野守忠

親打越城を領せし時菩提寺となし青峰山天

徳寺と改むと云云、天文中梅岳公寺を再興

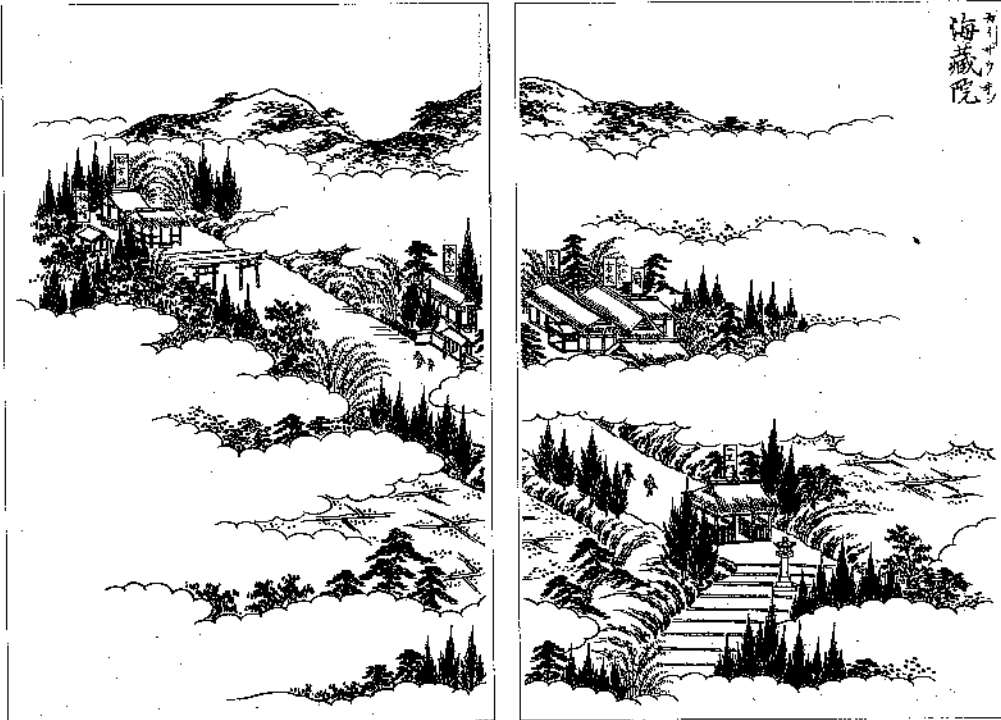
し忠親天南通巻大禪定門及び其弟三郎左衛門法名義悦道忠大禪定門、東寺におひ

て戦死の石塔を建立し湯之浦村田五町を寄附

したまふ、天正十年壬午八月十二日貫明公

邦内一人一銭の勸化を許し給ひ同十三年客

殿を造立すといへり



如意山願成寺海蔵院 ニヨイサンクワンシャウジ 湯之浦村にあり、地頭

飯屋の卯辰方拾壺町、真言宗大乘院の末に

して一蔭寺なり、本尊阿弥陀如来 イチャウジ 立像安阿弥作 開山

広範律師 クハフハン 下野国一昨上人弟子 由来記を按するに応永五戊

寅の歳伊作領主大隅守久義の創建なり、明

応七年戊午二月十五日菊三郎公 日新公 御幼名 当寺八

代の住僧頼増法印を師として勤学あり、客

殿中央の柱を指して日新柱といふ 焼失今其形を写し柱を立

公老後当寺に登臨せられしに庭上の菊花昔

しにかわらされは懐旧のあまりに

おとろふる身そはつかしきくれないの菊

はむかしのいろと聞にも

慈眼公当寺に光臨し給ひ残雪を見給ひて

奥深くみきりふりぬる杉村につもれる雪

は花にまされる

諏方神社 海蔵院二王門内正面に鎮座 正祭七月二十八日

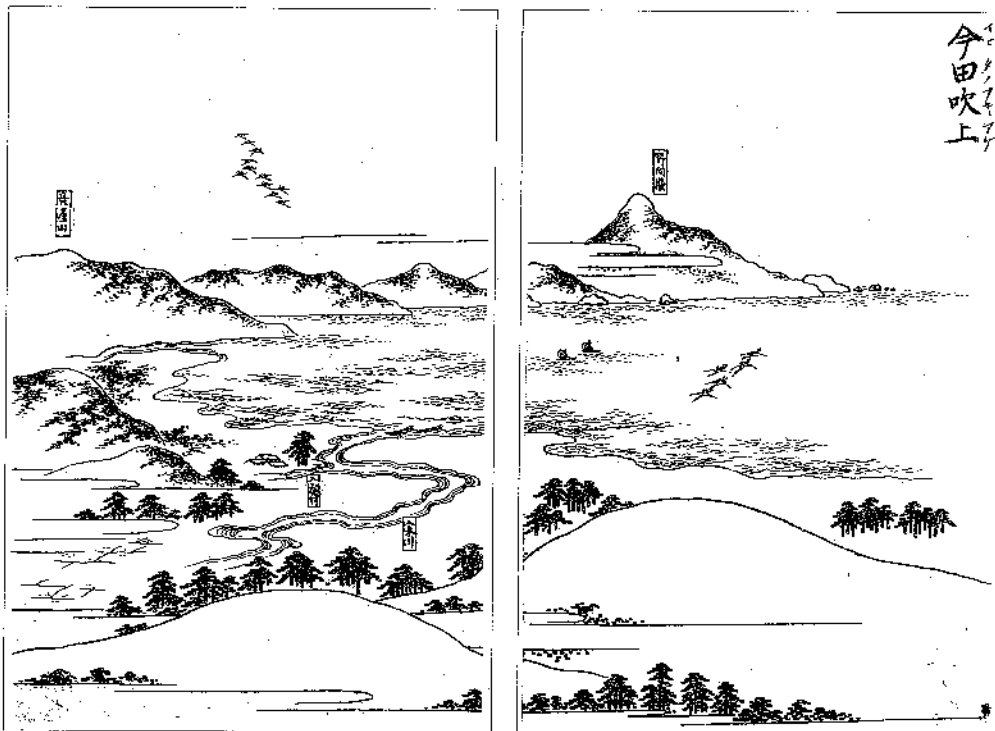
梅岳公勸請し給ひしよし海蔵院由来記に見へたり、公加世田城を攻め給ふの誓願によて正祭にハ鐙流馬を興せられしといへり、今廢してなし

小縁山^{セウエンサン}西福寺 入木村にあり 入木里俗入木の字を用ゆ 地頭飯

屋より申西方拾九町余、臨濟宗多宝寺末にして開山^{フツク}普宅和尚 四月十二日遷化 作号伝ハラス 本尊虚空蔵、当

時の重宝に水剣とて火難を除く靈劍あり、普宅諸州行脚の時五島大円寺にをいて法華を講談し夜る座禪す時に水神授る所なりしことハ由来記に詳かなり

今田吹上 今田村にあり、地頭飯屋より西方凡拾八町許り、西海を受たる数里の吹上目下にして清麗の濱なり、田布施高橋吹上に



勝れり

西行坂 ケシユクリ 花熟里村にあり、日置郡永吉街道の

小坂なり、むかし西行法師諸国遍歴して本藩に來り此所にて休ミける時に農夫の童子あふこてふものに鎌を添へ携へ行けるを西行見て小童子何をするそと問ふ、童子冬作りの夏立枯草荳にまいると答ふ、西行さたらすして暫休ミしに童子麦の荳たるを荷ひてとをる、扱ハ夏立枯草とハむきなるものをとしれり、かゝる田舎に風雅の言葉こそありつれ、是より歸るとて永吉の方に引かゑされしといひ伝ふ、其坂路の傍に西行石とて自然石あり、西行腰を掛しといへり、又坂の脇に西行園といふ畑の字もあり、西行來りしことありやなしやハ知らず、隅州

財部の密寺仏性院といへるに西行來りしときく、住僧柿をあたへ小刀を出しければ歸りし時こかたなたしかにをくといふ查冠の一首を残せしとなり

こゝにきしかゝるゑにしかたひの身にな
さけかくるをたのミにそゆく 仏性院ハ元禄七年
池魚の災ありて此

詠歌伝ハらず、西行記にハ金かミさきまで修行
し侍りき云云、金か御崎ハ筑前の国名所なり、

薩藩名勝志 卷之八

薩藩名勝志卷之八目錄

タニヤマコホリ
谷山郡

クハウトクジ
皇德寺

ジゲンジ
慈眼寺

キヒレノコホリ
給黎郡

サンビヤクコシヤノヤシロ
三百余社神社

チウグウノヤシロ
中宮神社

イフスキコホリ
揖宿郡

シンダウノヤシロ
新宮神社

タラノヤシロ
多羅神社

ケンシンノヤシロ
現示祠

ゲンチウジ
源忠寺

タイエンジ
大円寺

サイセンジ
西選寺

チウグウノヤシロ
中宮神社

イサチサゴンゲン七島
伊佐智佐権現

ラビンイシ
御鬘石

セ、クシ
瀬々串

サイフクジ
西福寺

オコシカケノマツ
御腰掛之松

カゼアナ
風穴

イカシヨウセン
長勝院

スリノハマシンセイ
摺之濱神井

クハウミヤウジ
光明寺

ムソクノヤシロ
無足神社

ヤマカワミナト
山川湊

クマノゴンゲン
熊野権現

ムセノハマ
無瀬濱

リウサンジ
龍山寺

ウナギイケ
鱸の池

エイノコホリ
額娃郡

カイモンタメ
開聞嶽

シユロウ
鐘樓

ズイオウキン
瑞応院

ゴバシヨ
御馬所

カマミイケ
鏡の池

タマノキ
玉井

カハシリウラ
川尻浦

アンヤウジ
安養寺

ハナセ
花瀬

シャウリウジ
正龍寺

カメサカ
甕わり坂

チゴガミツオンセン
児箇水温泉

カイモンノヤシロ宮巡園
開聞神社酒齋

ミサ、ギ
陵

イハヤ
岩屋

カハラケカド
土器門

ミツナシイケ
無水池

イケタ
池田の池

シヨウランジ
證恩寺

ナカ
中の瀧
タモシツルノタケ
塩鶴瀧

ミナリカハ
水成川

谷山郡

谷山

永谷山皇徳寺

山田村にあり、地頭飯屋

上福元村にあ

り谷山初め福元村あり、中古上下を分つて上福元村下福元村と唱ふ

五町余、曹洞宗能州総持寺の末にして開山

ムクハイエンセウ

無外円照和尚

永徳元年十二月六日示寂

本尊釈迦如来

聖像作者詳かならず

開基の施主仏心大禪伯

谷山右馬助平忠高法名といふ死去年月詳かならず

当寺

開基の年月詳かならず、初め皇立寺と号し

ミヨリハル

て本邑見寄原の辺りにありしといふ 由来

記を按するに肥後守菊池武光後醍醐帝の皇

子世良親王を肥後国に申下し征西將軍の宮

と仰き奉り武威を西海の諸州に振ハむとす、

正慶年中親王本邦に來り給ひ見寄原要害の

地なるをもて陣營を構へておハしけり

親王陣營の遺

趾あり今御所の原と呼ぶ地頭飯屋戌の方式拾四町許にあり

武光も見寄原わたりに壘

壁を營なみ親王を守護し奉る

武光壘壁の遺蹟今に存して菊池が城と呼ぶ御

所の原の北寄町許にあり

さて親王の命によりて見寄原のほ

とりにして諏方社を建立し、又梵刹を創建

して皇立寺と名つけ国土の静謐を祈らしめ

らる 親王薨し給ひて翌年の春光嚴帝齋藤

若狹守藤原實直をして宣旨を下し給ひ親王

の位牌を皇立寺に安置し菩提寺に定められ

しとそ、其後至徳年中に至り無外和尚親王

の遺跡を慕ひこの地にとふらひ來りこゝに

そのところを見て一字の梵刹を建立せんと

欲す、時に谷山の郡司平忠孝入道仏心無外

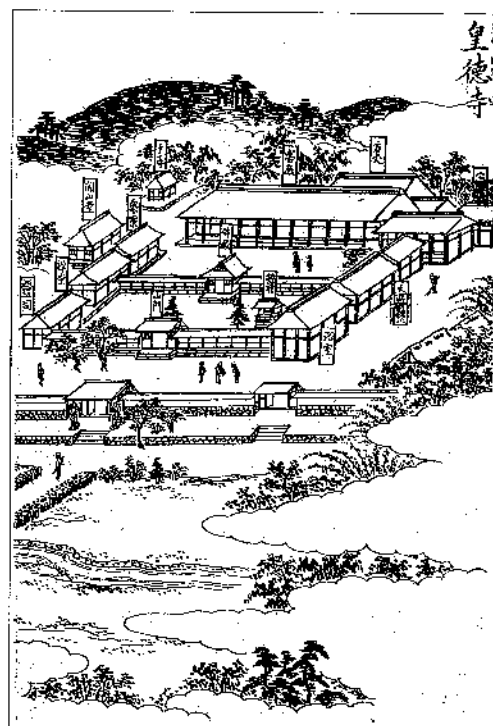
和尚に帰依し皇立寺をもてこの地に移し七

堂の伽藍を再興して号を皇徳寺と改ため無

外和尚を請待して開山とすといふ

以上皇徳寺由来記に拠り按する

に至徳年中伽藍建立し改めて皇徳寺と号すと云々、今皇徳寺に古雲板あり裏に銘を彫て云、薩州谷山郡永谷山常住正平廿一丙午清洗望日大工淨法と



あり、正平八南朝の年号にして二十一年ハ貞治五年なり、至徳元年より二十年前なり、此時すてに寺ありて永谷山の号ありしと見へたり、しかれども皇徳寺の号ありしやしるへからず、又皇徳寺所蔵古文書のうちに寄進状あり、永徳三年癸亥十一月十五日薩摩守忠信と記し花押あり、又比兵尼心知と書たる寄進状もあり、年月日も同くして共に皇徳寺の号を書せり、されハ永徳の比ハ既に皇徳寺の号あり、由來記に至徳年中といへり、あやまれり
慶長中一唯公の霊牌を安置し若干の田地を寄附して菩提寺となし給ふ

正一位伊佐智佐六所権現 下福元町玉林城の

旧趾に鎮座、地頭飯屋の午方拾八町許り、

祭神六座

伊弉冉尊速玉男神泉津事鮮男神熊野本宮新宮合て六所権現と号す、正祭九月九日

本社紀伊

国牟婁郡熊野権現なり、勧請年月詳かならず、社記曰伝称す熊野本宮新宮の六所を瀬

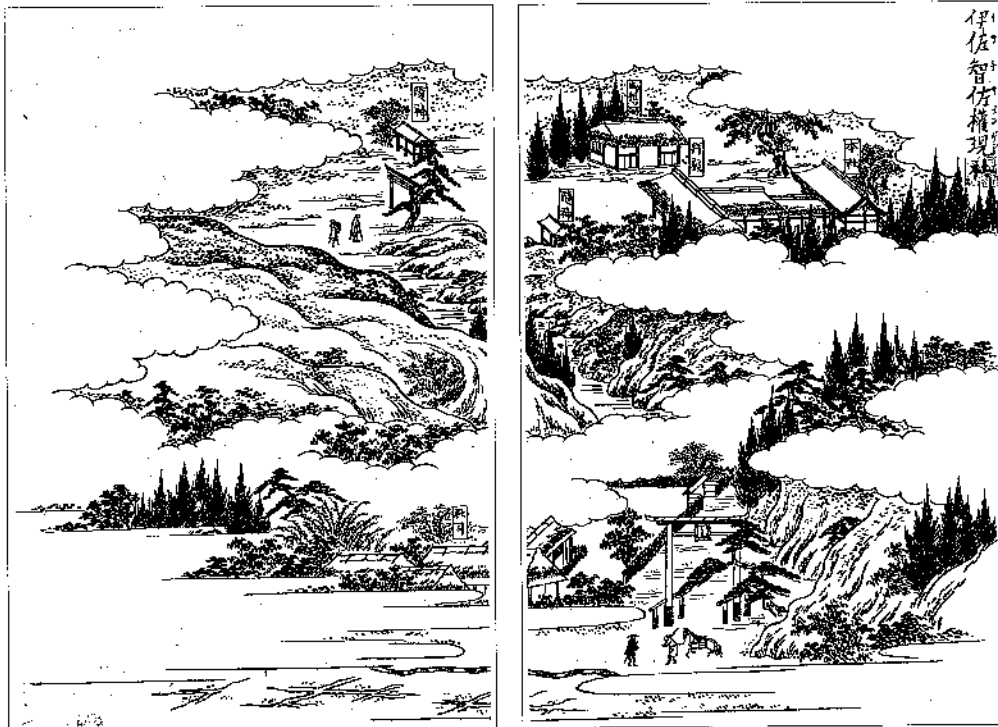
戸山某、竹之内某当国に守下りて伊佐郡蘭

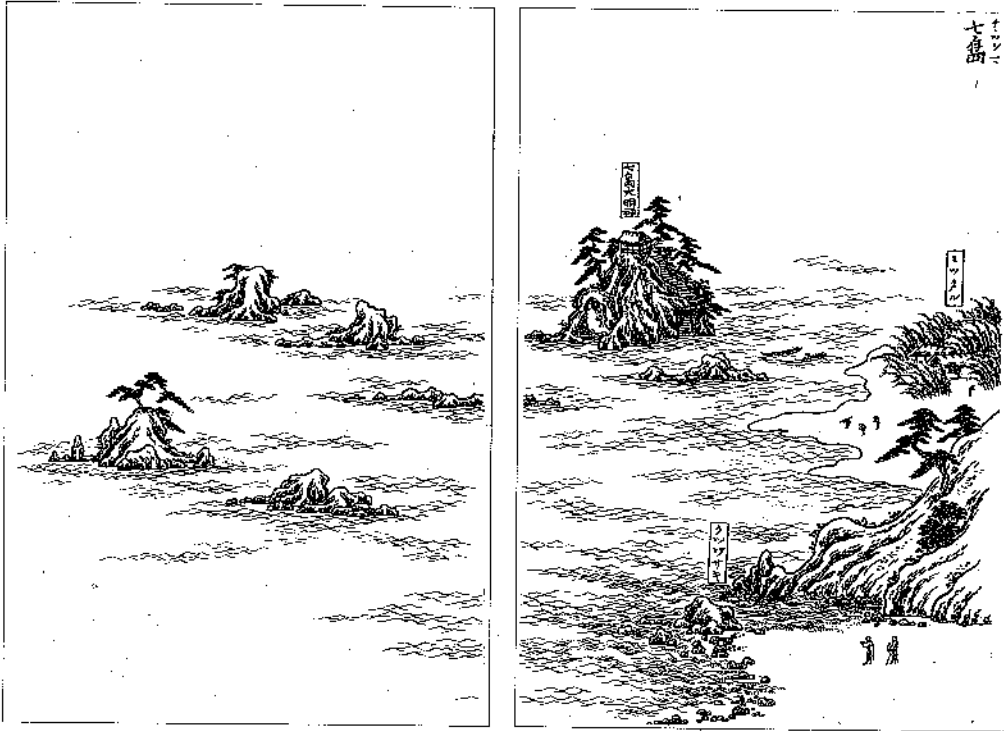
牟田に勧請し其後日州志布志槻野に影向あり、又隅州佐多に御幸し給ひ終に御園によ

て此所に鎮座し給ふと云々、今の谷山土瀬

戸山源八、竹之内新蔵は権現を守下りしも

の、後裔なりといひ伝ふ、正徳三年癸巳六月神祇道管領ウラベノカネヨシ卜部兼敬正一位の宗源宣旨を奉納し神号の額を華表に掛けて谷山の惣鎮守なり、正祭にハ濱下りと名付神楽を奏し路すから二人の劔舞などして和田濱ワタノハマ久津輪崎クツワサキと云所に御幸あり、久津輪崎の南に七の岩嶋あり渚を去ること遠からず、佳景にして名付けて七ツ嶋といふ、大なるは廻り式町に足らす松林あり小社を安す七津嶋大明神といふ、祭神詳かならず権現の末社なり、天文八年己亥卯月伊集院忠朗村田経定神領寄附の日録存す





補陀山慈眼寺 フダサン 下福元村にあり、地頭飯屋を

去ること申方拾八町許り、曹洞宗福昌寺末

寺にして本尊釈迦如来 作者詳かならず 由来記云、初

め百済国日羅の開基にて白作の聖観音を安

置し天台宗なりしか其後廢に及ひしや臨濟

宗の寺となりしとぞ、応永年中に至りて義

天公再興し給ひ又大中公天文十一年壬寅の

春改宗し福昌寺十八世代賢和尚をして当寺 ダイケン

の開山となし福昌禪寺の末となす、観音堂

ハ二王門の内五拾間余岸壁下にあり六敷四

間の掛作にして石橋を架し堂の右に式間余

の瀧あり佳境といふ、いにしへより楓樹多

し、琴月公御父子詣て給ひし時橋の落葉と

いふ題に

はし姫の瀧のしら糸くりかけて

もみちのにしきなみやをりけん 家久

山水にちりてなかれぬもミちはは

しからみかくるはしの上かな 虎寿丸

遊慈眼寺二首 山田君豹

詩集
山壁巨靈手、寺成聖主年、谷空通小洞、林

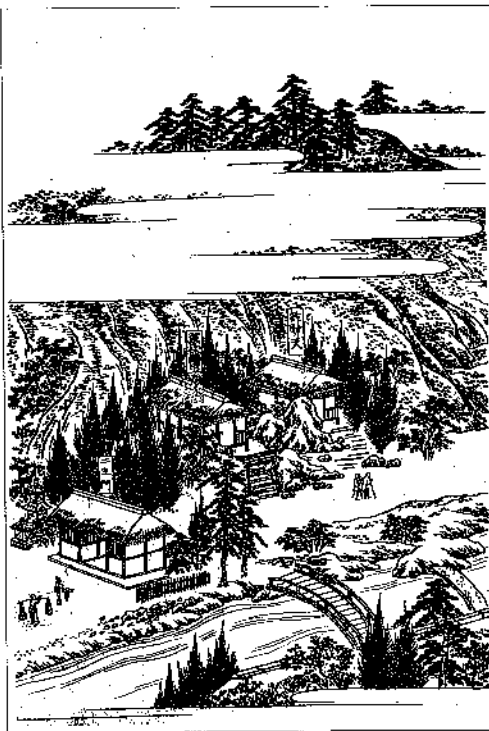
缺出諸天、絶壁千尋合、飛泉百道懸、登臨

何限興、勝地此間偏

翼爾円通閣、相携共一登 蒼顔差俗吏 白

足遇神僧 金錫占靈地 玉蓮伝寶燈 何時

辞薄禄 従汝問三乗



慈眼寺

御鬘石 下福元村原野にあり、地頭飯屋を去

こと戌方式里三拾町許り、石の高六尺三寸

廻式丈五尺三寸石上凹ナカクボにして常に水あり、

其広きこと壹尺許り、深さ七寸五分むかし

大中公鹿兒島清水城におハします時逆臣島

津実久の党来りて公を襲ハんとす、爰にお

いて公潜行して小野村鹿兒島にありに至り山路を越

て田布施に往て此所にて髪をゆひ給ひ此水

を用られしとなり、夫よりして名つけて御

髪石といふ、天水溜りて六七月旱天ヒナリといへ

とも絶ゆることなし、邑人奇異といふ

給黎郡

喜入

正一位三百余社大明神 宮坂村に鎮座、領主

飯屋を去ること戌方六町余喜入は肝付典膳兼殿の領分なり祭神詳

かならず天照大神宮のよし社可濱嶋内
匠いひ伝ふ正祭十一月三日弘治三丁巳の歳

嶋津摂津守季久建立す、其後天正六年再興スエヒサ

の棟札あり、享保廿一年丙辰三月廿二日神

祇道管領卜部兼雄神階正一位の宗源宣命を

奉納せらる、喜入の惣鎮守なり

瀬々串 喜入海辺にあり、小村にして人家少

なし、此海浦に出れは大隅州連山眺望の佳

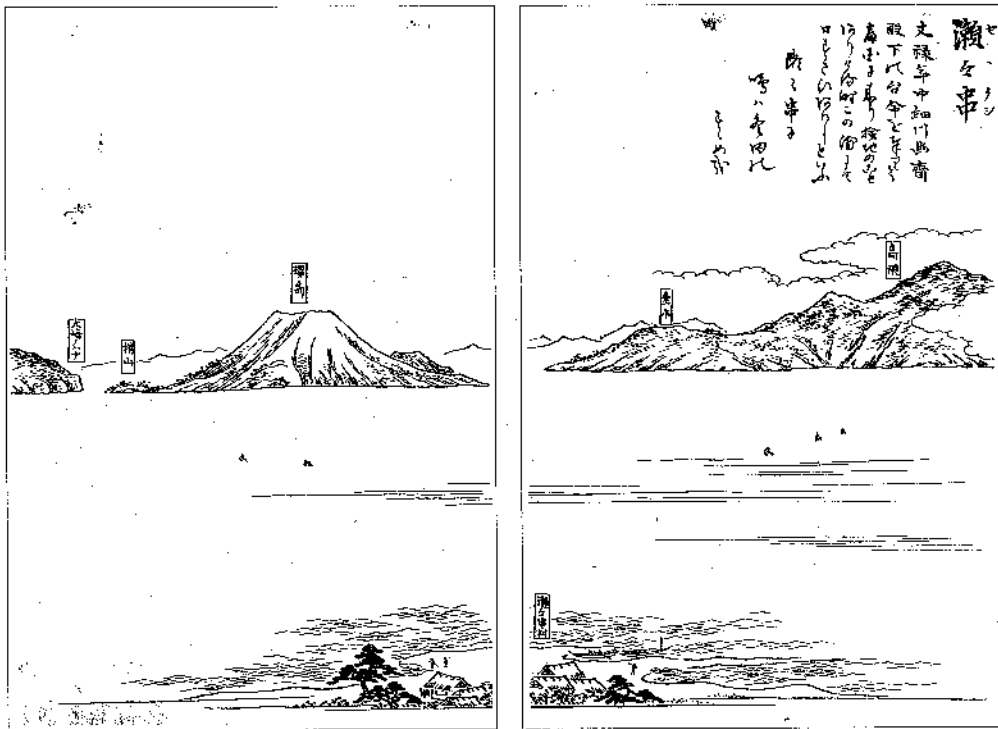
景中につ、いて桜嶋高隈美観といふ、

文禄年中細川幽齋殿下の台命を奉りて当

国に來り検地のことありける時、この浦

にて口すさひありしといふ

瀬々串に鳴ハ冬田のす、め哉



知覧

中宮三所大明神

下郡村に鎮座

下郡村ハ
郡村の枝也

領主仮

屋をさること申西方拾壹町余

知覧ハ島津木上
久典の領分也

祭神

一座 豊玉姫又開聞山縁記を按するに中宮ハ天智帝第二の皇女開聞宮の
御腹なりといへり、いま其是非を知らず、祭教度正祭二月二日

九月九日

勸請年月詳かならず

神社考に明徳年
中勸請と云々

是を

知覧の惣鎮守とす、別当寺を中宮山萬福寺

持宝院といふ、開基年月伝ハらず開山快照

法印

文安二年己丑
二月廿九日遷化

なり、

極楽山松峰院西福寺

郡村にあり、領主仮屋

より酉戌の方四町余、曹洞宗福昌寺の末に

して開山覚隠永本和尚

カクイン エイホン
享徳二年癸酉
十二月十八日入滅

本尊釈迦

如来 脇侍文殊普賢
作者詳かならず 開基の年月伝ハらず、本邑菩

提寺なり、

揖宿郡

指宿

新宮九社大明神

東方村に鎮座、本社國常立尊、
瑞速日大宮

西宮天命開別尊天
智天皇御事

東宮彦火々
出見尊 二龍宮和多都
美命 懷殿

宮玉依
姫 荒仁宮大己
貴命 当社ハ慶雲三年丙午二月三

日天智天皇崩御の時、指宿堀内両家の祖按
す

るに堀内家ハ社司堀内祝人祖といふ、指宿氏ハ当地の領主なりしにや詳かならず

し同月十日廟を建て祭るといふ、即今の西

宮なり祭數度止祭二月三日宇泥祭と唱ふ、社人宮巡あり二月十日五月
朔日五月五日九月八日九月九日十一月十日神輿を守りて宮巡

初め天皇田良浦に御着船あり、其後魚見

嶽風穴に至り開聞嶽に御幸し給ひし時逗留

ありし所ゆへ神靈を勧請し奉るといへり、

貞觀十六年甲午二月二日開聞山火を發せし

時神託によて十一月十日開聞宮に準し八社

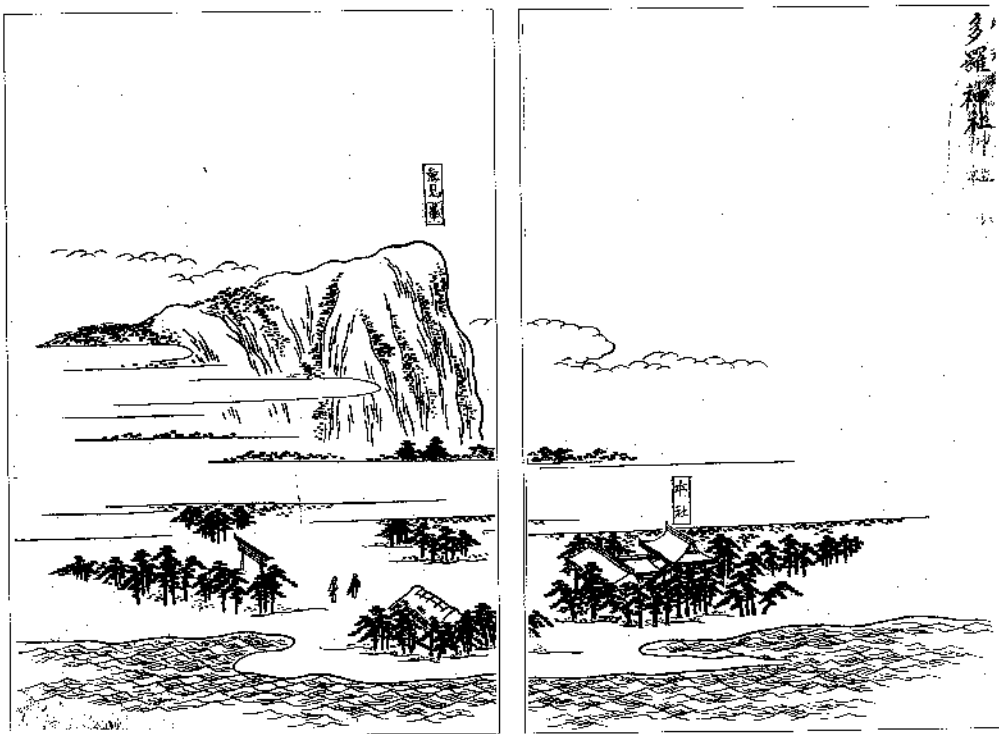
を勧請し開聞新宮九社大明神と号す、本社



の右に天皇の陵と伝へて瑞籬の中に平石あり此時崇め祭る所ならんか、今考ふへからす、宝殿中に納むる所香炉一花瓶二法螺二
 は天皇志賀の都より携へ給ふ宝器といひ伝
 以上杜記の説なり、元和六年甲午七月二日洪
 ふ水ありて旧記流失し詳かならざることおほし 指宿惣鎮守に
 して杜司を堀内祝人別当寺を新宮山観音寺
 千手院といふ、開基年月詳かならず

御腰掛けの松 新宮杜午末の方五町許り沫ヶ
 迫^{サコ}にあり、天智帝御腰を掛給ひ水を奉りし
 所故印に植置ける古松なりしに明和年中斃
 倒して今の松は植次なりとぞ、此所に石の
 小祠を建て水波社といひ神事の用水を取る
 といへり

多羅大明神 東方村田良浦に鎮坐、地頭仮屋
 の辰方表里七町余、祭神天智天皇左右天照



大神稻荷明神勸請年月詳かならず、天智帝御下向の時御船の着たる所なりといひ伝ふ、今小松林となりぬ

風穴 ウツミタケ 同村魚見嶽の下岩間をいふ、天智帝田

良浦に御着船ありて蘇山翁に逢ひ給ひし所なり、十月中の丑日風祭の式あり、近比石祠を建るといふ

現示祠 西方村曾山にあり、蘇山翁を崇むといふ、祭祀なし

西意山宝蔵寺長勝院 サイイサンホウサフジチャウシヨウケン 西方村にあり、地頭仮

屋の巳方式町余、真言宗坊津一乗院末寺にして開山伝昌法印弘安元年創建す、本尊阿

弥陀 坐像長壹尺三寸
古仏安阿弥作 脇立観音・勢至 立像共に長
壹尺壹寸同作 初め

長松院といひしに慶長十四年琉球国を征し給ふ時軍兵を山川に集めらる、琴月公ハ指

宿の別館に入給ひ松齡公ハ長松院に入り給

ふ御首途に松の字勝に改め給ふといふ、其

節十九町村の村長麦飯烏賊墨柚子赤貝を進

上す、烏賊墨ハ琉球御手に付と云こゝろを

祝し奉りしといひ伝ふ、今に至りて西方村

東方村の村長 西方東方ハもと十九町村なり
延宝中東西を分ち兩村となる 節分に此品

を本府に進上し故事を伝ふといへり

安泰山源忠寺 西方村にあり、地頭仮屋より

巳方四町余、曹洞宗福昌寺の末にして開基

年月詳かならず、開山興林和尚顚娃小四郎

カ子ヒロ 兼洪の為に建立すといへり

摺之濱神井 十二町村海濱に涌出す地頭仮屋

の巳の方壺里三拾町余先君寛陽公浴湯し給

ひ奇特の験湯によって神井と名付一章を作り

人民の産業境地の形勢を著し御茶屋の掛軸

となし給ふ、元禄十六癸未の歳御茶屋をこ
ほち除かる 其旧跡今に存せり尊作後に載

指宿郷の内温泉八ヶ所あり、一を西方村柴立といふ一を同村二月田といふ一を東方村間水といふ一を十町村田畑尻といふ一を同村弥次ヶ湯といふ一を同村湯といふ 近ごろ今公の御茶屋を建一を十二町村湯といふ一ハ即摺之濱温泉なり、

題「摺之濱温泉館」詩

摺之濱之臨^レ崖^ニ磐^ニ礪^シ如^シ展^ル碧^ヲ簾^ヲ可^ク坐^ス可^シ釣^ス
其^ノ岳^ノ嶠^ノ之^ノ際^ニ泌^リ有^ル泉^ヲ焉 沸^ル湧^ル滴^ル缺^コ竇^ニ則^チ
泪^{タリ}澀^レ似^{タリ}躍^ニ琉^ニ璃^ニ灌^ニ注^ニ觸^ニ曲^ニ崎^ニ則^チ磬^ニ確^ニ如^シ
彈^ニ琴^ニ筑^ニ坎^ニ唇^ニ呵^ニ氣^ニ滃^ニ淳^ニ於^ニ晨^ニ夜^ニ而^ニ白^ニ霧^ニ
冲^レ天^ニ冬^ニ夏^ニ翕^ニ々^{トシテ}不^レ颺^ニ不^レ猛^ニ而^ニ暖^ニ燠^ニ協^ニ地^ニ草^ニ
木^ニ莫^ニ虞^ニ歲^ニ月^ニ髣^ニ髴^ニ仙^ニ子^ニ之^ニ窟^ニ其^ニ名^ニ温^ニ泉^ニ俗^ニ
曰^ク痼^ニ疾^ニ之^ニ人^ニ來^ニ灌^ニ沫^ニ則^チ膏^ニ盲^ニ一^ニ洗^ニ而^ニ白^ニ除^ニ余^ニ
頃^ニ有^ニ不^レ豫^ニ心^ニ季^ニ秋^ニ之^ニ初^ニ至^ニ兒^ニ箇^ニ水^ニ温^ニ浴^ニ三^ニ七^ニ
日 然^レ未^レ見^レ驗^ニ今^ニ至^ニ此^ニ又^ニ投^ニ三^ニ七^ニ日 頓^ニ
覺^ニ神^ニ清^ニ氣^ニ爽^ニ百^ニ骸^ニ漸^ニ泰^ニ於^ニ是^ニ嬉^ニ然^ニ復^ニ棲^ニ遲^ニ

一七日 於偉哉湯泉之用非^ニ唯^ニ療^ニ沈^ニ痼^ニ此
地^ニ本^ニ乏^ニ薪^ニ棘^ニ然^ニ此^ニ泉^ニ不^レ爨^ニ而^ニ能^ニ淪^ニ豆^ニ菰^ニ魚^ニ
鱉^ニ莫^ニ温^ニ袍^ニ而^ニ能^ニ勝^ニ隆^ニ冬^ニ嚴^ニ寒^ニ或^ニ富^ニ逸^ニ者^ニ
來^ニ遊^ニ或^ニ調^ニ養^ニ士^ニ寄^ニ寓^ニ佑^ニ酒^ニ佑^ニ鮮^ニ則^ニ俚^ニ民^ニ無^ニ愁^ニ
采^ニ薪^ニ而^ニ便^ニ沐浴^ニ且^ニ營^ニ漁^ニ賈^ニ以^ニ給^ニ產^ニ業^ニ

故^ニ縣^ニ邑^ニ日^ニ富^ニ庶^ニ矣 此^ニ皆^ニ村^ニ人^ニ無^ニ尽^ニ通^ニ宝^ニ而^ニ為^ニ
我^ニ成^ニ功^ニ也 是^ニ以^ニ唐^ニ人^ニ詩^ニ云^ニ直^ニ待^ニ衆^ニ生^ニ塵^ニ垢^ニ
尽^ニ我^ニ方^ニ清^ニ冷^ニ混^ニ常^ニ流^ニ是^ニ雖^ニ依^ニ浮^ニ屠^ニ之^ニ說^ニ
以^ニ湯^ニ準^ニ南^ニ方^ニ無^ニ垢^ニ之^ニ神^ニ而^ニ自^ニ代^ニ湯^ニ靈^ニ誓^ニ願^ニ
之^ニ詞^ニ還^ニ暗^ニ合^ニ我^ニ儒^ニ所^ニ謂^ニ後^ニ天^ニ下^ニ之^ニ樂^ニ而^ニ
樂^ニ者^ニ歟 宜^ニ哉 張^ニ衡^ニ觀^ニ湯^ニ泉^ニ稱^ニ神^ニ井^ニ本^ニ
州^ニ名^ニ此^ニ郡^ニ者^ニ尊^ニ神^ニ井^ニ以^ニ号^ニ揖^ニ宿^ニ余^ニ亦
為^ニ神^ニ井^ニ題^ニ一^ニ絕^ニ而^ニ禱^ニ爾^ニ壽^ニ祥^ニ如^ニ左^ニ

温室泉洵烟欲^ニ煌^ニ岸^ニ間^ニ瀝^ニ々^ニ露^ニ流^ニ光^ニ漱^ニ磐
鑿^ニ石^ニ引^ニ春^ニ暖^ニ

揖宿靈湯養壽昌

左中将源光久著

宝鏡山大円寺 十二町村にあり、摺之濱温泉

の岡手なり、臨濟宗山川正龍寺の末にして

開山虎森和尚、本尊釈迦如来座像長八寸初め開山

和尚入唐の志あり本邦山川に來りしに邦君

恕翁公留め給ひて正龍寺シヤウリウジを建て開山とす

当寺は虎森隱居の地なり、応永二十年七月

十九日和尚爰にをいて遷化すといふ、石塔

及び灰塚觀音堂千手觀音立像の脇にあり、石塔に虎

森大和尚と銘す、灰塚は杉の大樹なりしに

近世大風に落倒して枯たりといへり、延宝

二年甲寅の秋寛陽公摺之濱に浴湯し給ひし

時尊作の詩を住僧留リウガク舎に賜ふ 今に伝へて

寺宝とす

万事無心不_レ過_二坐_レ磯垂_レ釣 一時行

楽不_レ如_二浴_レ沂風_一舞雩_一

是亦摺濱眺望漁村一奇也 因舉_レ筆以

題

渺漠長空雨意癡鷗迷_二幽浦_一 得歸遲熒々

斜日曝_二漁網_一 冽々巖風凝_二釣糸_一行櫓数

声殘_二雲靄_一泊舟幾點漾_二漣漪_一 芦汀翹足

纖襪驚侶惜泥汚霜雪姿

左近衛中将光久

正平山光明寺 十町村迫田にあり、地頭飯屋

をさること巳午方凡壹里八町許り、開山定

恵和尚 大職冠鎌足公の子なり白雉四年癸丑五月十二日入唐し法相宗を伝へ白鳳七年戊寅帰朝す 人皇四十

二代文武天皇元年丁酉三月朔日建立十一面

観音 立像長式尺五寸日羅作秘仏 を安置す、おりくの星霜を

経て廃に及びしを応永中邦君恕翁公新に精

舎を建給ひ敬外欽公大姉の牌を安置し石室 セキオウ

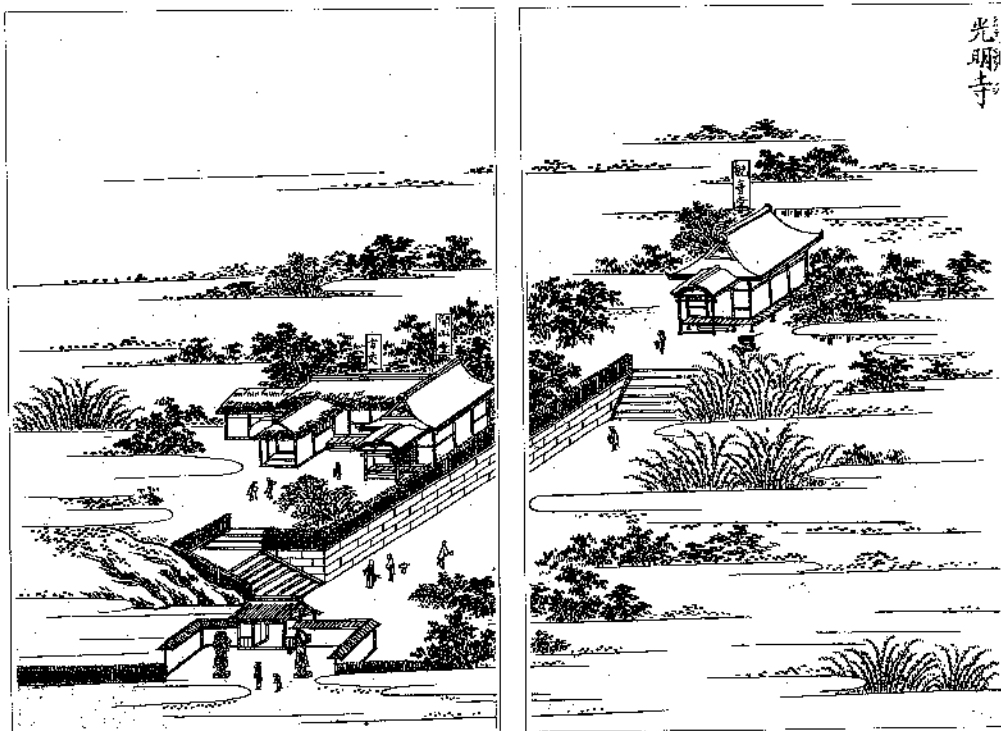
和尚を以て勧請開山となし曹洞宗福昌寺の

末とす 今按するに福昌寺三代仲翁和尚開山も再考すへし

再拜大悲宿世因林間風渡妙音新定恵石

室両尊德輝_レ古照_レ今知幾春

福昌禪寺海門和尚



丈六山淨真院西選寺 十二町村にあり、地頭

飯屋より巳午方壺里貳拾八町余摺之濱の岡
手なり、真言宗坊津一乘院末寺にして開基

弘安五年開山盛壽法印本尊不動明王 立像長壹尺古仏作

者不詳 境内に阿弥陀を安す 座像長壹丈一尺古仏作 古老曰右大

將源頼朝卿の誓願にして日本四方阿弥陀といふといへり、按するに弘安五年開基いぶかし再考すへし

無足明神 西方村尾懸浦魚見嶽の麓に鎮座、

地頭飯屋の辰方三拾壺町余石華表あり石階を登れば茅屋社あり天照太神を祭るといふ、社の右五間許りに古木あり無足明神と崇め祭る、祭神詳かならず宮社なし、上古の神木なりとて櫨はじの朽木あり今ハ寓木おほく生して繁茂せり、神木の亥子のかたに一社あり



り鎮守なりといふ、明神の祭祀ハ十月十五日なり、無足舞と名付魚見嶽の谷間神木をさる
こと東武町

余より笛太鼓の拍子をなして三本の簀持

せ其後に一人ハ長刀舞一人ハ剣舞後に四人の鬼神舞無足一人一時に舞出て渚より山をつたひて神木の所に來り舞納む、各其式あり柴竹にて神木を引まとひ綱を巻く是を御衣綱と名つく、今其権輿を尋るに何の時に始りしにや詳かならず、社役のもの代々その作法を伝へて祭祀にあつかるといふ、いにしへ故ある神事にや

中宮大明神 岩本村に鎮座、祭神一座豊玉姫正祭
九月九日

領主飯屋の末方三町余岩本村ハ指宿郷にして嶋津因幡忠
厚の領分なり、總名を令和泉といふ

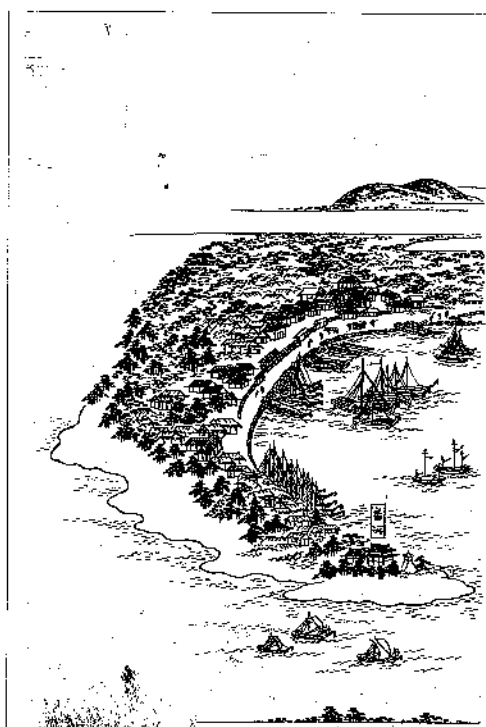
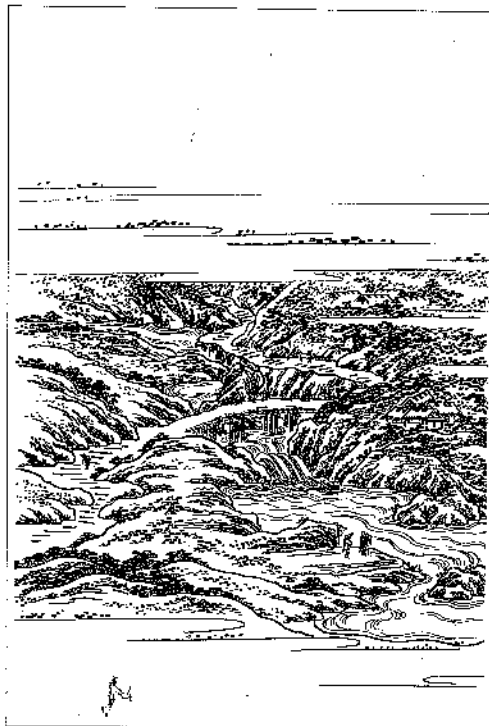
天徳四年丁丑仲冬廿二日指宿岩本村領主

甲斐守公秋建立すと棟木に見へたり、今和

泉の総鎮守にして指宿新宮九社大明神の末社なりといひ伝ふ、

山川

山川湊 山川は旧指宿の山川村なりしを某年郷となし福元村と名つけしといへり、湊ハ福元村鳴川村両邑に相接し拾町余の入江湾曲にして廻り凡壺里、湊口東にむかひ広さ凡八町、自邦他州の旅舶日々出入ありてよく風波の難を凌ぎ本藩第一の湊なり、鳴川に瀧あり、流れて渚に至れば温湯涌出し港中の便利甚たよろし、大唐の漂船及ひ琉球の船もおほく当津に來り風便を待ち安危を伺ふといふ、指宿の境渡りといふ所より眺望するに其風景絶妙にして画工エカキも筆に及かたし



ヤマカワミナト
山川港

木からしに波路分くる唐人のふねも入江や
たのむ山河 家久

熊野権現 福元村に鎮座、地頭飯屋をさるこ

と子方四町許り本社紀州熊野三所権現正祭

正月七日八月今の別当殿嶋讃岐坊頼壽 勸請年月詳かならず二十三代の祖東光寺頼仁

法印紀州より当国に下りて勸請し代々別当職を勤むといふマスムネ 琴月公樺山権左衛門久高

平田太郎左衛門増宗を将として琉球王尚寧ライテイ

を征せしむ時に公爰に出馬し給ひ頼貞法印

に命して御祈願の旨ありしにて慶長十六

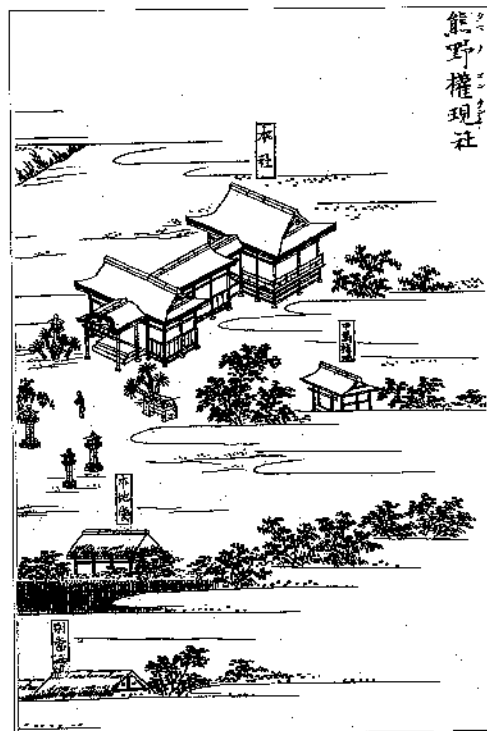
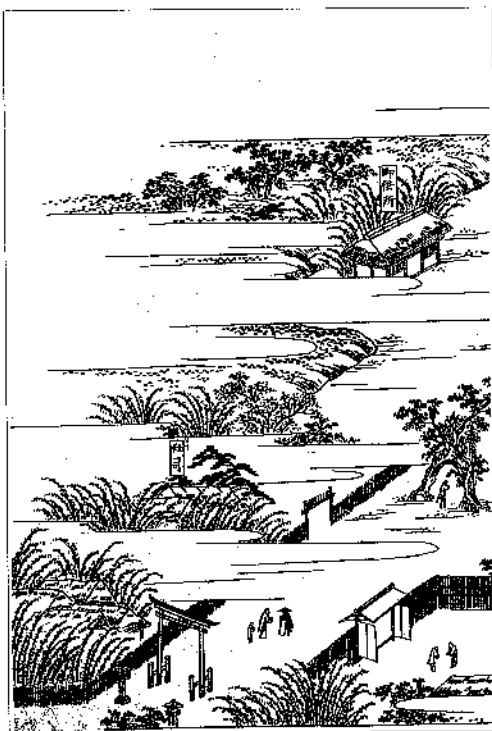
年辛亥十一月社を再興し頼娃開聞神社の社

家紀某をして神樂を奏せらる、是より以来

社司祭祀にあつかるといふ、即今の紀左近

祖なり 社殿の前鳥居の内にそのかミ琉球

征討の時公送別の筵をまうけ渡海の軍士に



盃酒給ひし跡なりとて豎七八間横式間許り
伏芝の所ありしを天明七年丁未の秋社殿を
再興して鳥居を海辺の方に移す旧跡をさる
こと凡二十間此
時に及て伏芝を除き小路となし左右に土手
を築きたりしと村民の語りぬ、公軍艦を異
邦に渡されし程の事なればかゝることとも
あるへきことなり、今其記録伝ハらすとて
ゆへなく旧跡を除き後世故事を失ふこと惜
むへきに似たり、末社中嶋権現虚空蔵を安
す

海雲山正龍寺 福元村にあり、地頭飯屋をさ
ること未申方五町、開山虎森和尚コシン、本尊阿
弥陀座像長
貳尺臨濟宗広濟寺の末寺なり、初め虎
森入唐の志あり当国に下りしに石屋和尚セキオク旧
知の縁をもて道德の僧なることを怒翁公に

告す、よて公渡唐をと、め給ひ正龍寺を建
て開山となしこゝに居らしむ、時に明德元

年庚午の歳なり

虎森俗姓京極氏京都五山南禪寺の塔頭、雲院住持、蒙山和尚の弟子にして石屋和尚師兄なり、後

指宿大円寺に隱居し応永二十年七月十九日落命す、境臺大円寺にあり

元和四戊午の歳琴月

公山川に光臨し給ふ時に虎森八世の住僧
文岳ブンガクを召して山川即興の題を賜ふ、文岳即
席に一章を啜りて奉る、其詩曰、君乗遊

興、海南辺、斬日黄鐘風物鮮、紅葉浮江□

□□、吟行至樂在「山川」また寛陽公当寺

に光臨ありて尊作を住僧別宗和尚に賜ふ、

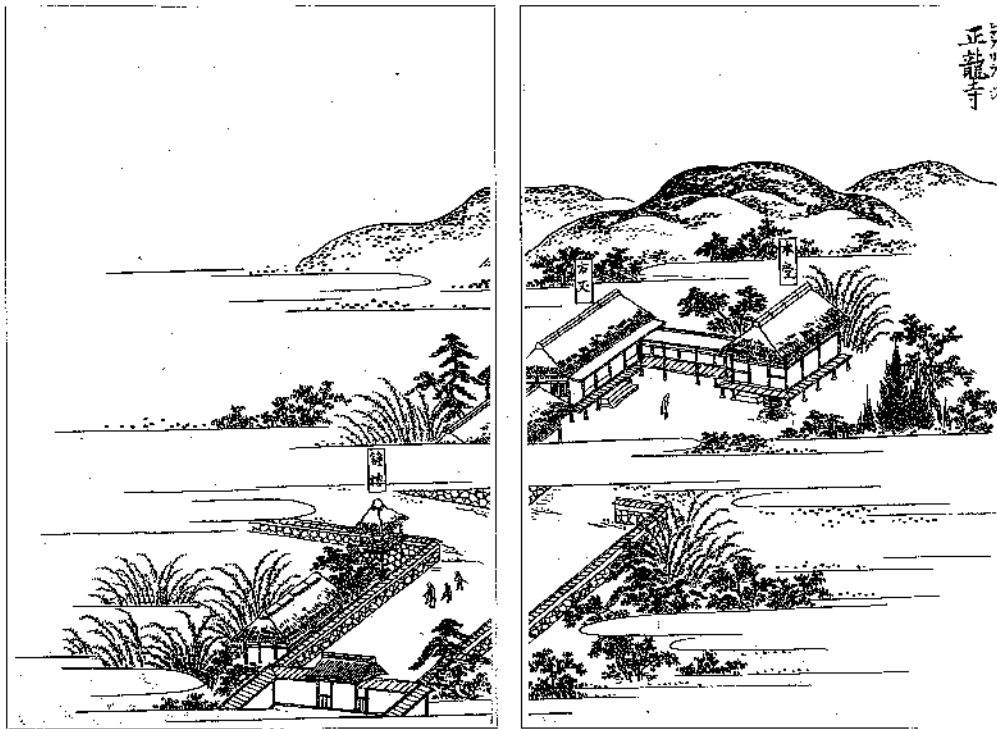
別宗亦詩を奉る

別宗詩
傳ハラス公尊和を賜ふ別宗ハ、十世
の住持にして

寛陽公賜ふ所の硯山天目今に伝へて什宝とす、開山画像もまた別宗在洛の
日求め得たりと見へたり、其讃曰、寂寥形子有耶無這箇從來吾忘レ善行李
痴々猶兀々誰、知非智又非、
愚前南禪虎森史自書レ之

贈正龍寺

徐歩「招提」自寂寥山川絶景倩誰描尋常



旧地吟「沙界」縦得松風亦不消

和

光久

深愧哦詩七步才 一言難蔽幾吟徊
 外多生趣祖月禪風万象来

壬寅秋浴「瀨湯」偶過「於此山館雲房」
 前「盤海」後飛泉漁歌禽語晨昏不絶題
 風牕月几何區々狗聲律

山川雲鮮照明生江村帶潮寒浪輕曉壁綿
 纏煙彩重

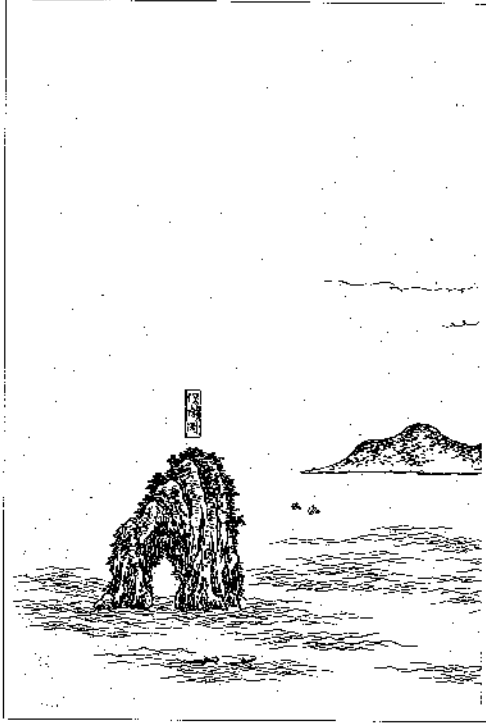
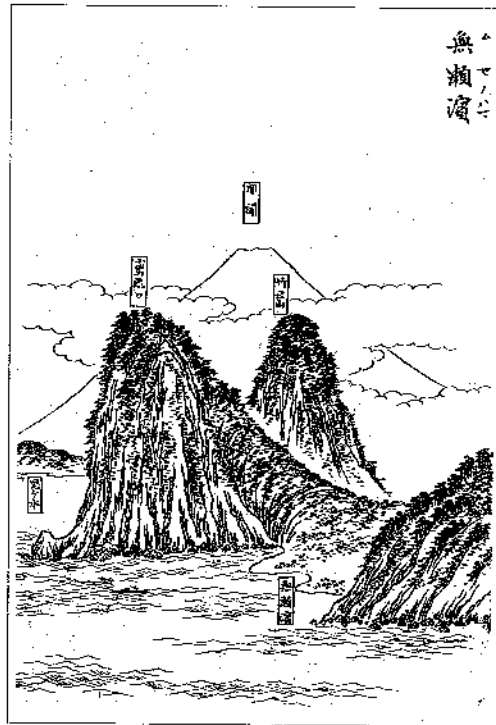
曦窓金碎竹隱清霜林映水鱗々色風葉飄
 庭戚々聲

蕭寺晴輝頻過眼捲簾與月共歡迎

左近中将光久著

頒與正龍寺

無瀨濱 福元村の灘なり、地頭仮屋の午未弐



拾五町余、凡五六町の石濱、少しの入江あり名を無瀬のはまといふ、むかし天智帝の後大宮姫志賀の都を出て下向し給ふ時御船の着し所なりといひ伝ふ其時無瀬田の米をもて飯をさ、けし由緒とて福元村の農夫今村門の弥五右衛門ハいにしへよりいまに至りて毎歳九月九日開聞宮に無瀬前田の米をもて神供に奉るといふ、無瀬の濱南六町許りの海中に俣合洲マツガフスといふ大岩あり、船にして其下に至れば石を築きたることし、断岸絶壁其高凡弐拾丈廻り弐町許り、船通融の俣あり、俣の明六間通り八間高七間、西に開聞嶽あり、南に硫磺屋久等の嶋々遙に見えて其景尤美なり

甕カメわり坂 福元村にあり、無瀬の濱戊亥方十

八町はかり、顚娃の往還纔なる坂路なり、
大宮姫無瀬の濱に着船あり開聞嶽の麓にい
たり給ふ時に都より携へ来りし大甕を落し
破たる所ゆへ名付てかめわり坂といふとい
へり（樂のことハ開聞社下に記す）地頭仮屋をさること申方拾九
町許りなり

松吟山龍山寺 （マカチゴガミツ） 大山村岡児ヶ水にあり （大山村ハ顚娃郡にして

慶安三年七月山川に属す、山川郷ハ一郷兩属の地にして掛宿顚娃兩郡あり 地頭仮屋の未申凡壹

里拾八町、開基年月詳かならず、本尊千手

観音 （座像長六寸作者未詳） 初め龍山軒といふ天台宗なりし

に洪水の難によて廢に及びしを顚娃證恩寺

九世天応（テンオウ）和尚再興して龍山寺と改め曹洞宗

となし證恩寺の末とす、延宝二年壬寅の秋

寛陽公児箇水温泉に浴湯し給ひし時住僧（シヤウ）詳

雲に尊作の和韻を命し給ふ事あり、又其後

寒来村落の一律を作り詳雲に賜ふ、詳雲拝
戴（カタシケンナキ）して高恩の辱を報謝せんか為に宮府に告
し琴月公（キンゲツ）の尊牌を安置す、是年十一月二十
一日なり

本州是處多湯泉而児箇水為最余
倡来浣浴而拾其山堰海怪之美正
製一律以志焉

寒来村落暮蕭森天霽靈神護海心
激嶗風聲韶擊舫

春林日影灑飾金沙瀕鷗宿江潮靜潭
澍魚遊浪蹟紅崗下蒸蒸日上児箇水浴終

乗月耐間吟

左近衛中将光久著

頌與龍山寺

児箇水温泉 鳴川村にあり、地頭飯屋の未申
 壺里八町許り、邑人濱児ケ水といふ、邦君
 の飯屋あり寛陽公屢浴湯し給ひ尊作の詩あ
 り、龍山寺に蔵む

鰻の池 同村にあり、廻り凡拾八町かたひら
 の鰻生すゆへにうなきの池とハ名付しにや、
 池の側に温泉あり人家もあり

穎娃郡

穎娃

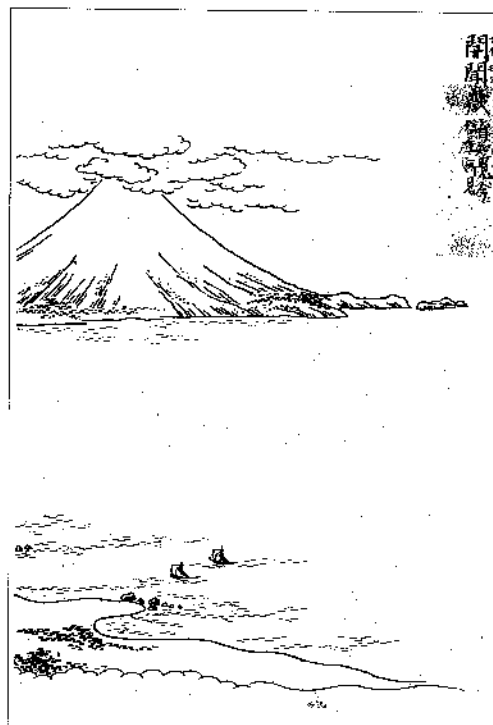
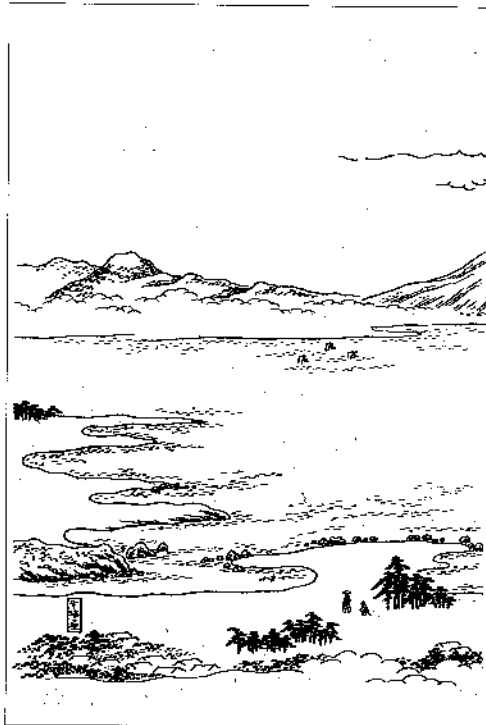
開聞嶽 十町村仙田村両邑に跨り、登り壺里

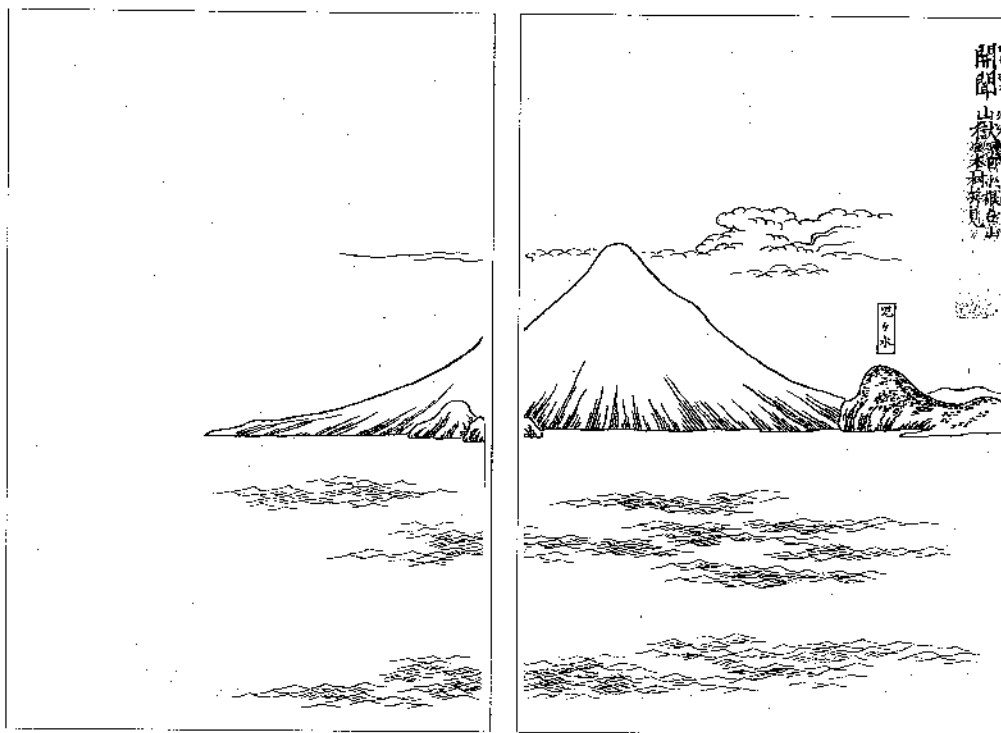
壺町廿余間岩屋上廻り三里十六町余岩屋道旧名

鴨著嶋或ハ金疊山キンテウサン或ハ長主山チャウシュサン或ハ空穂嶋ウツホシマ或

ハ筑紫富士ツクシフジといふ、宗恵ソウエか松葉名所集マツハメイシヨシフ、篤

信シンか和爾雅ワニガ等に開聞嶽を薩州の名所とす、





開聞山
開聞神社

開聞水

嶽の北に開聞神社を安す、故に嶽の名とす

るか詳かならず開聞山縁記云大宮姫鳳凰にをいて開聞皇宮と名

社と載す、開聞ハ牧聞の読通し用ひたるなるへし 神代皇帝紀曰、人皇四代

懿徳天皇の御宇薩州海門山涌出すと或記曰是ハをとなきも

の海中より出たるにハあらず、初より雲霧深くおほひて山の形みへす、此御代にあたりて雲霧初て晴て山の形出顯す是を涌出といふ、日本書紀にハ

見え 開聞山縁記云、人皇十二代景行天皇二ケイカウ

十年庚寅十月三日一夜に涌出すと云々此説いか、あ

るへき後の 貞観十六年山頂に火を發す事ハ開聞

神社の下に記す、嶽の頂上に石小祠を安す

伊弉諾尊伊弉冊尊大日靈貴を勧請す、地神

四代彦火々出見尊の至り給ふ海神宮は此所

なり、海神の子豊玉姫水を汲し玉の井の古

跡あり、縁記に火々出見尊の御詠とて載た

り

をきつとり鴨著嶋にわれ寝し

いもハ忘らし世のことくも

日本紀を按するに此御詠ハ豊玉姫ウカヤフキアハセスノ鷓鴣草ウツクサ齋不合尊

を生して海中に入り給ふ時尊の御歌なり

釈日本紀曰海神の宮を以鴨着嶋に喻へ皇孫彼宮に住寝息し給ふと云々

俳諧名所小鏡

卯の花か雪かよく見よ薩摩富士日向 菊路

同

雪ならて浪にしらむやさつま富士

作者不知

開聞神社 延喜式神名帳額娃郡一座に枚聞神

社と載す、是薩州の一宮也、一宮記云、枚

聞神社ハ猿田彦命也云、神社啓蒙云、一

宮篇枚聞神社ハ綿積神社と云、神代系図伝云、猿田彦命ハ伊弉諾尊

之児也、塩土老翁事勝国勝長狭岐神四神同体異名也、其為德神妙不可測、随所出現感氣応来、故号氣神、為祐則曰大田神、反窺則曰興玉神、護往来

則曰岐神則道在船中則曰船玉命 今祭神九社本殿大宮兼天智帝の后 西之宮天智 東

宮彦火々出見尊 二龍宮和多都美命 聖之宮塩土老翁 姉姫宮豊玉姫 天井宮

玉依 荒仁宮大己貴命 懷殿宮照美子日月神天智帝末の皇子 是を合せて開

聞神社といふといへり祭年中数度大祭会九月九日 開聞神社ハ

勅宣によて和銅元年戊申十一月三日社壇建

立正三位大納言紀麻呂九社十九神を崇め奉

ると云々杜司紀野家蔵の由來記に拠る 開聞山縁起を按するに社

殿をさること凡拾三町嶽の麓に岩嶺あり、

三十七代孝徳天皇の時仙人窟中に来りて修

法鍊行す、毎日麤来りて法水を舐る、其麤

遂に口より妙相を出し神女を産す即ち白雉

元年庚戌二月十八日なり、仙人養育して僧

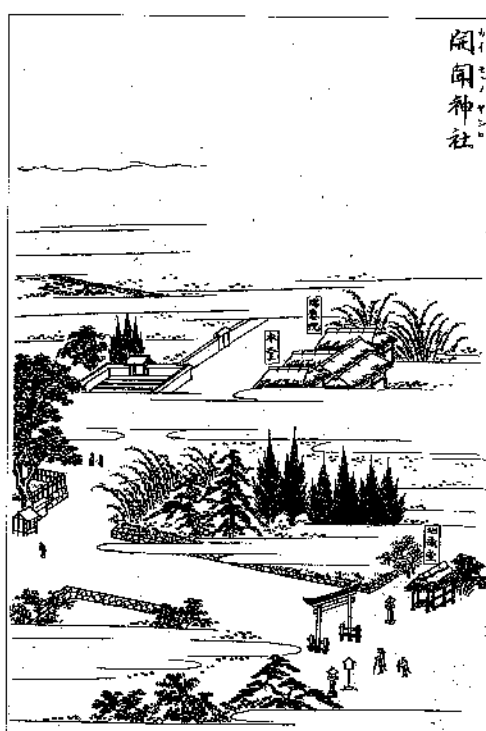
智通にあたふ智通ハ瑞應院の開山なり 産名を瑞照姫と称す、

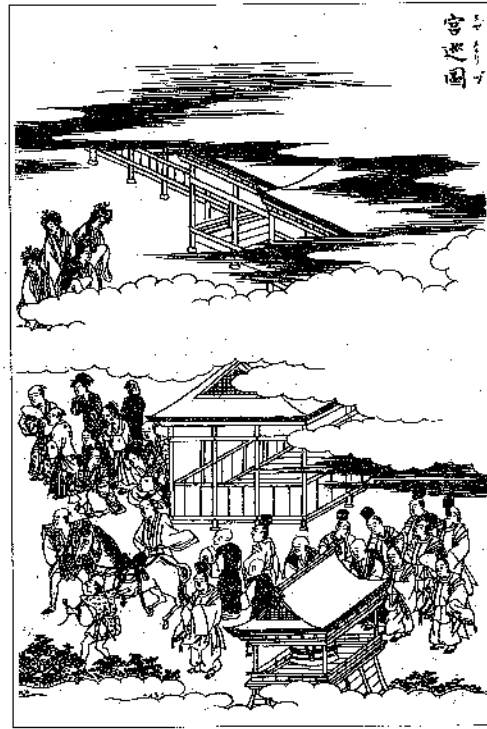
其女子二歳にして大織冠鎌足公取て撫育し

大宮姫と名く、生質美麗にして三十九代天

智帝の皇妃に立給ひ御寵愛甚た深し故をも

て六宮の妃嬪妬ミて既に害せんことをはか
る、爰にをいて潜に近江国志賀の王宮を忍
ひ出て伊勢国阿濃津より船を浮へて本国に
赴き給ひ白鳳元年壬申六月朔日山川牟瀬の
濱に御着船あり、夫より又船にして額娃の
脇浦に御着あり嶽の子丑に住し給ふ其田跡今鳥居ヶ原といふ所なりと云々供奉の臣阿濃某安東四位中将實重校井左大将御食子上野少将左衛門大夫藤原豊若麻呂長山某、此外姓名伝ハラス 天智
帝ハ別離の御心堪かたく出居外朝の御志を
発し帝十年辛未冬十二月三日一の宝剣を帶
一の白馬に騎り潜に山階山に行幸し終に還
御なし、丹波路の嶮難を凌ぎ太宰府に潜幸
し給ひ御壽四十六歳 太宰府に月を越へ御船にして日
州志布志を櫛間との間に御船を留め船おり
し給ふ、供奉の人々には正三位大納言
キマロイケタ 紀麻呂池田四位少将某有馬某仙田某松山某





なり、白鳳二年癸酉五月朔日薩州指宿田良
 浦に御着船あり、同月五日額娃開聞山の離
 宮に入給ふ、当地におはします事三十余年
 慶雲三年丙午三月八日崩御し給ふ指宿新宮社記に
 八三月三日とあり
 御寿七十九西之宮是なり、皇后ハ其後和
 銅元年戊申六月十八日薨御し給ふ新宮社記に八十
 一月三日とあり
 御寿五十九此地に葬り奉りしとぞ、本殿の
 右脇に陵と伝へて瑞籬の内に伏石二あり
 陵のことハ
 後に記す



(酒壺絵図説明)

(大宮姫都より携へ来り給ふ甕なり、
一甕ハそのかみ無瀬
の濱より爰に至る路
にて落し破りけれハ他の甕もて是にかへた
りといふ、今に破瀬酒部屋のうちにあり
社頭酒部屋にあり、
いにしへ大宮姫ましませし時より醸したる酒なり
とてとしことに加え醸してたへすゆへに千年酒と
唱ふ、是を飲めは災厄を除き寿命を延ふといひ伝
ふ)

按するに二龍宮^{和多都美}もとより爰にありし本
社にして地主神なり、皇妃をこゝに葬祭り
しより御廟領となして八千戸を封し大社と
ハなれるなるへし、元龜二年七月十八日兵
火の為に古史失ひ徴しとするに足るものな
し、姑く縁記に拠りてその旧説を備ふのミ
縁起ハ瑞応院三十七世袂室田記及び古老の伝をもて著す所なり、
然れとも問々御説をましへ尽く信るにもたらず今其要を採といふ 三代

実録曰、貞觀二年三月二十日庚午薩摩国從五位上開聞神加從四位下、類聚国史曰、貞觀八年四月七日辛巳授薩摩国從四位下開聞神從四位上、三代実録曰、貞觀十六年七月二日戊子地震太宰府言薩摩国從四位上開聞神山頂有火自燒烟薰滿天灰沙如雨震動之聲聞百余里、近社百姓震恐失情求之著龜、神願封戸及汚穢神社、仍成此崇、勅奉封二十戸社記曰、此時薩州の一宮となし崇敬によて火止む、清和天皇入皇五十六代帝也、貞觀十六年甲午八月二日封戸を奉る勅定あり、右大臣基經有判なり、元龜二年七月十八日燒失令其写五十八代光孝天皇ヲハウカウ之時同実録仁和元年十月記曰、薩摩国言七月十二日夜晦冥衆星不見砂石如雨、檢之故実額娃郡正四位下開聞神發怒之時有如此事、国宰潔齊奉幣雨砂乃止、八月十一日震聲如雷燒炎甚熾雨砂滿池昼而猶夜、十二日自辰

至子雷電砂降未止砂石積地或処一尺已下或処五六寸以上、田野埋瘞人民騷動、至是神祇官卜云、粉土之怪明春彼国当有災疾、陰陽寮占云、府邊東南之神当遷去於隣国、由是蚕麻穀稼有致損耗、是以下知府司奉幣部内衆神以祈冥助焉

鐘樓 長廳の前にあり、鐘銘云、奉施人当国一宮開聞社鎚鐘壺口、鑄用途壺百貫文 右所奉施入如件

永和五年三月八日 当郡領主左衛門尉憲純ミサキ陵 開聞本殿の右脇皇后の陵と同所なり、石端籬の内平石二あり、いつれを天皇いつれを皇后といふことを分たす、天皇初め御遺詔ありて同所に陵を建たりと開聞縁記にハ見へたり、今謹て天皇の陵を按するに延喜エンキ

諸陵式江次第十芥抄等皆天智帝の陵は山城

国宇治郡山科にあり兆域東西十四町南北十

四町陵戸六烟今俗に御廟野といふといへり、

公事根源抄云、天智天皇の御陵山城国山科

にあり、昔し此御門御馬にめされて山科の

里に行幸ありて其俣帰給ハさりき、然るに

崩御をいつくとも知人なし、た、御沓の落

留りたる所に御陵をそたてける、いとふし

きなる事にて侍りき

此説水鏡中
卷に出たり

白石遺文云、天

智帝崩、昔人相伝幸山科騎馬入林中、不知

所之、又曰、帝馭上天、群臣葬其象、又曰、

象化石於今猶存

帝王編年水鏡
樹鳴曉筆抄

或曰、帝之終不可

詳也、故曰升天云尔、史之所書何足尽信焉

云々、天皇十年九月病し大弟

淨御原天
皇是なり

に位を

譲り給ひ十二月乙丑近江宮に崩し給ふ、癸

酉新宮に殯す

日本
書紀

大友皇子

天智帝
之御子

大弟をおそは

んとそはかりける、大弟ひそかに芳野を出

て難を他州に避く、美濃尾張に軍起る勢多

の合戦に皇子殺され給ひぬ、かゝる時節な

れは天皇ハ筑紫に潜幸し給ひ終に此地に崩

し給ふこと疑をのこすにもあらず、また一

説に筑前国朝倉宮

朝倉宮ハ人皇三千八代
齋明天皇都を建られ
木丸殿といひし所なり

に御

座ありしといひ伝へ天智帝の御製新古今雜

中に載たり

朝倉や木の丸殿にわかをれは

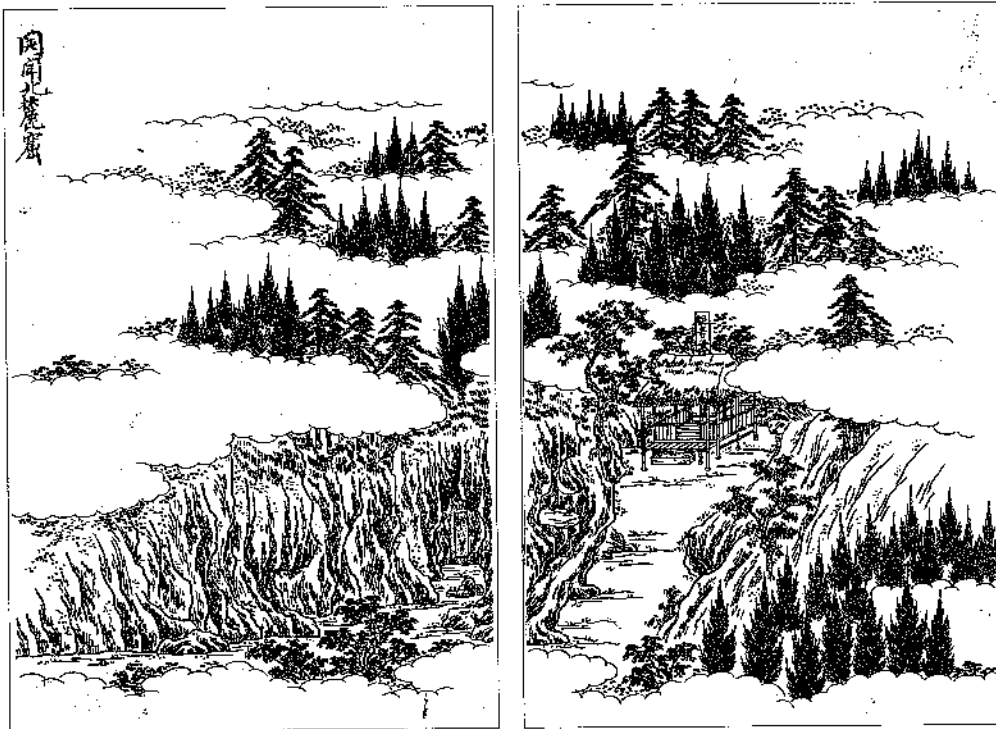
名乗をしつゝ、ゆくハたかこそ

天智天皇御製

又日州志布志に御下向の時御着船の跡御屋

しきの跡なとありて遺説おほし、又指宿新

宮社等の説をもておもひ合すへし



開聞山普門寺瑞応院 開聞神社の別当寺なり、

本尊聖観音開山智通僧正、人皇三十六代孝

徳帝大化五年己酉の春嶽の麓幄屋に草庵を

むすひ白雉三千子の歳今の地を開て造営す

といふ 智通齋明帝四年七月沙門智達と共に新羅国の船に乗り入唐玄奘三蔵法師に謁し唯識を兼学し帰朝の後、白鳳元年壬午二月勅して僧正に任す、終に仙となり其所在を知らず云々、元亨釈書卷十六に智通伝えたり 其後数百年を経て

廃壊に及びしを邦君道鑑公真言宗舜請和尚

をして神殿諸社寺家を再営し舜請を以て中

興とし坊津一乗院の末寺とす 舜請ハ応永廿七年庚午十一月廿七日東之坊に

入定する百三十一歳と云々 実に正中三年丙寅の歳なり、爾来

屡再興ありて今に至りて退転なし

岩屋 開聞山の北麓にあり、社殿をさること

凡拾三町大宮姫誕生の地なり 事ハ前に記す 岩窟にあ

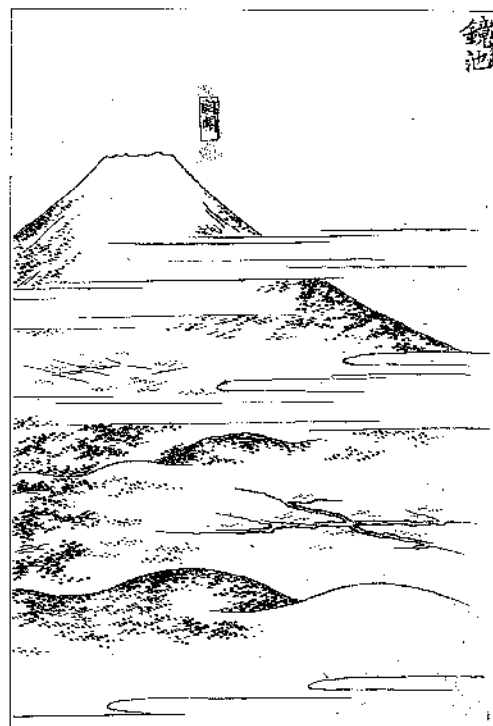
らすして谷合なり、聖観音を安置す堂の右

岩間に誕生石あり、巖に自然の半月形あり、

是奇事といへり

御馬所 仙田村にあり、天智帝の御馬を立置れし所なりとていにしへより今に至りて厩を建て神馬壹疋を銅置御馬所と名つけ開聞社祭祀宮巡り^{年中十}_{七度}あることに鞍を置神事の用をなすといふ

土器門 仙田村にあり、天智帝の従臣仙田某こゝに居住し離宮の土器焼所なり、今に至りて神事ことに土器を納めてその故実を伝ふといふ、同所番匠園といふあり当社の大工こゝに居住す、仙田村ハ所々かくのこゝき古跡多し、七夕門^{七夕に竿を染殿に納む}_{染殿ハ開聞宮の染屋也}御鑰門の類なり、事ハ開聞縁記にありこゝに略しぬ鏡の池 仙田村にあり、嶽の麓にして社をさること寅卯方凡拾五町余、縁記曰、廻り五



町余深さ九尋余大小の樹木枯株あり、嘉吉三年六月朔日池となるといへり、形大円鏡のことくして開聞嶽の影をうつす池の明神の歌なりとて

縁記

月も日も光り鏡の池の水

たえんかきりを我ありとしれ

無水池 鏡の池の近きにあり、縁記曰、池の

廻り四町余、古しへの鏡の池是なりといふ、

嘉吉三年六月朔日瑞応院住僧快雅弟子千寿

丸マルといひしもの此池に沈む、時に快財とい

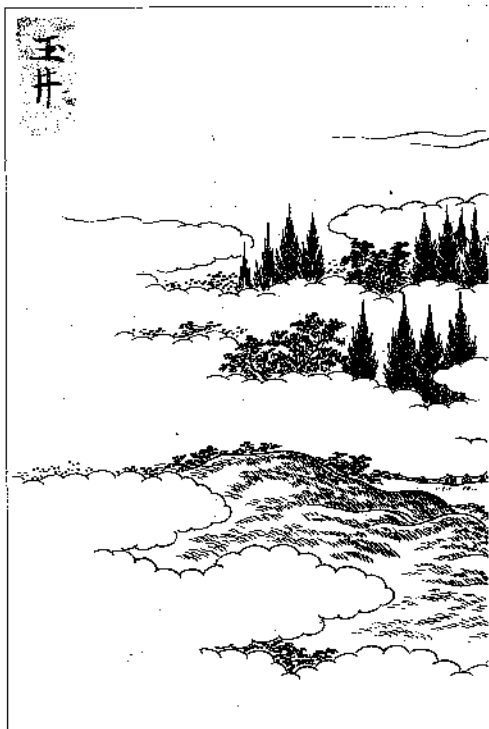
ふ僧快雅の弟子是を歎き池上にをひて壇を設け護

摩を修す、一夜に池水涸て水なし池となり

しといへり

「薩摩かた鏡の池のひとつをし

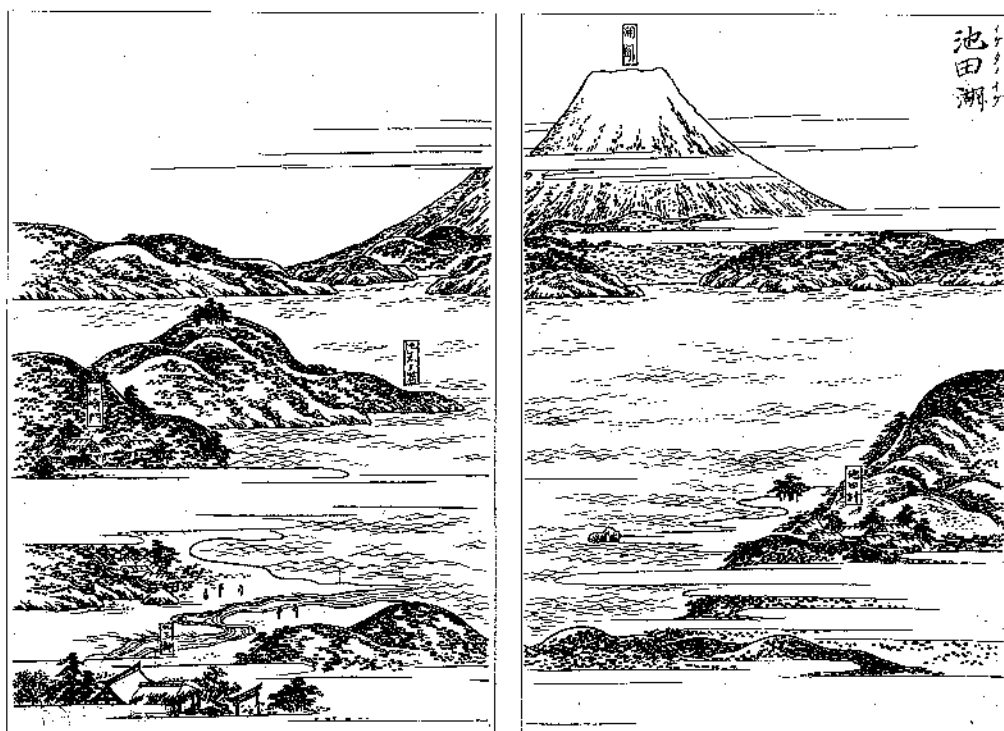
をのかすかたを友と見るらん

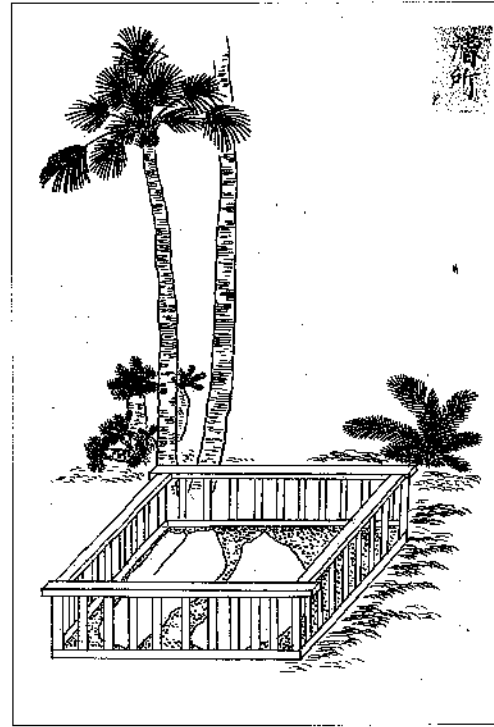


信輔

玉井 十町村にあり、開聞宮一の鳥居亥子方
 三町三拾八間、神代彦火々出見尊御兄火闌
 降命の釣をかり給ひて失はれしを返し給へ
 と責給ひければ尊憂苦甚た深し、時に塩土^{シホツチノ}
 老翁来りて故を問ひ翁のはからひにて海
 神の宮にゆき給ふ、玲瓏門前に井あり井上
 に湯津桂樹あり尊其樹下にたゝすみ給ふ、
 美人来りて玉の鏡をもて水を汲む即海神の
 女豊玉姫なり、尊此姫を娶り龍界に留り給
 ふこと既三年玉の井ハ其神跡なりといひ伝
 ふ、森の中に井戸の跡あり後世石華表を建
 て古跡を伝ふ事ハ日本書記及ひ開聞縁記に
 委し、故にこゝにもらしぬ

池田の池 池田村にあり 池田村ハ今揖宿郡今和泉に
 属し鳥津因幡忠厚の領分也 池の



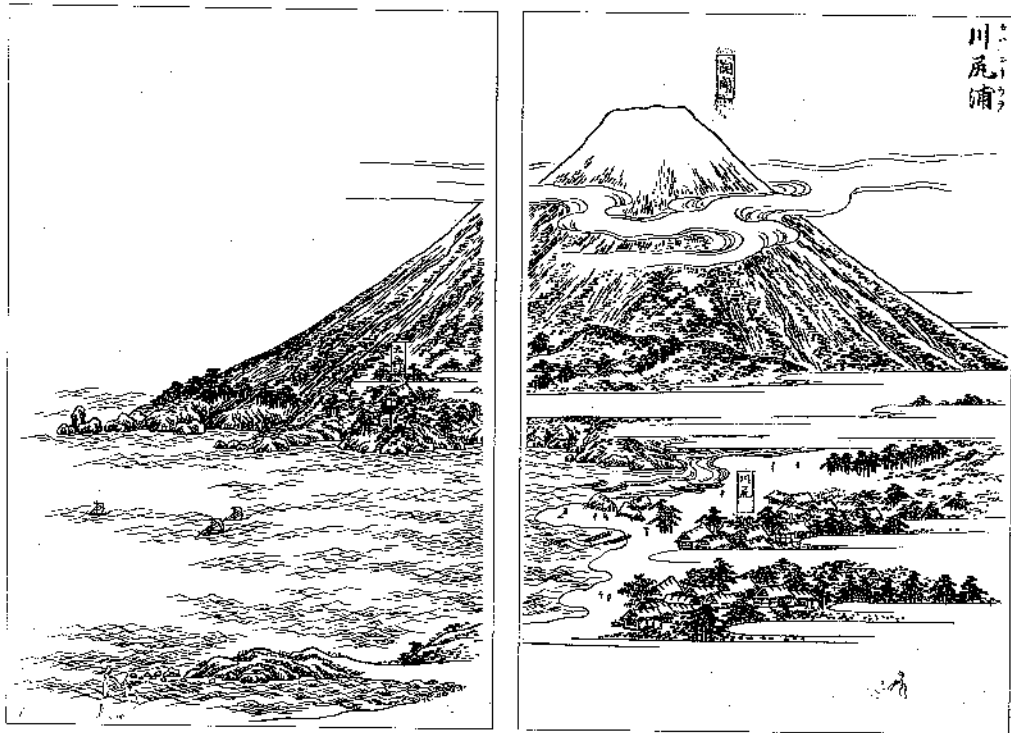


廻り四里三拾壹町余里俗伝へて三里廻りと
いふ、穎娃地頭飯屋より寅卯方凡式里余領
主飯屋をさること未方壹里式拾余町開聞宮
の御池なりといへり、常に船を禁す、池の
辺に久玉大明神を安す祭神不詳祭
十月十二日久玉社の午未
凡式里許り遙に開聞嶽あり、図を写して後
に載す

川尻浦 仙田村にあり、地頭飯屋の巳方式里
六町余開聞山の東麓にあり御瓶子川オヘイシカハの末な
り、入江ありて港なし佳景にして邦君御茶
屋の場あり磯辺に天神社を安す網敷天神木像祭六
月廿二日、浦に市
立近村の里民川尻
市と唱へて群集すむかし近衛信輔公坊津におはし
ます時まうて給ひ一首の御詠歌あり
いつの世に爰にきたの、神となり

わかの浦波よせて見るらん

御詠歌はミつから社殿の壁に書給ひしを其
後社殿再営の時好事のもの公の御染筆なり
とて宝殿中に納め置しに六十年前池魚の災
にかゝりて今ハなし、天神社を過て渚に至
れハ花瀬といふあり、大岩のむしろ二十八
かりもしけむ程の凹なるにうしほたゝへて
其中に生す磯かきの類にして海草に似たり、



あたかも五色の花の如し故にかく名付しに
 や、此浦の賤女志多羅躍といふを伝へたり、
 はしめ大宮姫志賀の都を出て下向し給ひし
 時船中に始るといひ伝ふ、后宫八帝の御め
 くミ深かりし御別を思ひ給ひて御愁歎堪か
 たくおはしけるゆへ船中悲涙衣を潤す、よ
 て従臣侍女異形の装束をなし種々の狂舞を
 奏し或は志多羅歌を作り踊をなして后宫を
 慰め奉りし故実なりと云々、事ハ開聞縁記
 に見えたり、歌の数十三あり諷靜にして近
 世の俗謡にあらず

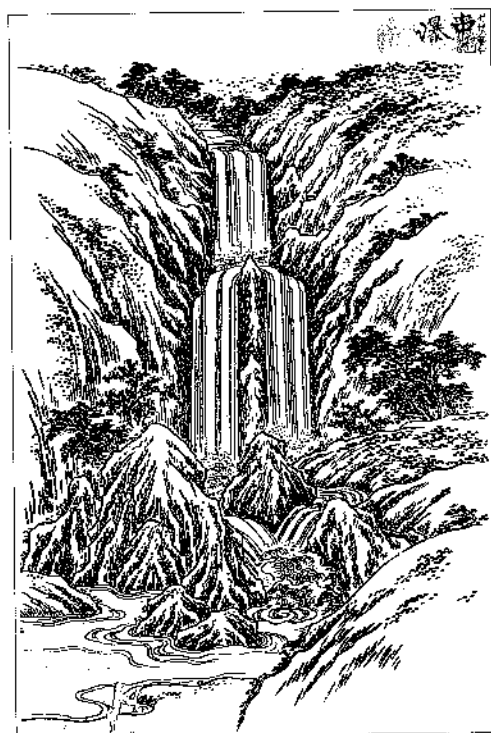
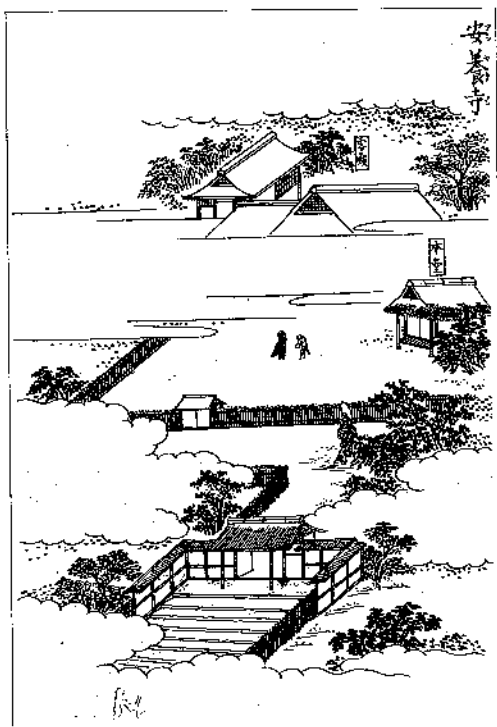
平源山証恩寺 郡村にあり、地頭飯屋より戌
 亥方式町許り、曹洞宗福昌寺の末なり、義
 天公の開基にて開山仲翁チウツウ和尚、本尊釈迦如
 来、むかし兵革の為に荒廢に及ひしを邦君

寛陽公の時重興し給ひしといふ 当寺屢火災あり縁
記伝ハらず、万治

二年住僧鏡閑和尚
所誌の鐘銘に拠る

護誠山常楽院安養寺 郡村にあり、地頭仮屋

の東隣なり、真言宗坊津一乗院末寺にして
大野嶽権現の別当寺なり開山詳かならず、
右大將源頼朝公一国一箇寺を建給ふ当寺は
其一なり、本尊釈迦弥陀両像ハ頼朝公及ひ



夫人の真影なりといひ伝ふ兩像ハ古作なりしに寛陽公
取りて府城護摩所に安ず、
今の兩像ハ其代となして貞享三
年丙寅八月下し給ふ証書あり 往古伽藍なりしに幾星霜

を経て廢に及ひしを僧雪巖再興して中興開セツカン
山となり觀音寺と名く、貞享四年丁卯九月
住僧快譽古へに復し安養寺と改む

中の瀧 郡村にあり集川の上流なり、地頭飯
屋より丑寅方式拾三町余、此川に三瀧あり
其中なるゆへ中瀧といふ、高さ凡七尋横三
四尺の間にして三重に落たり、式町許を流
れて又瀧となる高七尋余横七尺計り塩蘂の
瀧と名く、景色ハ中瀧に及ひかたし、上の
瀧ハひきし

花瀨 開聞嶽の西麓脇浦の磯辺にあり、地頭
飯屋より午方凡壹里拾貳町余、磯岩多く町
間量かたし、潮汐漲り流れ岩間に潮溜りて



花瀨

池の如し、潮底を臨めは磯かきの類五色の色をなす、或ハ時にして出或ハ時にして没す、四季共にあり其形円にして大小あり、大なるハ圍五六寸小なるハ三四寸菊花に似たり、名つけて花瀬ハサセといふ、磯石間に蠣の種類多し、其中に形ち小にして舌あるものあり、土俗これを勢いと呼ふ、蛭の字を用ゆるか、そのせいの類潮底にして、舌を吐て五色の色をなす、故にこれを見るに出没隠見定まらず、名つけて花勢いといふ、其海岩急瀬の間にあるをもて俗に花瀬と呼ふといふ、嶽の東川尻浦にもまた花瀬あり、脇浦にハ劣れり

水成川 御領村にあり、地頭飯屋を去ること西方式里三町余、其水源は同邑辻風といふ

所より出て、水成川浦の海浜に至り、流れて海にそゝき入、其景致もつとも美なり、人家あり、水成川浦といふ、水成川の東拾貳町余、海邊に續きて石垣浦同村にありといふ、川湊にして小船を繋ぎ泛へし、天平勝寶六年四月大宰府言、入唐ノ第四船判官正六位上布勢ノ朝臣人主等来泊ス、薩摩ノ国石籬浦と続日本紀に見へたり石籬石垣に作る 能因法師か歌枕に薩摩国名所みなれ川と載たるハ此川の事ならんか、歌所見なし、出水郡庄村にも同じ名のところあり再考すへし

薩藩名勝志

卷之九

薩藩名勝志卷之九目錄

出水郡

加志久利社

箭筈嶽

上宮嶽

成願寺

龍光寺

淨円寺

脇本港

霧野

轡石

諏方神社

長島

常念寺

山内寺

幸善寺

米之津

箱崎八幡宮

専修寺

愛宕山

御成川

瀬崎馬牧

木牟礼城跡

駒還

隼人迫門

諏方神社

長光寺

俊寛石塔

熊野権現

感応寺

紫尾権現

洞亀寺

文殊院

蓮華寺

遊行松

亀井山城跡

屋地村

福性院

開聞神社

大島

高之口竜王岩

雪溪和尚墓

出水郡

出水

加紫久利大明神 下鯖測村に鎮座、地頭飯屋

飯屋武元村に在りの子方壺里拾貳町余、祭神五座本社

応神天皇神功皇后第一殿天照太神第二殿宇

佐明神 満津姫命天照太神の御女姫明神ともいへり 第三殿住吉三神 底筒男命、中筒男命、表筒男命

表筒男命 例祭二月三日八月朔日十一月三日、当

社ハ薩州の二宮にして勧請履歴詳かならず、

文徳実録仁寿元年六月以薩摩国加紫久利神

預於官、三代実録貞観二年三月廿日庚午薩

摩国加紫久利神授從五位上、同八年四月七

日正五位下加志久利神正五位上としるせり、

延喜式神名帳に薩摩国出水郡一座 小 加紫久

利神社と載せられたり、薩摩肥後二州の境

ヤハツタケ 矢筈嶽を加紫久利といふゆへ山の名により

て神号となるといへり 上古此山を加世久利山といひしなどいふ説あり、古るき書に所見なし

邦君慈眼公の時故ありて寛永元年社殿を再

造し給ふ、又享保六年浄国公宮殿を造立し

大社となし別当寺を側に建立して社司黒木

氏と共に祭祀の事を司さとしめ給ふ、今

賀の字を通し用ゆ

加紫久利山総持院幸善寺 加紫久利神社の右

脇にあり真言宗新義京都智積院の末にして

開山前僧正快存 クハイシン 智積院住持 本尊正観音 坐像 享保六年

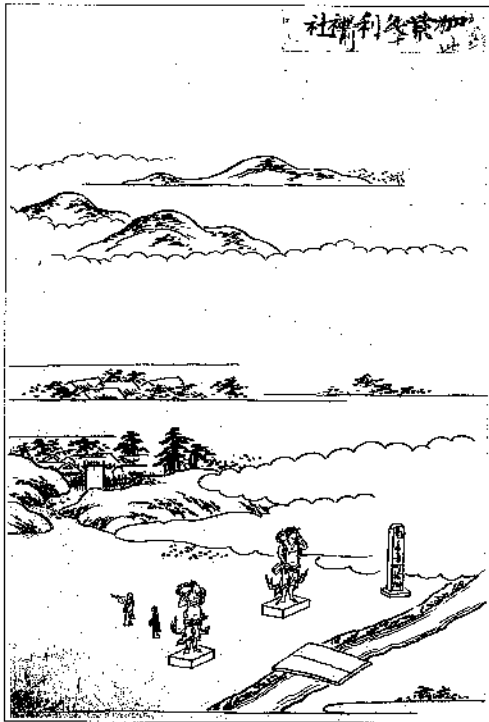
浄国公加紫久利神社再興の時に及びて幸善

寺の廃跡を再造して別当寺となし智積院の

末となす、田を寄附して宥敝法印 ユウヘイ 快存弟子 をも

て二世の住職とす、翌年三月十五日嵯峨大

覚寺宮許容を蒙り院家莊嚴院を兼帯す

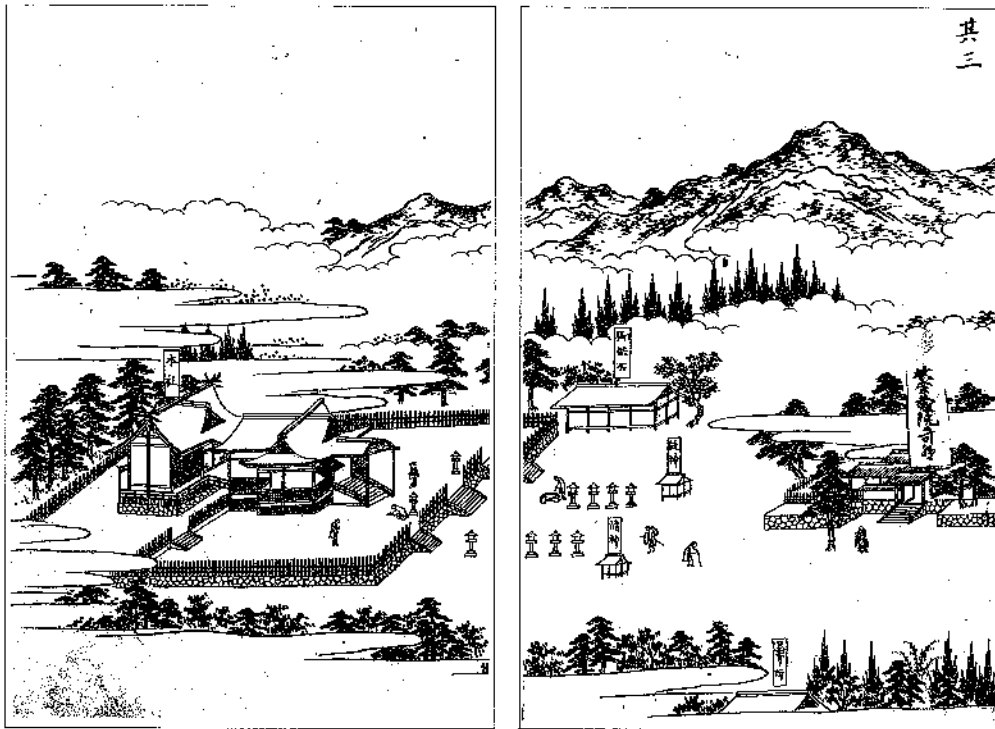


箭筈嶽

カミサハフチ
上鯖渕村に在り

志久利神社を距ること凡壺里余、絶頂に権
現を安鎮す、雌嶽雄嶽とて二峰あり肥後州
より見望ハ其形箭筈に似たり、雌嶽ハ肥後
に属し漸卑し、昔し桧墻女やこしのやまと
いへるハ此嶽なるへし、東方に雁股山あり、
野中に樹木生茂りて雁股の形に似たるによ





り名つけしと云伝ふ

扶桑拾葉集

桧墻

君かいし昨日のまとのあたらぬは

やこしのやまのあれハなりけり

米之津 上鯖渕邨にあり、地頭飯屋より亥方

壺里拾六町余、広瀬川の下流にして川湊旅

舟休泊の津口なり、西方に名護浦濱松原に

箱崎八幡朝日御前の社あり 朝日御前ハ島津又太郎忠辰
妻にて求麻相良氏女なり、

忠辰生害の後自殺其
墓を崇めしといふ 南に上宮嶽東に箭筈嶽西に蕨

島天草などありて舟中に棹し其風景尤絶勝

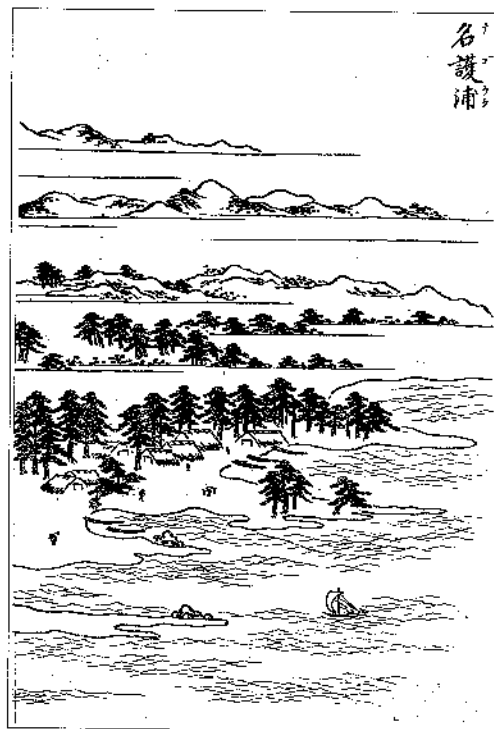
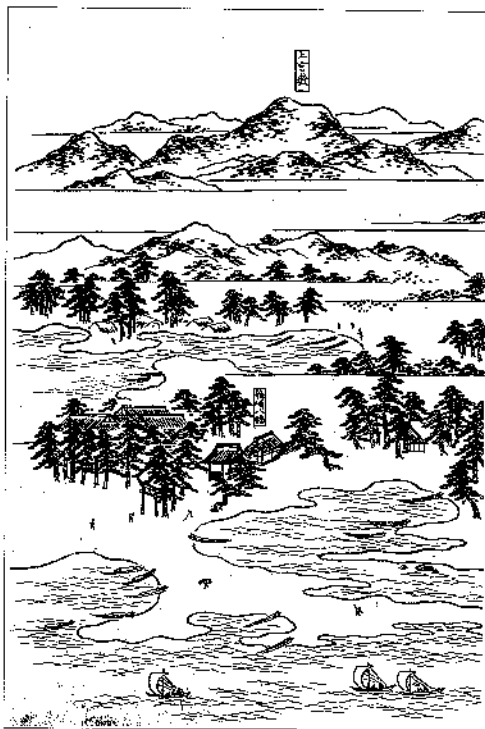
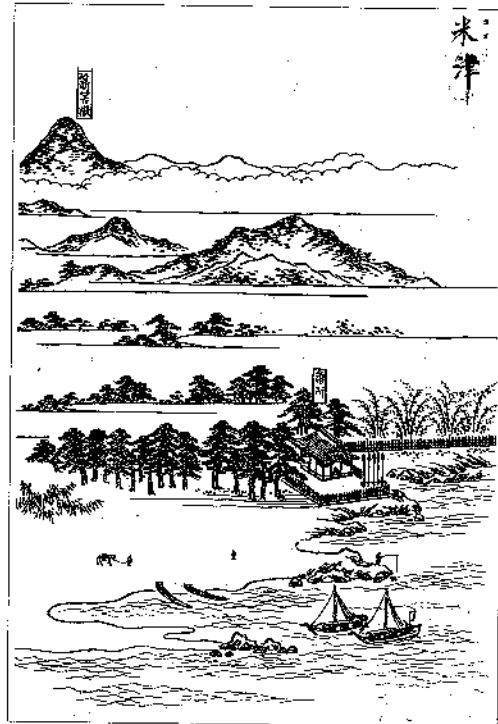
なり、此川に初春の比白魚を生す名産と云、

仲春にハ鮎多し、むかし太宰帥大伴卿下向

ありし時神龜五年遙に芳野離宮を思ひ一首

を詠せらる

万葉集第六



隼人のせとのいはほに年魚^{アユ}はしる

芳野の瀧になをしかすけり

三千風

秋の田の落穂拾ふてこめのつや

上宮嶽 武本村の鹿倉なり、地頭仮屋の午方

三里拾九町余、午方山崎に属し卯方宮之城に属す、頂上に社を建て上宮権現といふ

箱崎八幡宮 上知識村に鎮坐、地頭仮屋を距

ること申方拾八町余、祭神筑前箱崎宮に同

し祭九月廿五日初め得仏公入国し給ひし時筑前博多

海上に於て逆風甚し、商船尽く破揖し公誓

願の旨あり、山門院に着岸の後野田極楽寺

の境地に勧請し給ふ、其後名護浦に遷宮し

又六月田村に遷し又今の地に遷坐すといひ

伝ふ 野田極楽寺の境内に八幡鎮坐の遺跡あり小社を安して箱崎八幡といふ、側に古松あり名護浦にも宮跡に箱崎八幡宮を安す、六月田に



も宮跡に若宮

八幡を安す

ホウチサンムリヤウジキヤン

宝地山無量寿院成願寺

上知識村にあり、地

頭飯屋より申酉方拾町余、真言宗幸善寺の

末寺にして箱崎八幡宮の別当寺なり開基の

年月詳かならず、中興開山快譽法印、本尊

阿弥陀如来

坐像

初め成願寺ハ加紫久利神社及

ひ箱崎八幡宮の別当職にして頗る大地なり

しに、文禄中の騒乱によりて堂塔悉く廢に

及ひしを慶長五年の八月邦君慈眼公再興し

給ひ田を寄附し快譽法印

快譽時に隅州始羅郡山田邑正田院の住僧なり

に命

して住職せしめ本邑の祈願所となす、其後

寛永十五年の春池魚の災はいにかゝりて記

録の片楮を伝へす

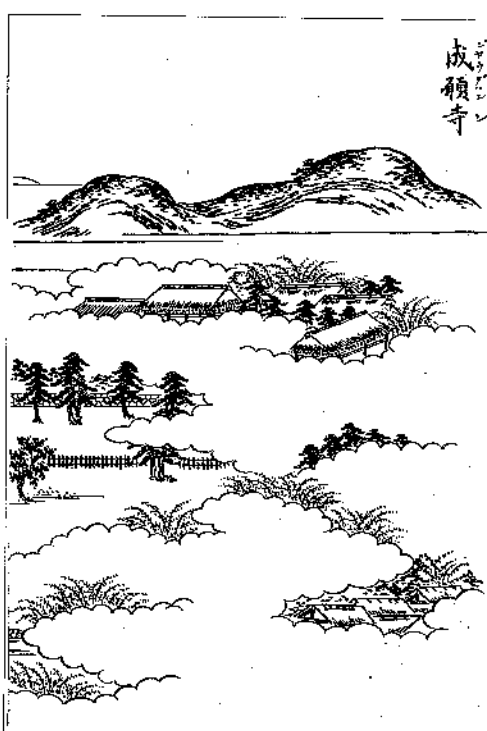
ギヤウホフサニツシンキヤン

行法山一心院專修寺

上知識村にあり、地

頭飯屋の戌亥方五町余、時衆宗相州藤沢山

トウクワサン



の末にして開山遊行二寮其阿弥陀仏、本尊
 阿弥陀如来立像島津実久開基にして年月詳か
 ならず、天正三年乙亥十二月廿五日近衛関
 白サキヒサコウ前久公薩州に下向し給ひ当寺をもて旅宿
 となし翌年三月十七日まで滞留し給ひ鹿兒
 島に下向あり、七月二日帰洛の時又高駕を
 寄られ八月廿二日洛に赴き給ふといふ、是
 によて公吹挙し給ひ天正六年戊寅正月五日
 正親町院オホキマツチノシンの勅願所となし給ふ、
 当寺仏法興隆之事尤以神妙也、弥可奉抽
 宝祚延長之懇祈之由者 天氣所候也
 仍執達如件

永祿六年七月十日

左大辨判

専修寺弥阿上人

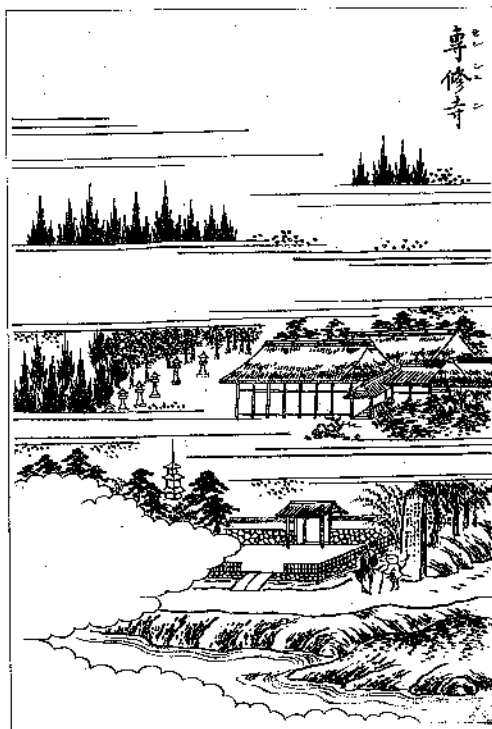
御房

今度寄宿之处種々馳走尤神妙候、然者
 当寺之儀向後相定勅願所可為家来
 之状如件

三月三日

近衛前久公
判

専修寺上人



当寺之事可号 勅願所之由被聞召畢、

然者弥令専仏法興隆之沙汰可奉抽国家

安泰国郡無為之懇祈之由者 天氣

所候也、仍執達如件

正月五日

右中辨判

専修寺弥阿上人

達磨山竜光寺タルマサン 武本村に在り、地頭飯屋の巳

方拾町余、曹洞宗福昌寺の末にして開山在サイ

天景竜和尚テンケイリユウ 福昌寺四世 本尊正観音半像長壹尺壹寸五分定朝

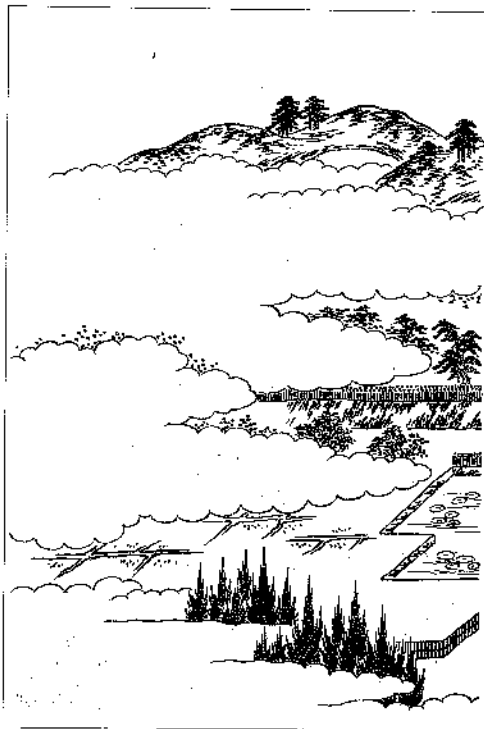
大泉云報身盧遮那の像といへり 当寺ハ長祿三年出水領主島津国久

亡父松夫道存居士の菩提寺となして建立す、

二世東月承珊和尚トウゲツシャウサン 江州の人俗姓佐々木氏 初め渡唐の志あ

り薩州に下向し纜を坊津に繫く、一乗院の

住僧東月の風徳を見て福昌禪寺在天和尚サイテン



聞す、在天東月を福昌寺に留め福昌五世の住職を譲るの約あり東月これを許諾して渡唐の志を止め法を在天に嗣く、長祿元丁丑春在天能登總持寺輪番となりて至るの路次石州の河水を渡り駕輿丁歩を失して水中に投し遷化す、東月師に代り往て總持に進む、其後退院して薩摩に帰る

福昌寺ハ既に心岩良信和尚住職たり、爰に於て東月渡唐の縁絶福昌の住山も叶ハす望を失ひ江州に帰らんとす路出水を経て辻堂に止宿す、その時国久禪寺を建るの志あり、

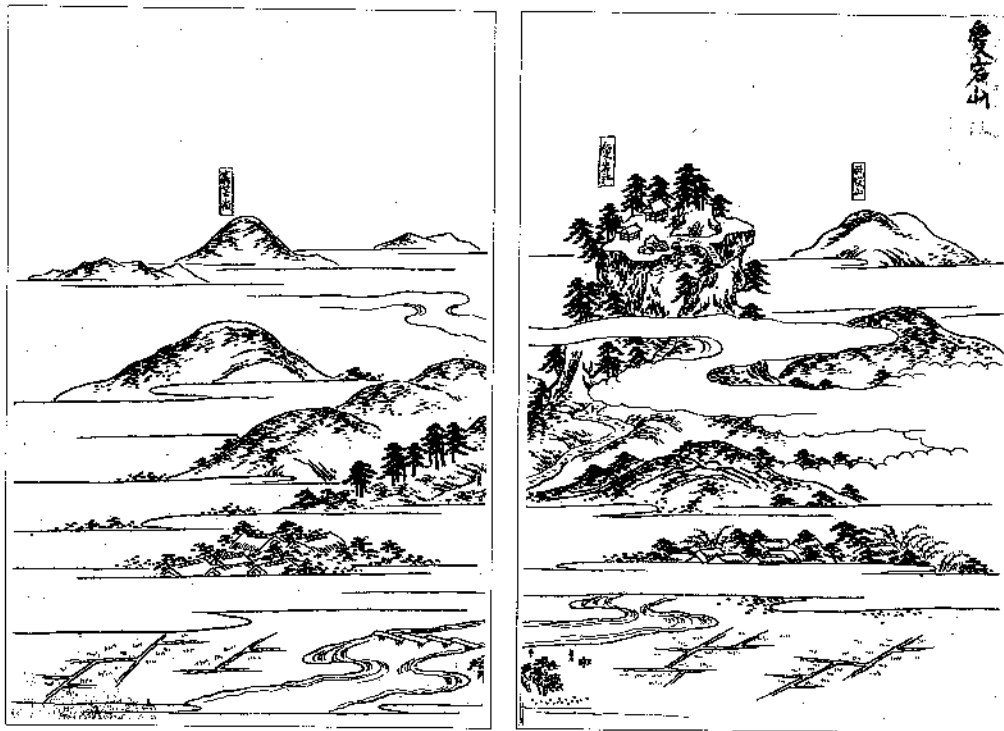
故に祈願所多宝寺の住僧多宝寺今ハ廢壊其跡に本尊藥師堂存す 東月

の來ることを国久に告、国久聞て頻に東月を招請し東月の望にまかせ七堂伽藍の梵刹を造営して在天を追請し開山となし達磨山

龍光寺と号す、よて在天一派の本寺といふ、当寺靈宝に道元和尚虎刻柱杖龜毛拂子、通幻和尚法衣袈裟地綿黃色にして纈背に寂禪附与真梁と六字を書す、通幻自筆といへり、仲翁和尚応量器鉢底に翁の一字を朱書す あり是皆元來福昌禪

林の什物にして在天身に随へ東月に伝へて当山の重宝となる、又名勝十景あり、大山門、竜門橋、放生池、案山竹、飛龍窟、白蓮池、岩竜泉、西山瀑布、首山松、遠望嶺今其名而已を伝ふ、宝永五年戊子の夏当寺十六世大鼻和尚所記の由緒記に見えたり

愛宕山 上鯖渕村にあり、地頭仮屋を距ること寅方式拾貳町余、岩組の岡にして絶頂に社を安す佳景なり、島津義虎崇敬厚しといふ、天正五年丁巳六月廿四日近衛関白前久



公染筆三十六歌仙の額を掲ぐ、別当寺ハ修
験宗千手院といふ

無量山浄円寺 武本村に在り、地頭飯屋より

西方四町余、浄土宗隅州帖佐願成寺の末に
して開山運ウシヨ管上人、本尊阿弥陀中將姫縫
阿弥陀 二世

雲管上人筑後国正覺
院の住持 文祿三年の秋建立す

御成川 庄村にあり庄村ハ知識村の枝村にして老松庄と
いひしを上略して庄といふといへり 地

頭飯屋の西方壱里三拾町許り、高尾野川野
田川の末にして海に入る、西方瀬崎野を見

当好景なり、川端に御成川寺あり生松天神オヒマツ

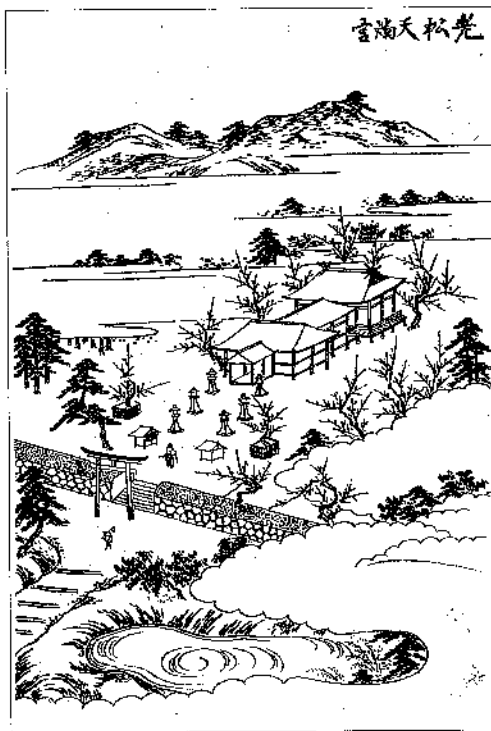
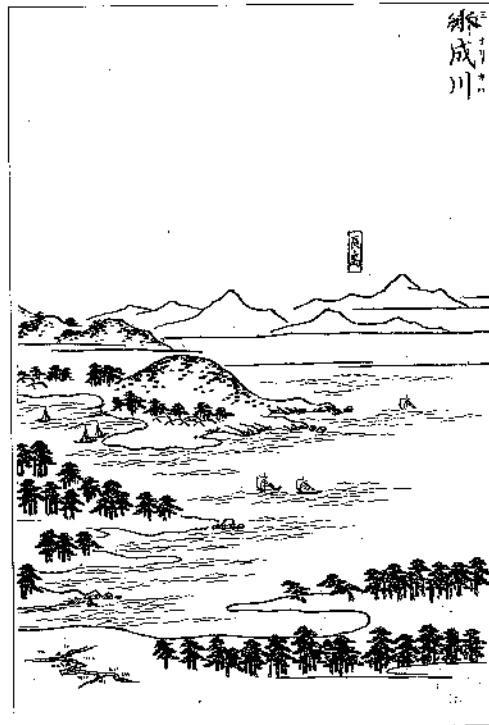
の別当にして醫王山東持院といふ、本尊藥

師如来、開山頼林法印宝永四年四月建立す

る所也、初め醫王山東持院東福寺といふ寺

ありて天正中廢に及ひしといふ、建久八年

薩摩国図田帳を見るに山門院生松庄式拾四



町とあり宰府安楽寺領と見えたり、よて天満宮を安鎮する歟、寛永二十年二月廿四日の夜社頭炎上す、いにしへ菅家庄津へ着船し給ふといふ説あり、能因歌枕薩摩国名所ミなれ川ハ此川をいふならんか、古歌所見なし、額娃郡御領邨にも水成川の名あり再考すへし

脇本港 脇本浦にあり、地頭仮屋より西方凡

五里、搗之浦カチノウラともいふ、寛陽公仮殿を構へ

給ひし遺跡あり、港中に一島あり辨財天を
安す寺島といへり眺望の風景絶妙といふ

搗之浦者吾邦域而繫纜者数日旅懷難禁幽

情未伸、一日自船下而催山遊、登山思靈

運之著屐、臨江記祖逖之擊楫、幸序属仲

春草木得マヤ育之時、自有喜色逸興過飛彩

霞杳照、出岫雲舒卷極巔山縱横此間不可

無吟、卒賦一絶略補志之所之耳

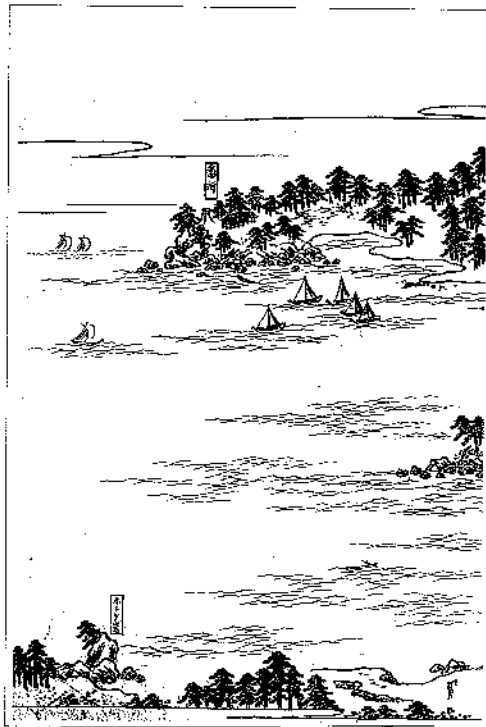
陽光徹海煙花樹護村辺見説搗之浦、晴山

不讓連 守隅子

瀬崎馬牧 西目村にあり、本田静観初めて馬

を畜ふと旧記に見へたり静観ハ本田二郎貞サタ

親チカ法号なり、笠山三日月山の名あり



霧野 西目村の内にして人家あり桐野邨とい

ふ、地頭飯屋の酉戌方三里拾四町余、昔し
壺里許りの入海にして湊のありし所といへ
り潮汐日々にかれて遠干潟となりしゆへ元
禄十三年尾野島に三百六拾余間の堤を築き
田地となす、天正初年までは島津義虎船手
の役所をも建しと見へたり、肥後の遊女^{カキ}松
墻きりのみなど、よみしはこの所なるへし、
湊口尾野島岬は肥後より能みゆる所なり、
今霧の字を桐の字に通し用ゆ

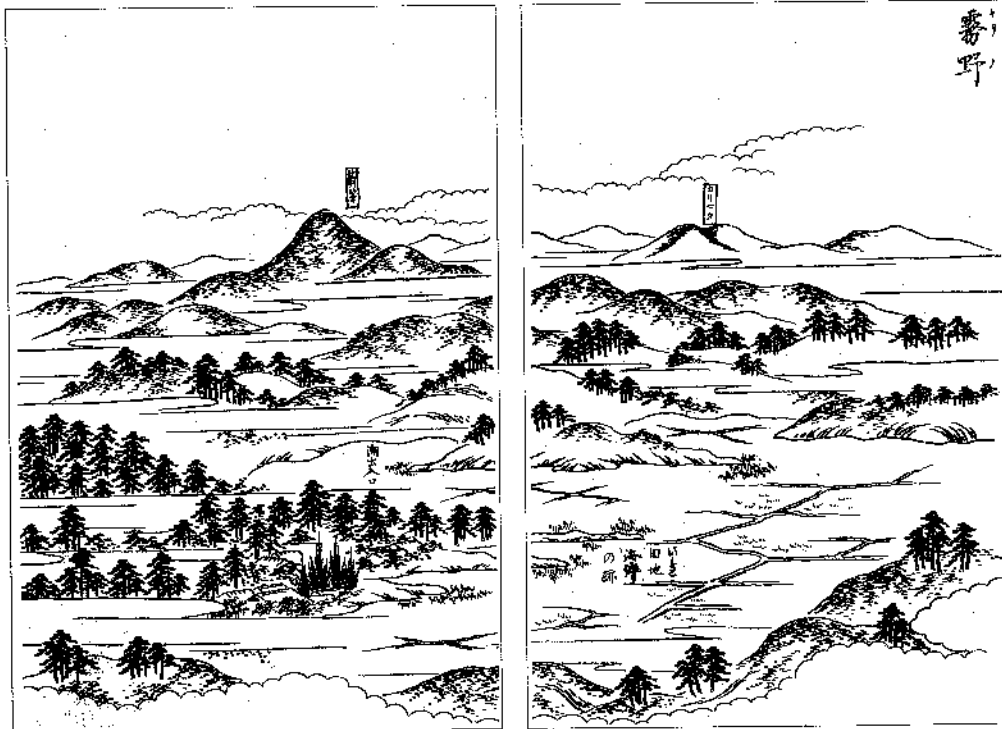
扶桑拾葉集

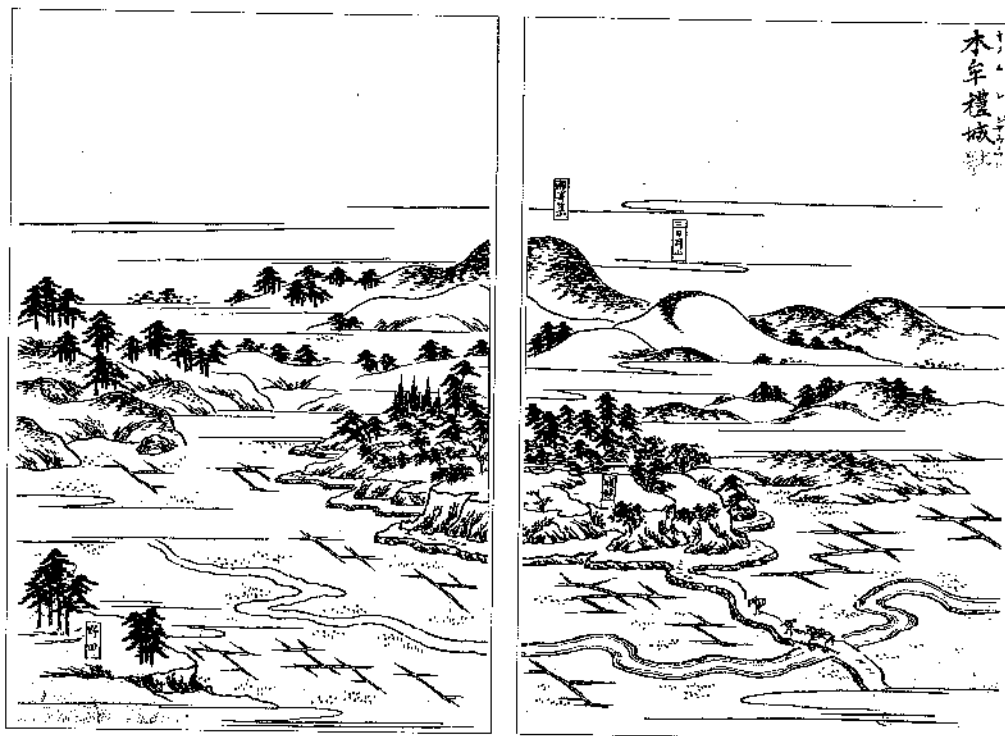
たちしきりきりのみなどかふりくらん

ときや八秋のせきにいりぬる 松墻

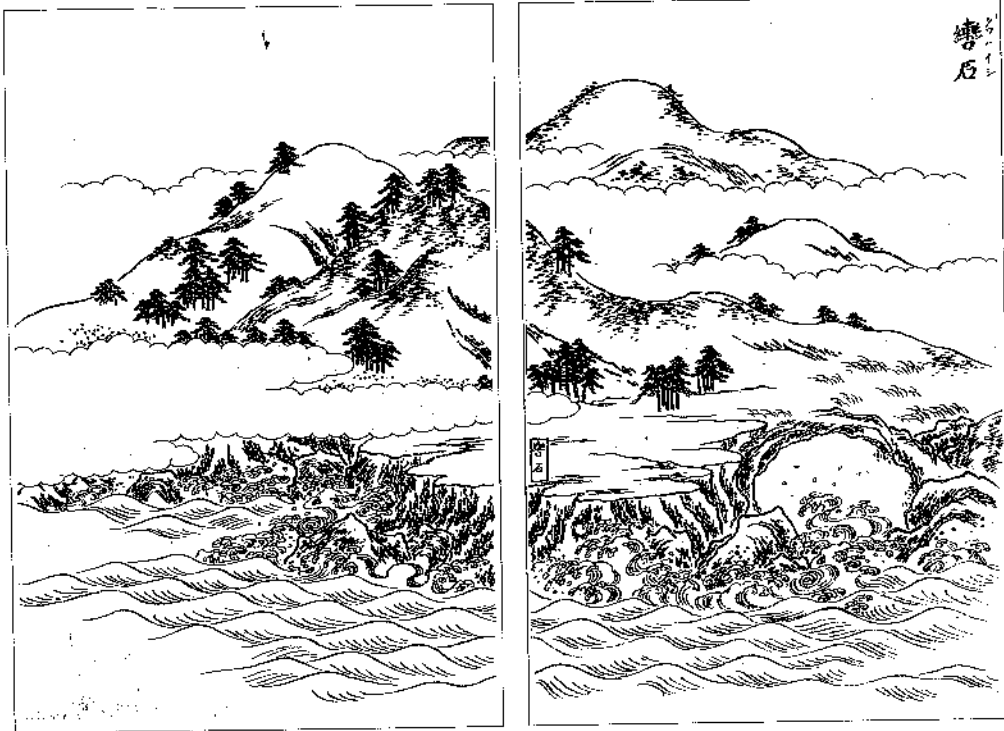
木牟礼城跡 江内村にあり、地頭飯屋を距る

こと西方凡式里拾式町 江内村ハ西目村の枝にして
享保十九年別る、と云 得仏





公薩隅日三州の惣地職「頭」脱方に封せられ山門院ヤマドノサンに
 下着し給ひし初め此所に居住し給ふ、城跡
 の高きこと凡式丈有余平地なり、四方沼に
 して東西に門の遺跡など残り今島となりて
 民家あり、西方に本田屋鋪、子方引続きて
 竹林城タカハヤシシヤウといふあり、本田親恒公チカツネに先達案内
 の為に下向して居城せし所なりといふ伝ふ、
 轡石 江内村渚涯にある、幅四間許りの平岩
 なり、地頭飯屋より戌亥方四里式町余、得
 仏公初めて国に就給ひし時爰に着船し給ひ
 て此石上より馬に騎給ひしゆへ名付て轡石
 といふといへり、此灘に公の着船し給ふこ
 と旧記に所見なし、按するに江内の入江に
 入津し給ハんに干潟になりて着かたく西の
 方ハ所謂隼人の迫門セト潮汐漲り流る荒瀬なる

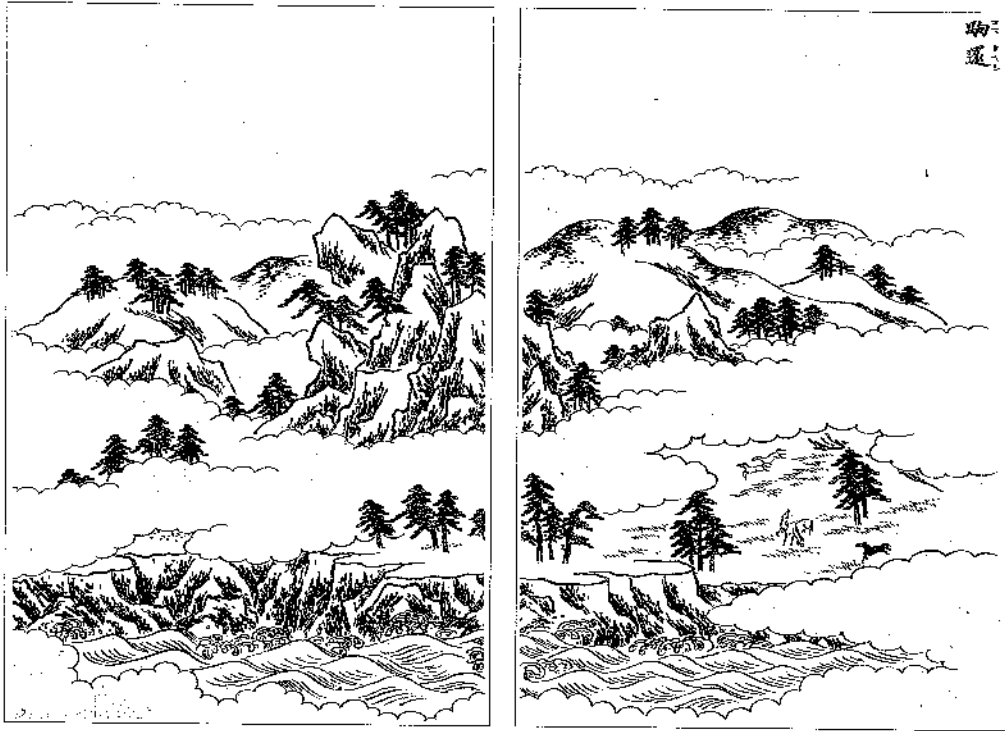


ゆへ船を着は灘涯の辺路を通り給ふなるへ
し

駒返 西月村にあり、轡石西方三拾壹町余に
して黒濱に通るの路なり、大石巖々として
馬のかよひなし、得仏公馬を返して路を瀬
崎野に取り給ひ棧敷の段に越給ふ、よて駒
還といふといへり、棧敷の段今に牧中にあ
り、公棧敷を構へて木牟礼城を遠見し給ひ
ける旧跡なりといひ伝ふ

諏方大明神 江内邨木牟礼に鎮座、地頭仮屋
の戌方式里拾九町余、例祭七月廿八日当社
ハ得仏公勧請し給ひ神領八町を寄附し給ふ
よしいひ伝ふ、其後鹿兒島に遷坐し神領む
なしくなりしといへり

隼人薩摩迫門 出水長島の際に南北に流れて



式里余の迫門あり、南に大洋を受潮汐逆行
 して来り大河洪水漲り落るに似たり、潮の
 満涸を得て通船する所なり、長島に渡る所
 を黒の戸と云僅に拾町にも足らずして壺里
 の渡しといふ 黒の戸ハ出水西目村と長島山門野村に属す、出水地頭飯屋西成方四里二拾八町余 迫門
 の狭き所五町余にして揖折瀬と云潮速なり、
 出水の方にすこしの入江三所あり大すくひ
 小すくひ八合といへり、長島の方に火の浦 ヒウラ
 加世堂 カセドウ といふ湾曲あり、万葉集第三長田王 ツサタノシホキミ
 詠歌あるゆへ名所集に薩摩国の名所に載す、
 長田王ハ和銅年中の人なり、枕詞燭明抄に
 云、隼人ハ薩摩国の人の名也、日本紀に彦
 火々出見尊の兄火酢芹尊 ホノスツリノミコト の釣を借りて魚
 にとられ給ひし時兄の尊にせめられ玉ひて
 其釣をもとめんかために龍宮に入給てわた

人者先駟之義也、天子出御時先駟又禁中外
門掌警固也、或説曰、隼人昔大勢有之自大
隅薩摩等国献之云々、

万葉

長田王

はや人のさつまのせとを雲井なす
遠くもわれハけふミつるかも

夫木

公朝

さつまかた迫門のはやミしほさひハ
た、漕過ぎいかりおろさて

幽齋

東より越たる春も隼人の

さつまち遠くたつかすみかな

江戸
原安迪

おさまれる御国そしるしはや人の
薩摩のせとをすくる浪風

俳諧名所小鏡

薩摩
青牛

稲妻もをくれて行や隼人の瀬

長島

長島 出水の西にあり、島廻凡拾八里餘にし

て初め出水に属す、明暦三年九月別に外城
となして仁礼左近^{ニレイサコン}をして地頭たらしむ、自

爾以来世々地頭の人を居置き西洋異船標流

を守らしむ、属島多し、丑寅方に伊唐島^{イカランシマ}獅

子島^{シノシマ}あり、子方本浦島^{モトウラシマ}、野島^{ノシマ}、竹島^{タケシマ}あり、

鷹巢^{タカノス}邨針尾懸^{ハリヲカケ}といふ岡に出て獅子島を眺望

するに小島の磯に浪よせて賤の浦屋に煙立、

伊唐島にハ桜樹、躑躅多く春景尤美観とい

ふ、獅子島廻り八里余にして人家多し、昔

日寛陽公此島に遊獵し給ひしとて仮屋を設
給ひし遺跡存す、その時島民の労を觀察し

田地百貳拾余石を与へ窮を救ひ給ひしとなり、島民今に至りて其澤を蒙りける、伊唐島に鰐之浦あり寛陽公釣魚し給ふ所なり仮屋を構へ給ひし跡あり

諏方大明神 山門野邨に鎮座、鷹巢村地頭屋敷を距ること午未方式里十六町余、祭神前に同じ、例祭七月八日勸請年月詳かならず、

長島の総鎮守なり杜司増田氏

飲光山軍持院常念寺 鷹巢邨にあり、地頭屋敷の午未の方三町余、真言宗出水幸善寺の末にして開山快意伝燈法印

大乗院十五世寛文十一年二月十一日遷化

尊十一面觀音立像 寛文六年邦君寛陽公の命に

よて創建す、初め大乗院の末なりしに享保

中国命によて幸善寺の末寺となる

神伯山長光寺 城川内村にあり、地頭屋敷よ

り未申方凡三里九町余曹洞宗福昌寺の末にして開山真門智惣和尚出水竜光寺三世本尊釈迦如来坐像開基年月詳かならず、初め龍光寺の末なり

野田

龜翁山西勝院山内寺 下名村にあり 地頭仮

屋の亥方拾三町余感応寺の戌亥に隣れり、

天台宗比叡山延暦寺の末にして江都東叡山

の配下なり、開山性空上人播州書写山の開山本尊阿弥

陀如来坐像開基年月詳かならず、往古ハ九州

天台宗の法談所にして薩州の一山伽藍の靈

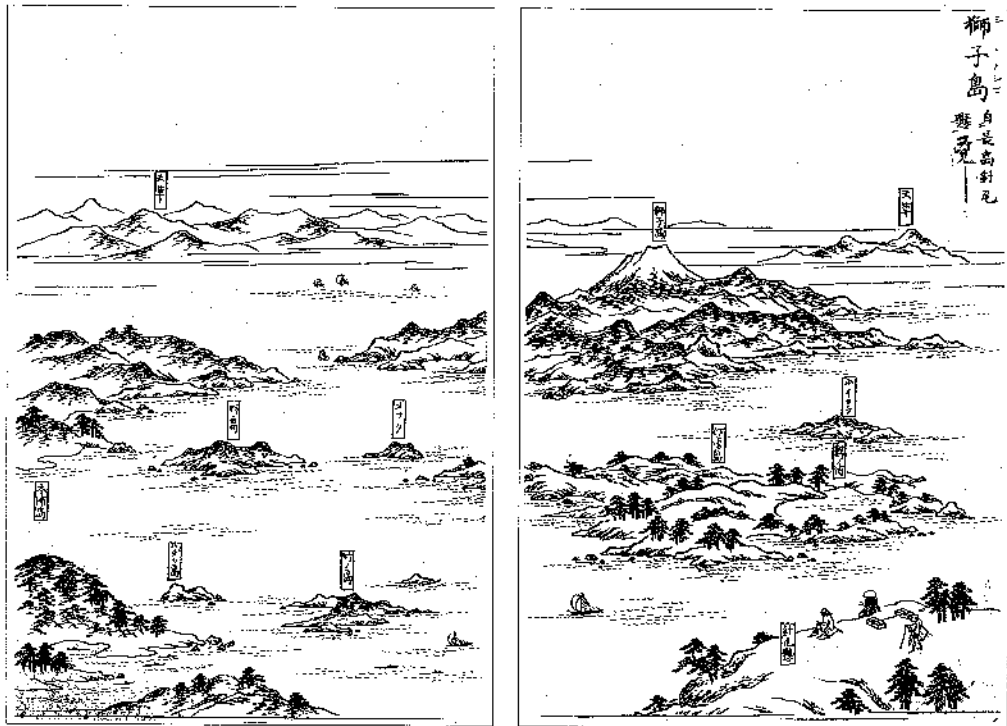
地なり、得仏公初めて当国に下向し給ひし

時祈願所となし給ひ再興し給ふといふ、天

正十五年豊臣殿下動坐の時兵火の為に旧記

を失ふ、門外に坐像の薬師如来を安す長七尺五寸古

脇坊六ヶ寺古祥坊宝相院兼四坊あり、今共に廃す



俊寛僧都廟塔 山内寺を距ること寅方凡壹町

許り、治承元年俊寛硫磺島に流されて後都

に帰りし時病におかされ船を荒崎の津に着

て山内寺に寓居し終にみまかりけるによて

爰に葬るといひ伝ふ 此所にしへハ山内寺境内と見へたり、俊寛器物山内寺重宝となるといへとも

天正の兵火に亡ひたりといひ伝ふ、又山水脇本に俊寛屋敷の跡と伝へてあり世に僧都屋敷といふ、側の井戸を僧都河とよへり水勢多く清泉なり

熊野権現 山内寺の子方に鎮坐、地頭仮屋を

距ること亥方拾四町余、祭神紀州熊野に同

し 例祭九月九日 勸請年月詳かならず、野田邑の総廟

にて社司木上氏、山内寺これを護る

亀井山城跡 カミヤウ 上名邨にあり、地頭仮屋より未

方五町余、平氏の餘裔平次郎太夫平胤国初

めて居住し子孫秀忠得仏公入国し給ひし時

此城を守ると旧記に見へたり、建久八年図

田帳に山門院司秀忠と記せり、其後島津



山内寺



熊野権現社

モチヒサ
用久出水四ヶ所領知の時彼の家随従士おの
く爰に居城せしと見へ侍りてその姓名を
伝へて今にあり

鎮国山感応寺 下名村にあり、地頭飯屋の子
方凡拾壹町、臨濟宗京都五山第四東福禪寺
の末にして開山千光国師

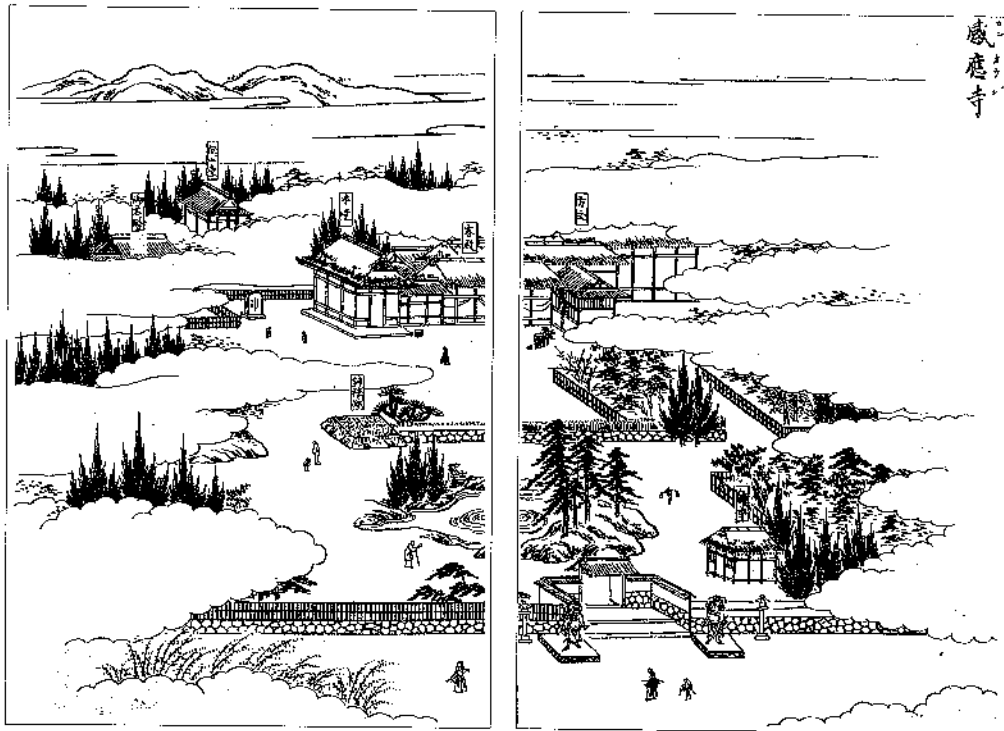
セシハウコクシ

初め薬上僧正諱ハ榮西といふ、
京都東山建仁寺開山なり、建保

三年七月五日歳七
十五にして寂す

本尊千手観音

坐像長三尺余定朝作、脇侍持国
大多門天増長天広目天凡長一尺



八寸 当寺ハ建久五年本田二郎親恒得仏公の
同作 命を蒙り薩州山門院に下向して国家鎮護の
 為に一字を建立し鎮国山感応寺と号す、其
 後親恒は鎌倉に上り親恒子二郎貞親得仏公
 の供奉して当国に下向し公を山門院木牟礼
 城に入奉り貞親ハ竹林城に住居して感応寺
 をもて公の御寺と定む、公嘉禄三年丁亥六
 月十八日相州鎌倉に逝去し給ふ、よて当寺
 内に御骨堂を建立して光明院と号し御石塔
 を立て冥福を修し奉る、即安貞二年戊子六
 月十八日なり
安貞二年八月十八日得仏公御子道仏公永田三町を
 光明院に寄進し給ふ御判の文書ありしと見へたり、
 今その御判物なし、其後光明院は
 廢して御石塔は感應寺酒掃を司る。 其後元亨三年邦君道
ギコウ 義公の時御子道鑑公ダウカンコウ当寺を再興し給ひ恵日
エニチ 山東福寺の境地を表して七堂伽藍を造営し
 雲山和尚を立て中興開山となす、此時東福

寺末山となりしと見えたり

道鑑公仏殿造立地引折紙を通、仏殿造営用木折紙を通

其外立柱儀式水田等を寄附し給ふ御判の証書教通ありしと見えたり、火災に罹り今なし、建武三年丙子九月廿七日開山祖興置文、檀那島津貞久封裏の文書も今見えす、雲山ハ東福寺二世四鑑禪師の嗣法康永三年甲申九月二十日七十一にして入定す、即開山堂下に安す

暦応二年道鑑公京都に至り將軍尊氏殿下に

謁し給ふ時に殿下喜色の余り薩国の緇林シリシに

礼樂を興すへきありや否やを尋給ひしに、

公感応寺ありと答へ給ふ、殿下使价を下し

て本寺来由主盟の家風を問ひ給ふ、雲山其

来由を説すして一偈を賦して答ふ、殿下聞

給ひ感歎して和歌一首を賜ふ

短冊の和歌ハ天文十二年辛丑正月廿口火災に

かゝりて今なし、雲山和尚寿像の讃に見へたり、是にて雲山寿像ハ当寺十世徹堂和尚圖工に請て図する所なり

和尚東福寺に至り殿下を拝す、十二月十七

日殿下御教書を賜ひ諸山の列となし又同し

き廿三日十刹に加へらる故に殿下の尊牌を

客殿に安置す、貞治五年八月廿七日大門和

尚に將軍義満公十刹の御教書を賜ふ、爾来

代々の住持足利將軍家台帖を賜りて西堂と

なる、十世徹堂和尚テッドウ 諱型明応七年十二月十

四日宣旨を蒙り仏宗大弥禪師クビゼンシの号を賜ふ、

天正中領主島津又太郎忠辰改易の時寺領退

転して今ハ小地となれり

雲山和尚寿像讚

鎮国山感応禪寺殯本州最初法窟也、暦応

第二之年本州刺史藤原朝臣島津公之京謁

見 大將軍尊氏殿下喜色之餘問公曰、公

之國今有緇林之可興礼樂者否答言有也、

蓋遊窓之魚不大也、故殿下隨地而小矣豈

其豫 叡問乎、殿下使下使价問本寺来由

并主盟家風、主盟雲山和尚不説其攸来由

之事、唯賦一偈答 叡問其偈云休將名字

問禪徒、利養紛華与道疎、只憶祖庭穉己

晚、山家村裏送居諸 殿下展書感歎相甚

輒聯三十一字詠歌答焉其歌云、

さそなけに都のおき山のはに

くもらぬ月のひとりすむらむ

繇焉終登本寺、加初地之列刹焉、諒太守之

豪華和尚之德力也、

当主席徹堂禪師求予斯記忽奔筆云、

南太門拝首

辞世、帰元一曲説似虚空泥牛吼月木馬嘶風

康永三年甲申九月廿日歳七十一入定

屋地村 下名村にあり、地頭仮屋を距ること

子方拾四町余にして木牟礼城趾の辰巳数町

にあり、得仏公御屋形の旧跡なるゆへ屋地

邨と呼伝ふといへり、南北五町余東西八一

二町或ハ三町余に至り地勢広狭あり平地に

して今畠となり地形高きこと纔に丈余、

笠懸馬場水の手口西御門などいふ所あり、

東方に若宮大明神を安置す、祭神得仏公の

霊を崇むといふ、祭二月朔日六月十八日十

一月十五日寛政二年庚戌九月寺社官邑長に

命して再興す、若宮社右脇に西前寺といふ



若宮神社

寺跡あり廃せし歳を伝へす、往古若宮社の
別当寺なりしといふ

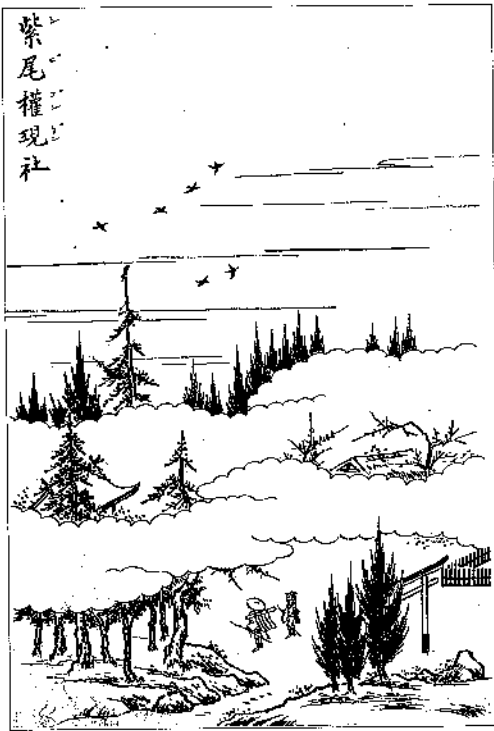
高尾野

紫尾権現 シハヒキ 紫引村に鎮座、地頭仮屋 仮屋同村にあり の

子方五町余、祭神鶴田紫尾山権現に同し 祭九

月廿八日 勸請年月詳かならず、社司鬼塚氏

紫尾山宮司寺福性院 権現の別当寺にて紫引
村にあり、真言宗出水幸善寺の末にして天



和中開基なるよし其年月詳かならず、初め

鹿兒島大乘院の末なり、享保六年国命によ

て幸善寺末となる、本尊阿弥陀如来 坐像 中興

開山快慶法印 貞享元年甲子六月廿八日遷化

齡瑞山洞龜寺 レイズイサン 紫引村にあり、地頭仮屋の已

午方式拾四町余、曹洞宗福昌寺の末にして

開山東月承珊和尚 トウゲツジャウサン 出水竜光寺二世 本尊釈迦如来 坐像 文明

十一年島津成久 シゲヒサ 薩州家三代天文五年三月四日死法名天倫才實 建立にして位

牌を安し田七町を寄附す、初め竜光寺の末
なり

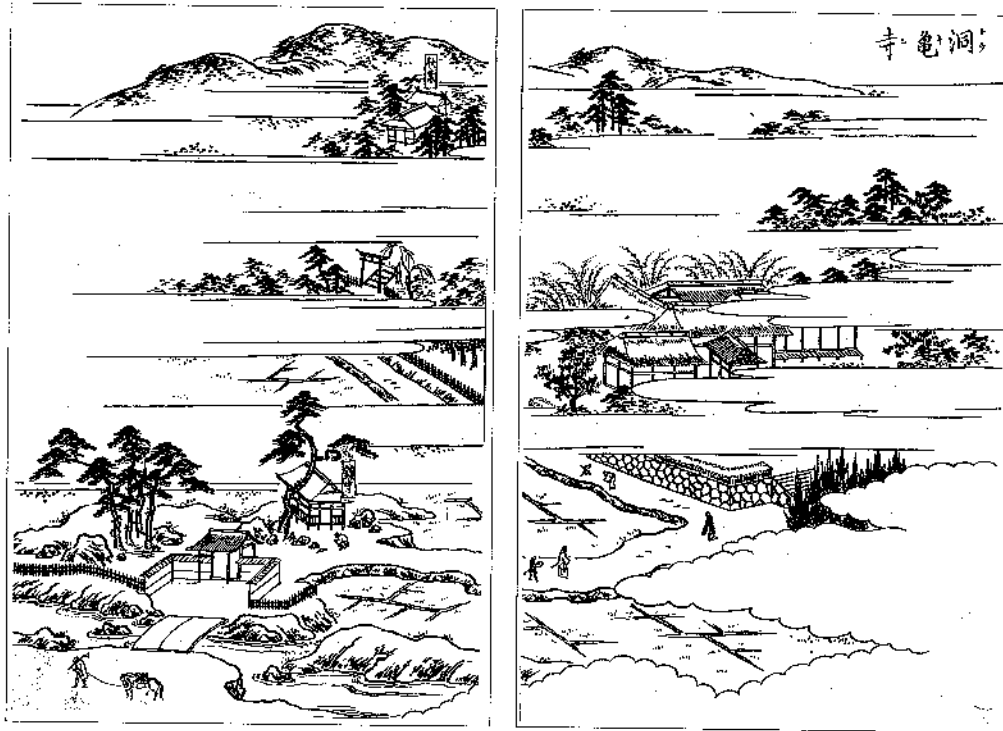
阿久根

開聞神社 山下村 山下村ハもと阿久根村なり、其余波留、西に目、大河なと里俗呼伝ふる所皆阿久根村也

鎮座、地頭仮屋 波留村にあり を距ること卯方凡壹里、

祭神一坐 額姓郡開聞神社に同し正祭二月三日十一月三日 勸請年月詳かなら

す、天智天皇の後下向の時本邑波留村 ハル の湊



に着船ありしといふ、其湊今ハ田地となり

て田中に船卸石フナアライシといふあり、田地ハ越江の

潮出入して湾曲の湊とみえたり、后湊に着

船ありしゆへ開聞宮を安置して一郷の総鎮

守となすか、社司鮫島氏

高峰山船若寺文殊院 コウホウサンハンニヤジ 山下村にあり、開聞神

社の南四町許りにありて真言宗出水幸善寺

の末なり、開山頼真法印 ライシン 本尊文殊菩薩 遷化年月未詳

坐像 開基年月伝ハらす

大島 阿久根邑の海中にあり、渚を距ること

凡一里、島の廻り壺里にして松樹多し、大

島の戌亥に一島あり桑島と名つく、桺榔繁

茂す、よて桺榔島ともいふ、子丑方の一島

を小島といふ、三弦の駒に似たるによて俗

に駒か島ともいへり、丑方に一島あり元の

島といふ、本邑の方に近きゆへ元の島とハ
名付るにや、邦君寛陽公の時大島に鹿を放
ち給ひ多く生育して今も其数百にをよへり、
天明四年甲辰正月前太守中将公金毘羅社を
造立し華表を建三月十日をもて祭日となす、
同七年丁未五月山王権現を島の西に遷し社
を造営す、島の風景尤奇観なり、能因歌枕
に薩摩の国名所母子島ハ、コシマと載せたるハこの島々
をいへるなるへし

厥時過阿久根而到桑島間探風景、則玉宇
輝々、与雲影而徘徊、更愛翠霞、竈万壑
炎日将西傾逍遙碧海天相接、心已悠然
于江畔矣、況復花氣冥々而満客船万般幽
趣經心是応吟處漫述四韵以酬佳景阿久根

左中将光久

清江似放小鰲舸、桑島磯頭凉氣沖、物外
心観由自得、時中意興有誰同、山華激灩
溶々月、水鏡澄澗淡淡風、樂事無端難尽
写、一篇聊述醉顔翁

櫓拍子も秋の調よ馴かしま

尾張

竹有

秋風や枯葉かさなるひろう島

出水

立蘇

大島や木毎に秋の夕日影

阿久根

扇巴

此島の海中に春ハ菊海苔夏ハ赤海松てふ海
草を産す、また匏を生す、四時これをとる、

島の風景尾州の俳者竹有大島行に見えたり

菊海苔や其の名も高き国の花

大坂

園女

赤みるの赤けれハこそ秋にあへ

竹有

鳴鹿の影さしにけり忘れ汝

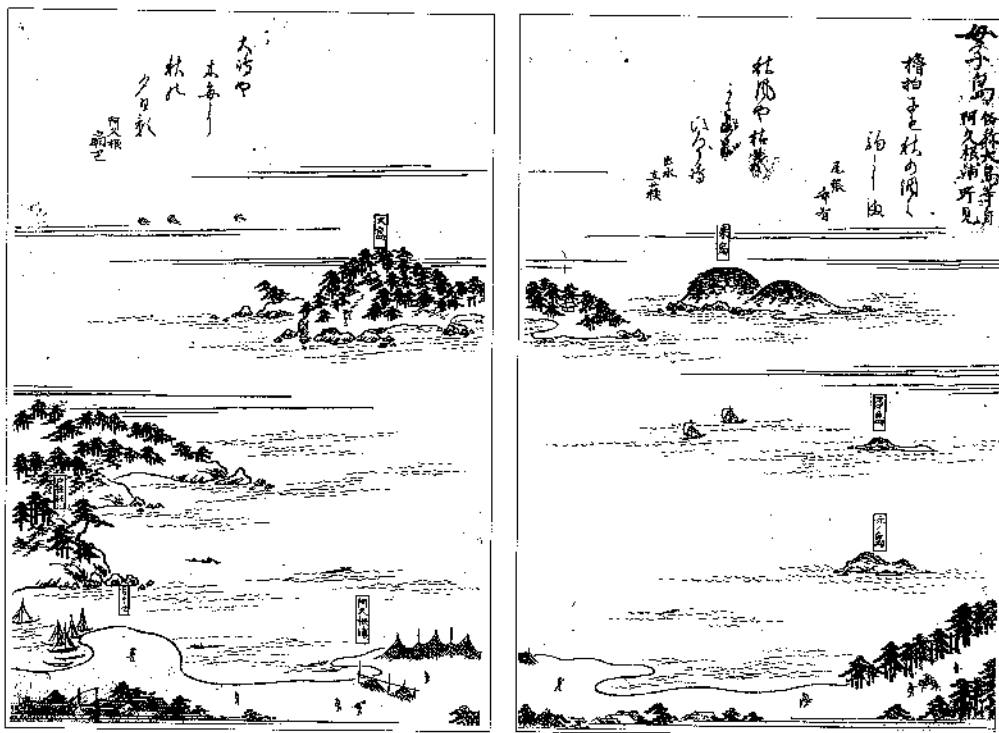
全

草の鹿鳴てハ草にもとるかな

阿久根

宇楽

なく鹿の角にゆふ口のかゝりけり阿久根 几翠



阿久根御仮殿にて歌読めとの仰ことを

蒙り 日高為一

もろこしの風をそのまゝ、まちとりて

月もすゝしくやとる真砂地

瑞香山蓮華寺 波留村にあり、地頭仮屋を距

ること辰方拾貳町余、臨濟宗伊集院広濟禪

寺の末にして開山高標和尚カウヘウ 俗姓阿久根氏応永五年戊寅五月十日遷化

尊正観音坐像長壹尺八寸定朝作 応永五年戊寅の歳創建す、

其後島津国久南溪和尚広濟寺開山南仲和尚弟子文 明四年壬辰四月廿八日遷化

を以て当寺中興の祖となして再興し菩提寺となす

高之口龍王岩 西目村にあり、地頭仮屋より

午方貳拾五町余街路の海濱なり、路の北側

に稲荷の社あり社の西相距ること壹町余路

の南側に周り数圀の奇しき岩あり、八大龍



王を崇め祭りて竜王岩と名つく、岩を去ること南数歩にして小島あり辨天島といふ、辨天祠を安す、又数歩を隔て水天島、愛染島などといへる小島連綿す、この所干潮にハ干潟となり満潮の時にハ潮のたゝへとなりて勝景なり、此辺りを高の口と唱ふ、民屋あり

遊行松 大河村路傍にあり、地頭飯屋を距ること午方式里拾八町許り、建治年中一遍上人廻国の時栽置れしゆへ遊行松といふといへり、いにしへの松ハ宝永正徳の際大風に倒れ今の松ハ其栽つきなるよしいひ伝ふ、周囲凡壹丈貳尺なり、

薩摩国にいり大河山に一遍上人植給ふ松を見て

遊行四十二世南門大僧正

薩摩かた大川山に植給ふ

まつこそ代々の道しるへなれ

薩州修行のみきり遊行松を見て

遊行四十四世他阿上人尊通



万代の後まで残れひろめゆく

法のしるしのまつも栄へて

ひろめゆく法のしるしの松もけふ

植し昔や思ひ出らん

筑紫行脚のころ薩州遊行松のもとにて

遊行

露時雨ふりにし跡にめぐり来て

まつになき世のむかしをそ問ふ

雪溪和尚墓 遊行松の申西方壺町許松林の中

にあり、雪溪ハ峰前山長寿寺

山下村に在り臨濟宗
野田感應寺末寺なり

十六世の住僧にして俗姓有馬氏阿久根邑の

産なり、人となり温厚にして勇義あり、薩

州家義虎雪溪を師とし遭遇浅からず長寿寺

に住職せしむ、其後義虎方と東郷洪谷方と

聊闘争の事ありて合戦に及び天文十六年よ

り弘治三年に至り十余年の間無益の人馬を

そこなひぬれハ和平ありてしかるへしと義

虎其あつかひの事を雪溪に命せらる、和尚

命をうけ給ハリこの戦かひ一朝一夕のこと

にあらされハ愚僧か和解いか、あるへきや

覚束なし、もし事ならすんハ再び還り候ま

し、敢て君命を辱かしめしとて義虎の前を

立けるか果して和儀ならす弘治三年丁巳十

一月七日雪溪此所に戦死すといふ

雪溪辞世

討人も討る、我も諸ともに如露亦電応、

作如是観

雪溪和尚の画像及び此戦場に同しく死亡せし数十人の姓名を録する戦亡版納めて長寿寺にあり

薩藩名勝志 卷之十

薩藩名勝志卷之十目錄

タキノコホリ
高城郡

ヒコシサンワウ
日吉山王

ジュガクジ
鷲岳寺

イチノセクハンオンキョウ
一之瀬觀音 鏡野

ヒラシマ
平島

ジソラウダイフノヤシロ
十郎大夫社

コテアラヒノヤシロ
小手洗神社

ジヤウキヤウジ
淨鏡寺

ニツタクウ
新田宮

ナカノミサ、キ
中之陵

シフインシヨク
執印職

ダイケンゲウ
大檢校

クハンシヨ、ケン
觀樹院

ゴマントコロバウ
御政所坊

タイヘイジン
泰平寺 省印法印墓

セウジヤウジ
照常寺

ワカミヤハチマン
若宮八幡

フナマシマ
船間島

リンカウジ
臨江寺

キョウトマリノツ
京泊津

カラノハ
唐濱

エノミサ、キ
可愛陵

ハシノミサ、キ
端之陵

ゴンシフケン
權執印

センギ
千儀

ケンゲフバウ
檢校坊

シヤウミヤシバウ
正宮司坊

ゴンミヤシバウ
權宮司坊

ガクトウバウ
學頭坊

エンリンバウ
円林坊

サイリキバウ
財力坊

ゴダイケン
五代院

ソウヂケン
總持院

コクブンジ
國分寺 大満宮

ミヤウケンノヤシロ
妙見神社

ヤカタカハル
屋形箇原

シンコウジ
信興寺

イチデウミヤウケンノヤシロ
一條妙見社

シシキシマノコホリ
甌島郡

サトムラノイリエ
里村入江

カメツルシヤウノアト
龜鶴城跡

シモミヤシバウ
下宮司坊

キヤウケンバウ
經官坊

ワクハウバウ
和光坊

ギョクセンバウ
玉泉坊

クホンジ
九品寺

オホアナムチノヤシロ
大己貴神社

クレハシ
九礼橋

タキョウヤウノアト
高城古城趾

ジヤウコウジ
淨興寺

ヒラマツ
平松

ニツタハチマンゲウ
新田八幡宮

オホイノミカドノハカ
大炊御門墓

西昌寺 サイシャウジ

詠之濱 ナガメノハマ

平村 タビラムラ 中飯村

八幡新田宮 ハチマンニツタグウ

常楽寺 ジャウラクジ

片野浦村 カタノウラムラ

八艘穴 ハツソウアナ

生霊穴 シヤウレイアナ

少将塚 セウシャウツカ

本福寺 ホンフクジ

甌島神社 ウシキシマノヤシロ

大性寺 ダイシャウジ

瀬尾飛泉 セビノタキ

瀬々之浦村 セ、ノウラムラ

大多羅姫祠 オホダラヒメノヤシロ

高城郡

水引 ミツヒキ

日吉山王

ゴダイムラ 五代村に鎮座地頭飯屋 同村にあり をさる

こと戌亥方拾町余、祭神前に同し 正祭十一月初申 天

文十五年丙午十一月二十八日高江士山内某

勸請したりといふ、水引の宗廟なり

医王山正智院泰平寺 イワサンシヤウチイン オホセウジムラ 大小路村にあり、地頭

飯屋の卯方式拾貳町余、当寺は人皇四拾三

代元明帝の御宇和銅元年戊申の歳天下泰平 ケンメイテイ

万民豊楽の為に勅願によって建立し帝一刀三

礼の薬師如来の像をもて本尊となす、所謂

日本三薬師其一也 叡山中堂、洛陽円幡堂、当寺の本尊を日本三薬師といふ、秘仏にして住僧といへとも

開帳して拝することなし、開山僧詳かならず、法相天台真言

律真言四宗兼学の梵刹にて大伽藍なり 其時の薬師堂

ハ八間四面と旧記に見へたり 其後六百三十拾余年を経て人皇九十

七代光明帝の御宇暦応二年己卯八月勅願と

なして六拾余州の寺社に一国一基の塔婆を

建給ふ 事は足利左兵衛督直義仏舎利奉納の状に見えたり 同年十月十一日塔婆

修造の院宣同十四日足利直義副書して住僧

行円上人に下し賜ふ、こゝにをいて翌年二

月五輪塔 惣高九尺五寸 を薬師堂の庭中に造立す、幾

星霜を経て応永廿五寺家既に荒廢して修造

の寺産なし、住僧教源上人跡を邦君節山公

に奉り勸化の事を許され万人の勸めもて本

堂を再興す 行円上人教源上人共に律宗の僧なり、世代未詳 其後数十年を経

て廢に及びしや看海法印 ユウカイ 享祿三年三月二十一日遷化 重興して

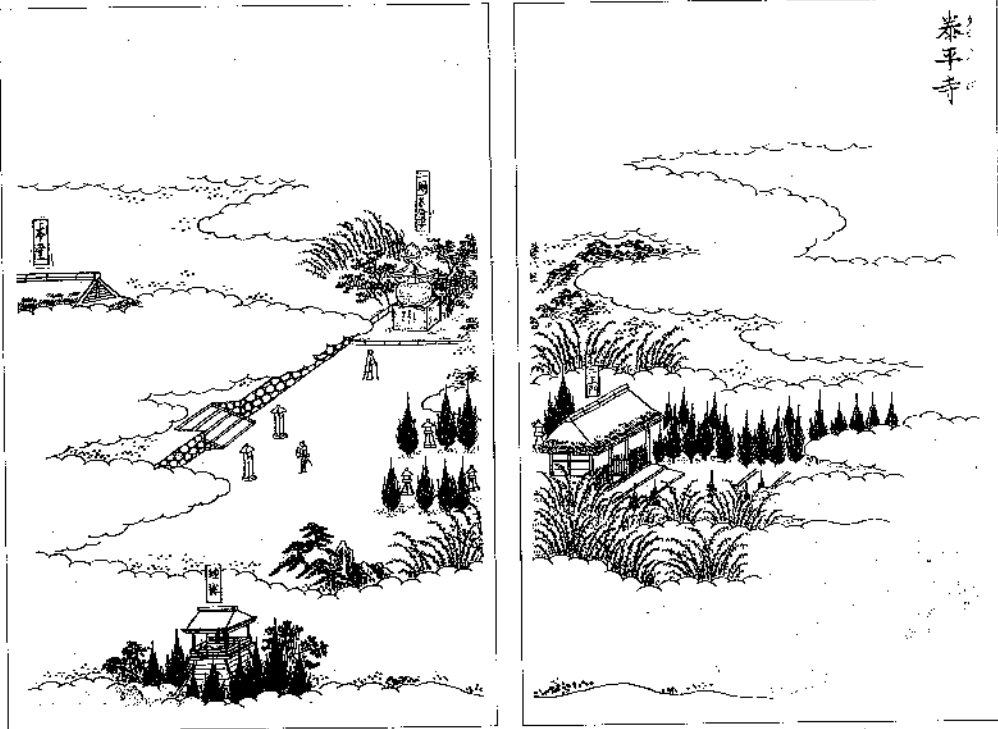
新義密宗の寺となる、今是を中興開山とす、

三世宥印上人の時天正十五年丁亥四月廿五

日豊臣殿下来り給ひて当寺をもて陣營とな

し 泰平寺四壁東北の境ひ大堀あり、其時の遺址なりといへり 薩摩郡平佐城を攻め

泰平寺



給ふ、時に五月八日邦君貫明公和睦し給ひ

当寺に出て殿下に謁す

客殿庭中其遺址あり石ををく、傍に公鎗掛の松とて古松ありしに安

永中其松ハ枯て住僧文雅植繼して古事を伝ふといへり即口殿下泰平寺を發し親白

平佐城に入墻壁の固めを見給ひ山崎宮之城

を過往て曾木天堂箇尾に陣す、尔来邦君許

多の田を当寺に寄捨し本堂廢すれば領内の

奉加をゆるし或ハ府庫の財を出して屢再興

ありしに寛政七年乙卯四月廿四日の曉本堂

に失火して寺屋災に及へり、時の住僧定政

本尊藥師如来の厨子を打破り尊像を守奉り

文書箱を携て難を寺の後に避く、東風甚た

強く鎮防の術を失ひ其余の仏像及ひ什物こ

とことく灰燼となる、呼乎惜むへし哀むへ

し、直義寄進し給ふ舍利塔も煙の中に失ふ

といふ

仏舍利ハ其後灰中に得て寺に納む、今光り出現して故の如し、靈異の事といへり、伝教大師自作の大黒天を当寺に安置す世俗

塩大黒といふ火災を逃れて今に現在
す、立像長壹尺壹寸惣長壹尺五寸

るものハ一國一基の塔婆なり、其銘曰、奉

造立五輪塔一基、右志趣者為法界衆生殊一

結講衆等菩提記也、仍所修如件、曆応三年

二月時正、勸進沙弥成道、大檀那善行、院

宣云、薩摩國泰平寺塔婆事為 勅願之義、

遂修造之功可奉祈天下泰平、者、 院宜如

此、仍執達如件、曆応二年十月十一日按察

使維願行円上人御房追申寺領興行事、任代々

奉寄候、可有沙汰甲乙人押領之所々已下、

事相尋在廳官人等、委可注進由同被 仰下

也、直義副書云、薩摩國泰平寺塔婆事、院

宣如此、為六十六基之隨一、寄料所可造立、

可被存其旨之狀如件、曆応二年十月十四日

左兵衛督泰平寺長老此外文書數通火災をま

ぬかれ今に至りて寺に蔵む事ハ寛正四年六
月十九日住僧ケウケン教源著ハす所の縁記に委し、

故にこ、にもらしぬ

有印法印墓 泰平寺中興開山海カイノウ有法印三世の

住僧にして俗姓永田氏水引邑の人なり、生

質穎敏剛毅儒学を好む、天正十五年四月豊

臣殿下拾数万の勢を率ひ来りて村落を放火

し人民を屠殺す勢ひ破竹のことし、泰平寺

をもて陣營とせんことを欲し使して有印に

いはしめて曰、早々に寺を立退へし、若遲

疑に及は、殃ハひ身に及ハんと、有印答て

曰、愚僧は当寺の住職にて侍れハ寺と存亡

を共にすへし、一足も立退候ハんこと存も

寄すとして眼色自若たり、殿下その義を感じ

再ひ人を遣し礼を厚し辞を卑くして曰、我

が大軍遠境に押来りて陣營とすへきの地なし貴寺境内広大にして軍衆を容るに足れり、願くハ暫く寺を立退き我にかし候へよとの御諛なり一説に殿下直の御諛ありしといふ宥印答て曰、謹て尊命をうけ給ハる、しかれとも出家なれハとて兵戈を恐れ出寺せしなと後代の嘲哂もいかなれハ立退て居へき所を御下知給ハるへし、しからハ尊命に任せ奉らんといいひしかハ、実に尤也とて中郷チウガウの宅満寺タクマンジに宥印を移し仮に宿せしむ、こゝにをいて宥印朝ことに泰平寺に來り本尊の前に勤行すること怠たらず、諸軍勢の中を往来するに従容として恐るゝ色なし、殿下も比類なき僧なりと感賞し給ひ和儀なりて後、何にても所望あるへし望ミに任せつかハさむとの給ひけれハ宥

印答て曰、国破れ主辱かしめられ諸將城を下る、その国の祿を食ミながら愚僧独り何の望むことあらむやと固く辞して受す、殿下歎称斜めならず諸軍感せざるものなしといふ

靈光山レイクハウサン驚岳寺 五代村にあり、地頭飯屋の戌

亥方拾町余、曹洞宗石屋派高城信興寺の末にして開山鑑嶺玄珠和尚カンレイゲンシュ信興寺二世遷化年月伝ハらず本尊觀音

座像開基年月詳ならず

佐目野山サメノサンキトクセン威徳院照常寺 五代村にあり、地頭

飯屋の子方三拾壹町余真言宗大乘院の末に

して開山僧及び開基年月詳かならず、本尊

不動明王座像日秀上人作、初め本尊不動明王ハ行基菩薩の作なりしを享保中鹿見島大藏龍洞院の本尊となし其代となして安置する所

なり中興の僧を快慶法印クハイクエイと云境内に熊野三

所権現を安置す

一之瀬観音 「千」脱カ 五代村小倉に安置す、台の川岸

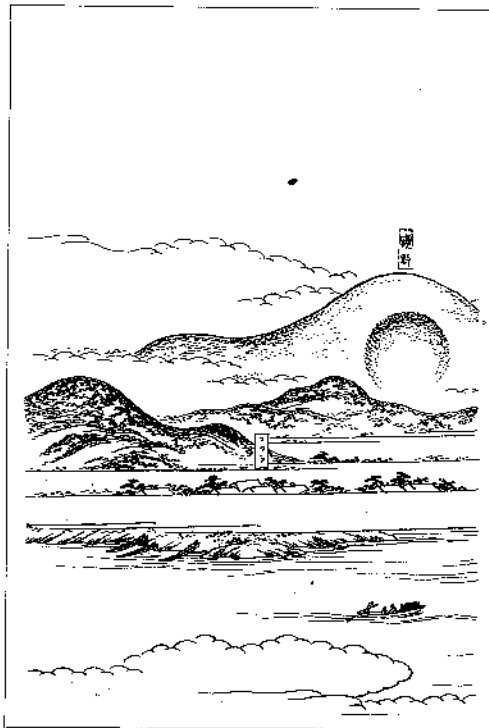
なり、地頭飯屋より酉戌方拾九町許り勧請
年暦伝ハらす、観音堂左方に坊地バウチといふ所
ありいにしへ坊舎のありし遺跡にや今に古
墳おほし、流れに従ひ小倉の人家あり、ま
た遙に鏡野あり川船にして眺望するに佳景
なり、鏡野は神代八咫の鏡影向の跡なりと
いひ伝ふ野岡にして四季青草円鏡の如く五
畦はかり生したり、霜雪の為に枯るゝこと
なし、村民異事といふ

鏡野叢

釈不石

平野周遭似鏡円、春風春雨草綿々、都人
放火無煙起、拍手同歌大有年

若宮八幡 草道村に鎮座、地頭飯屋をさるこ



一之瀬
観音堂

と亥方壺里式拾四町余、祭神三座隅州蒲生八幡宮に同じ祭一月初卯 勸請年月詳かならず、別当寺を八幡山

宝幢院若宮寺といふ大乘院の末にして中興

開山頼有法印といふ、本尊薬師如来立像長三尺寸定朝作

平島 草道村の川端なり、地頭飯屋より西方

壺里拾八町、寛陽公船間嶋の偶舎をこ、

に移して釣魚し給ひし遺趾なり、川末に

諏方社を安す、大河渺々として水勢静に

流れ湖の如く春日夏夜小船に棹し遊観す

るもの多し

詩集

過釣鰲台

山田君豹

春風遥駐木蘭舟、簫鼓幾廻此勝遊、為

問釣鰲台畔水、潺湲何似旧時流

下千台川

全

隔岸青山近、沿流緑樹浮、一曲棹歌発、

平島諏訪蹟



十里下河津

度千台川

全

長江望斷暮雲愁、兩岸春風送客舟、一
片雄心猶未已、酣歌擊楫度中流

船間島 千台川の末流川口にある嶋にして網
津村に属す、地頭飯屋の戌亥方式里余、嶋
廻凡壹里岩石多く草木茂り人家おほし、初
め箱崎といひしを承応元年邦君寛陽公京泊
の飯亭を此島に移さるに及ひて明年四月名
を船津嶋と改め其後また今の名に改め給ふ
といへり

十郎太夫社

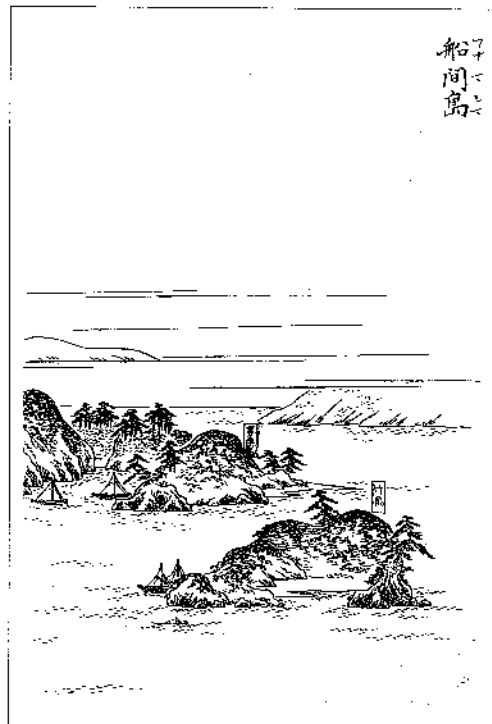
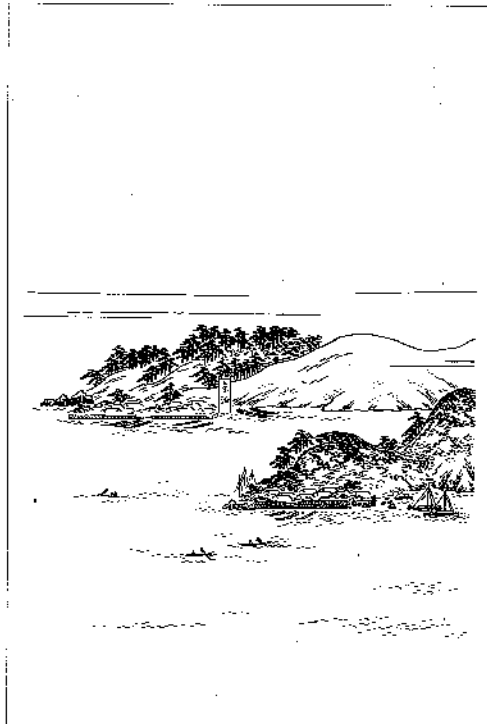
船間嶋に鎮座、祭神一座

海神宮正祭
十一月十日

本地十
面観音

新田宮の末社にて上古の勧請と見へ

たり、船玉神とて新たに船を卸し浮ふる時
ハ必らず神樂を奏す、また邦君久見崎津よグミサキノツ



船間島

り出帆し給ふにハ神樂を奉る故事あり是を
日和神樂といふ、社前に弓場を築きて正月
七日日数の矢数を張行し正五九月大般若經
を転読す、皆海上安全を禱る旧例とかや事
ハ寺田某か旧記に委し

天徳山臨江寺 船間嶋にあり、地頭飯屋の戌

亥方式里余、臨濟宗伊集院広濟寺の末にし
て開基年月詳かならず、開山玉田琢和尚大正

二年癸丑六月三日遷化 本尊藥師如来麻像 初め京泊砂嶽キヤウトマリスナダケにあり

しに寺地白砂の為に廢したり、寺田某船間
嶋に転宅するに及ひてこゝに移して再興し

菩提寺となす

小手洗大明神 網津村に鎮座、地頭飯屋より

戌亥方凡式里拾六町余、祭神ユカイモンノヤシロ穎娃開聞神社

に同し正祭九月九日勸請年曆詳かならず、いにしへ

七月七日開聞宮こゝに船上りして御手洗ひ
し所なりといひ伝ふ、社の前に川あり網津
川といふ、四季清めることなし、別当寺を
開花山淨音院神護寺カイクハサンシャウオンシンゴジといふ真言宗大乘院の
末にして開山僧及び開基年月伝ハらず、成セイ
瑜ユ法印以来住僧の名を伝る而已

京泊津 網津村にして千台川の末なり、地頭

飯屋より酉戌方式里拾五町余、近くハ高江

久見崎のなかめありて甌嶋を遠見し佳景と

いふ、邦君述職の為に東武に朝す此所開帆

の津なるゆへに飯屋を建給ひしとなり、其

後白砂吹上の為に難ありて承応二年寛陽公クハシヤウコウ

飯屋を船間島に転移すといふ、人家多し

法器山淨鏡寺ホツキサン 京泊にあり、地頭飯屋の酉戌

方式里拾五町、浄土宗鎮西派不断光院末に

して開山運譽上人肥前国高木の
人俗姓本多 本尊阿弥陀如来、

観音、勢至共に立像辨仏聖徳
太子の作といひ伝ふ 慶長二年二月寺を

草創す一説元和九年建立
といふ、誤りなり

唐濱 網津村にあり、地頭飯屋の酉戌方凡三

里半許、高城西方浦より眺望するに佳景な

り、誹諧名所小鏡に載たり

小鏡く、り得て拾ふ貝みな名もしらす

伊勢 春渚

同 我跡を荒浪く、る音寒し

筑後 君山

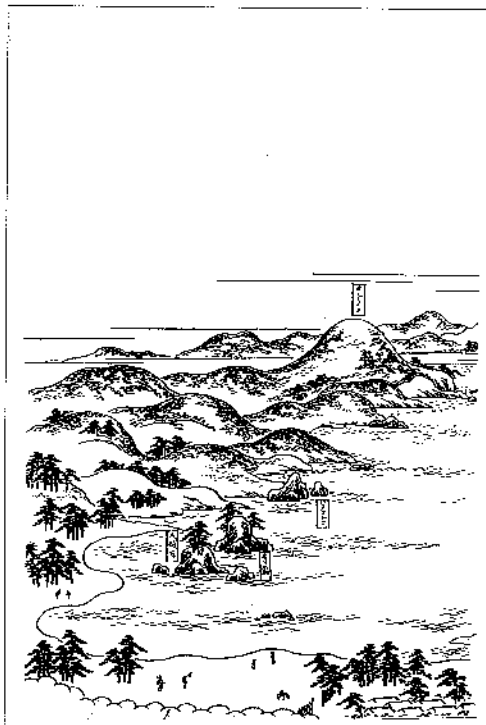
八幡新田宮 ミヤウナムラ 宮内村に鎮座 宮内村ハ薩摩郡に属す水引
ハ薩摩高城両属の地なり 地

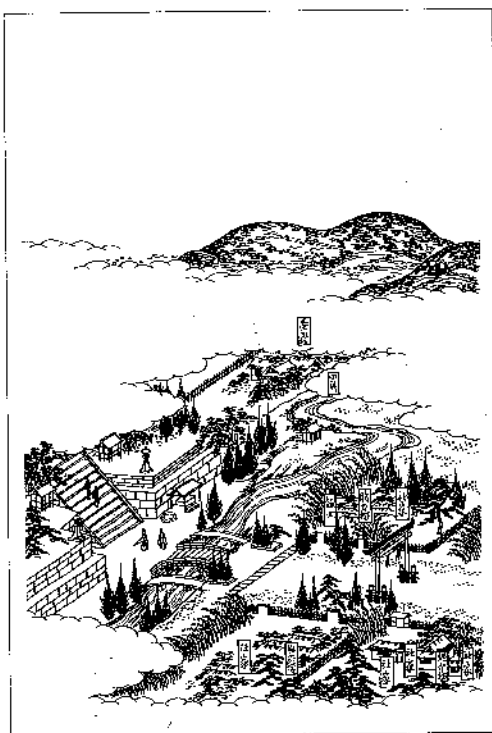
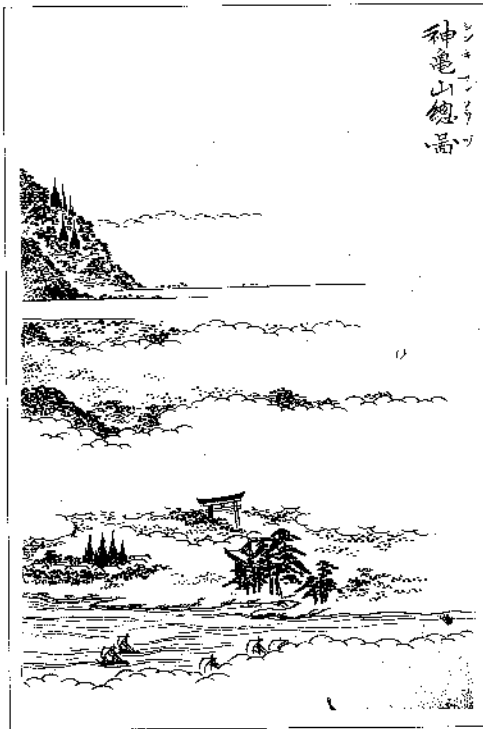
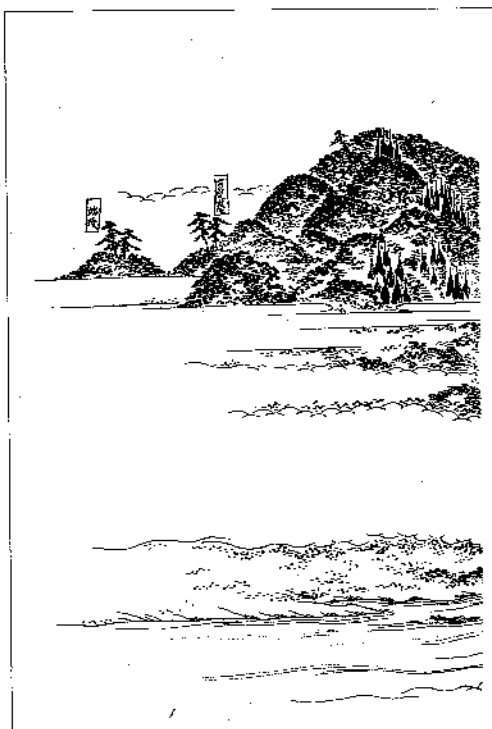
頭飯屋の寅方拾貳町余、祭神三座 中尊天津彦々火
瓊瓊杵尊、左天

照太神、右櫛幡千千姫又云、大忍穂耳尊、年中祭式拾
六度、六月廿九日夏越祭といふ、九月十四日同上五日 当山ハ皇孫

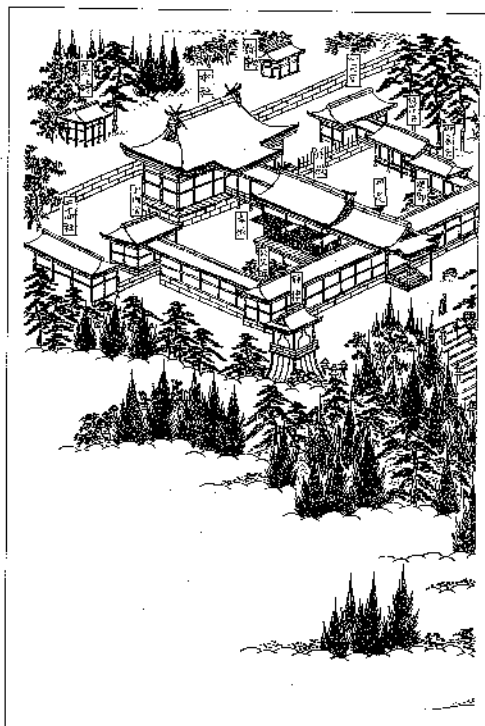
瓊瓊杵尊日向高千穂峰に天降りましてより

此所垂跡鎮座の靈地にして神龜山シンキサンといふの山





其二



象龜に似たるによりて名つくといふ、皇孫爰にいまして高く皇城を築
き千の台の營ミありけるより、今に千台高城などの名残れりとぞ 初

め神社山の半腹にありしに承安三年炎上し

て後山の頂に遷すと旧記に見へたり、八幡

五所別宮の一員なり

当社に八幡の号あることハ皇孫此界に
降臨の時天照太神八咫鏡をもて皇孫に

与え説して曰、汝此鏡を視ること猶吾を視るかことく常に身辺を去す慎ミ
戒しむへしと云々、是によて八咫の八字を神母緒幡千千姫の幡字をとりて

八幡と尊号し奉るとぞ、今又
必神大皇を公祭せりといふ、二王門千台川の北岸に枕

ミ内に一の鳥居あり、数町にして二の鳥居

あり、此間平地の芝原なり蘭桂と呼ふ、二

の鳥居を過数十間にして潮井川橋あり

降来橋といふ、始めて石階の下に至る両随

神豊盤間命
櫛盤間命社あり、階をのほること数十にし

て又平地あり上古宮床の遺跡なり、今に其

礎石を存して標とす、弓手の方に高良

天鈿女命ミヤコメノメノミコト 中王ミナモトノミコ 早風ハヤカゼの三社あり、

馬手の方に御供所籠所なとあり、又数十の

階を登りて本社之地に至る、神殿廊廡魏々

然として末社の諸堂薨をならへたり、

四所宮 シシヨノミヤ 本社之東にあり祭神彦火々出見尊
豊玉姫、鸕鷀草葺不合尊、玉依姫 タケウチノミヤ 本社之西

十四社 武内社の西にあり、瓊々 荒神社 本社之北 弥勒堂 本社にあり

彼岸所 本社之東にあり、本尊不動明王を安す、往古新田宮の東にあり 末社船頭神の本地にして京泊津口石上に安置ありし

に波瀾のために破らる、ことを愛ひて此所に遷せりといふ、因て今に波切不動明王と唱ふ、其餘拝殿鐘樓四

足等に至りて図するところのことし

可愛陵 社殿の酉戌方式拾壹町余に森々たる

山あり可愛山といふ エノヤマ 山中に小社を安 今五代村の内なり

す、瓊々杵尊の霊体を葬め奉りし所也、社

の前に池あり御手洗の池と呼ひ伝ふ、此所

神代三陵の一なり、三陵ハ可愛山陵 日本紀神代

彦彦火、瓊々杵尊崩、因葬筑紫日向可愛山陵、
可愛此云埃とあり、延喜式日向国埃山陵とあり タカヤマノウヘミサキ 高屋山上陵

神代卷云彦火々出見尊崩、葬日向高屋 アヒラヤマ 吾平山上陵 神代卷云、彦波

山上陵、延喜式に載るところまた同じ 激武鸕鷀草葺不合尊崩於西州之宮、因葬日向吾平山上陵 といへり、延喜式にいふところ又同じ この三陵ミな我藩

のあるところにして神代卷に三陵ともに日

向国と記せり、往古ハ薩摩大隅も日向の国

にして薩摩は文武帝大宝二年に戸を校り吏

を置初めて一国とはなりしと見えたり

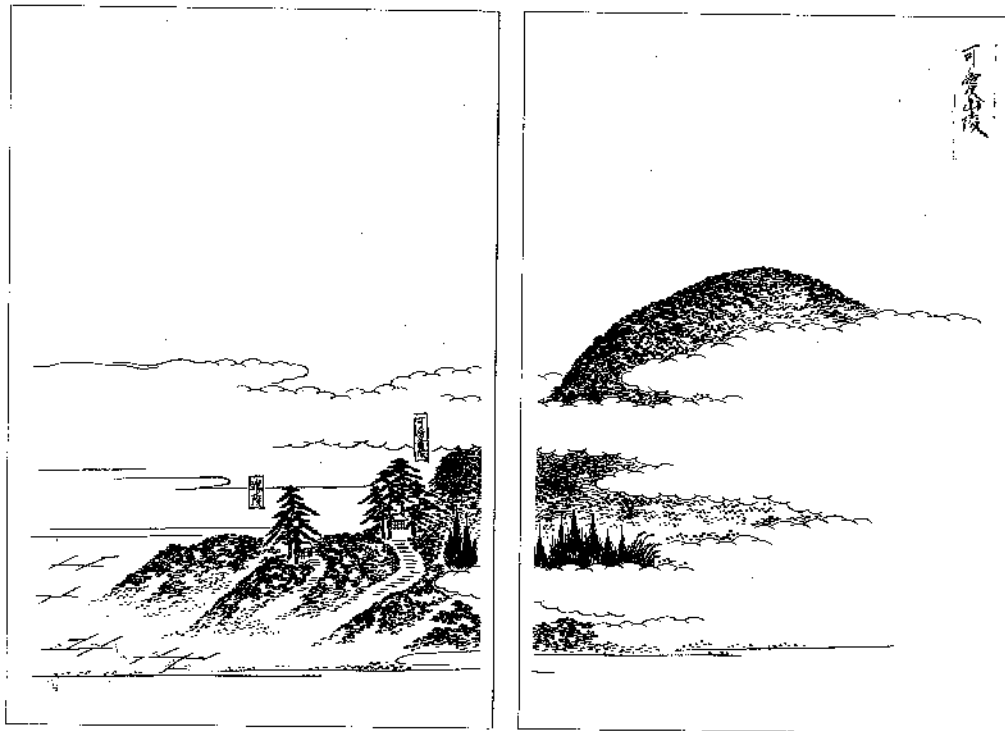
統日本紀に見ゆ 大隅ハ和銅六年に日向国四郡を割て

大隅国を置れしと見へたり、されハ神代卷

に三陵ミな日向国と記したるなり、今三陵

川合陵





薩隅の地にあり 可愛山陵薩摩州也、高屋山陵
昔平山陵ともに大隅州なり

中之陵 本社 of 戌亥方三町貳拾間許山中にあり、小社を安す天照大神御廟なり

端之陵 本社 of 戌亥方三町余中之陵の西にあり、天忍穗耳尊の御廟なり、小社を安す、其側に自然の大石を置瑞籬もて是を囲ひ陵の標とす、神代より崇め祭しや深々たる山中実には神陵とも謂つへし

「職」脱力

執印 一の鳥居内東傍にあり新田宮神官の頭なり、八幡宮の印を司とる、因て執印をもて氏とす、惟宗姓にして康友以来代々執印職を勤む、今執印丹下といふ、権執印一の鳥居の西の傍にあり川幡氏はを勤む、今順貞といふ、紀姓にして石清水別当の裔なり、系図を按するに信経といふもの新田宮

五大政所同宮座主職となり其子^{ノブアキラ}信章新田宮
廳頭執印と号すと見へたり、代々當宮の權
執印職にしていにしへハ宮里村を領せしと
いひ伝ふ

大檢校 鳥居内東側にあり權執印と同じく剃
髮にして妻帶なり、社務權執印に次て神供
饗膳殿上檢校の事を司とり法衣白袴を着す
千儀 社務大檢校に同じ、容儀執職また異な
ることなし、鳥居内西側にあり 權執印大
檢校千儀是を新田宮の妻帶三家と唱ふ

神龜山十二坊

觀樹院 一の鳥居内東側にあり、新田宮の別
當寺にして内陣の事を司とる、往古天台宗
妻帶の座主職なりしに寛永十九年故ありて
清僧住職となし真言宗大乘院の末寺となす、

開山全有法印本尊釈迦如来、寺山に大なる
楠二本あり、いにしへ六月廿九日夏越祭に
濱殿下りありし時神輿を休め給ふ所なりと
いひ伝ふ、是より以下拾壹坊皆大乘院の末
寺なり

善聚院^{ゼンシュイン}檢校坊 本尊不動明王、社務神供饗膳
手長等の役を勤む

遍明院^{ヘンミョウイン}御政所坊 本尊不動明王、社務檢校坊
に同じ

保寿院^{ホウジュキン}正宮司坊 本尊阿弥陀如来、社務御
鑰役にして御戸開き神供饗膳等の事を司り

邦君参詣し給ふ時に幣白を上まつる

医王院^{イワウイン}權宮司坊 本尊藥師如来、社務前に同
し

宝蔵院^{ホウザウキン}下宮司坊 本尊阿弥陀如来、社務前に

同し

以上六坊二王門内左右にありて内陣の事を

司とり宮司職と呼ぶ

蓮台院レンタイセン学頭坊 本尊薬師如来、宮内の祈願所

にして日本廻国納経等の事を司とる

円満院エンマンセン経官坊 本尊正観音、社務彼岸所にて

朝夕勤行の職なり、彼岸所ハ本尊波切不動ナミキリ

明王なり

文殊院モンジュセン円林坊 本尊不動明王、社務前に同し

福昌院フクシャウイン和光坊 本尊阿弥陀如来、社務前に同

し

理趣院リシュケン財力坊 本尊正観音、社務前に同し

蓮池院レンチセン玉泉坊 本尊文殊菩薩、社務前に同し

以上六坊二王門内左右にありて外陣の事を

司とり供雑組と呼ぶ

神宮寺ジングウジ五代院 五代村にあり、上古新田宮院

主職にして大地なりしに今廢に及ひて寺地

に本尊五大明王を安置す、例祭正月三日権

執印及び社家衆僧聚りてこれを祭る、牛王

を製す世に五大の守といふハ是なり

菩提院ボダイセン九品寺 二王門の内により、大乘院の

末寺社家中の菩提寺なり、和銅年中の開基

にして本尊阿弥陀如来、四月八日より法華

を誦誦し七月十日衆僧を集めて不斷経を誦

誦す

澤陀山タクダサン總持院 宮内村にあり、新田宮二王門

の西大巳貴神社の東数町の間なり、臨濟宗

日州志布志大慈寺の末にして開山秀峯和尚シウホウ

本尊阿弥陀如来、開基年月詳かならず、権

執印先祖川幡正満カハハタマサミツ建立せりといふ

大己貴神社 宮内村に鎮座新田宮一之華表の

西方四町余、すへり川の辺なり、祭神一座

大己貴命 伝へ称す天孫瓊々杵尊日向高千穗峯に

あまくたりしてのち、川むかへ今の宮里村

におハして大己貴命に命し宮地神亀山の境

地を見せしめ給ひしに清浄の地なるゆへ自

からこゝに住居してかへり告給ハす、天孫

おそきをうたかひゆいて見給ふ、命おのれ

か住居の地となしすミ居たり、天孫大ひに

之をしかり給ふ、命首を伏して後さまにす

へりこゝに止まりしとなり故をもて命をこゝ

に勧請し、川をすへり川と名付たりといひ

伝ふ、すへり川ハ新田宮降来橋潮井川の末

なり、村民当社をさしてすべりの宮といふ

コクサンキトクキ 護国山威徳院国分寺 大小路村にあり、地頭

飯屋の丑寅方三拾町余人皇四拾五代聖武天

皇の御宇天平九年丁丑の歳天下泰平の勅願

によて行基ギョウキ僧正をして六十余州にをのゝ

堂塔伽藍を建立して国分寺と号し行基自作

の丈六の聖観音を大講堂に安置す開州四分寺八天平十一年開基と

云、再考すへし 其後武百式拾余年を経て六拾二代村

上天皇の時応和三年癸亥の歳勅願によて天

満宮をこゝに勧請す、祭神一座年中祭八度正祭八月廿五日 此

時にあたりて堂社寺宇を再建して大伽藍の

道場となし給ふ或記に云、筑前州宰府天神の別宮なりと云々 爾来天下泰平

異賊降伏の御祈祷をなし代々宣旨院宣を下

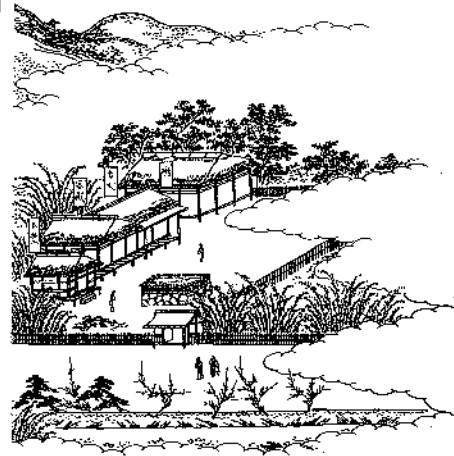
し給ふて天満宮国分寺造営修復の沙汰あり

おほくの神領を寄附せらる、建久八年薩摩

国図田帳を按するに国分寺百四町五段、天

満宮七町五畦と見へたり、天正中豊臣殿下

国分寺
天満宮



泰平寺に陣し村落を放火せしにより当寺及
 ひ天満宮ことく焼亡し、つゐに廢に及
 ひたり、しかるを寛文九年己酉六月廿三日
 邦君寛陽公僧実秀法印（泰平寺住持）に命じて国分寺
 を再建し真言宗大乘院の末寺となす、本尊
 薬師如来（坐像）を安置し日本廻国納経所に定め
 らる、いにしへ三拾三間の金堂ありしとて
 其遺址礎石今尚存せり、又境内に破瓦おほ
 し、瓦隠に布目及び網形などありて尤古製
 のものと見へたり（中郷村鶴峯といふ所に上古瓦を製したる跡あり） 側に式間
 四面の茅屋あり、いま大堂と呼ふ大なる古
 仏式軀を安す、一は観音一は釈迦の像なら
 んと見ゆ、今按するに観音は行基自作の像
 にして上古大講堂に安する所ならん、釈迦
 の像ハ金堂に安する所なるか天正中の兵火

に記録を失し詳かならされハ又考ふる所なし、旧記を按するに往古新田宮の留守職国ツク分左衛門尉友成此地を領し天満宮をもて鎮守神となし崇め祭る日本三天神の一なりと見へたり

九礼橋 大小路村の田間にある土橋なり、地頭飯屋より寅方凡拾八町許り、川ハ薩摩郡中郷ナカガウより出て新田宮の潮井川に流る、そのかミ松齡公他州に出陣し給ふの時此橋にをひて八幡新田宮及び国分寺天満宮泰平寺薬師この三靈に三拝つゝの拝礼をなし給ひしとなり、故に九礼橋とハ名付しといひ伝ふ

高城

妙見神社

麓村に下之村を今俗に麓村と呼ぶ鎮座、地頭飯屋同村にあ

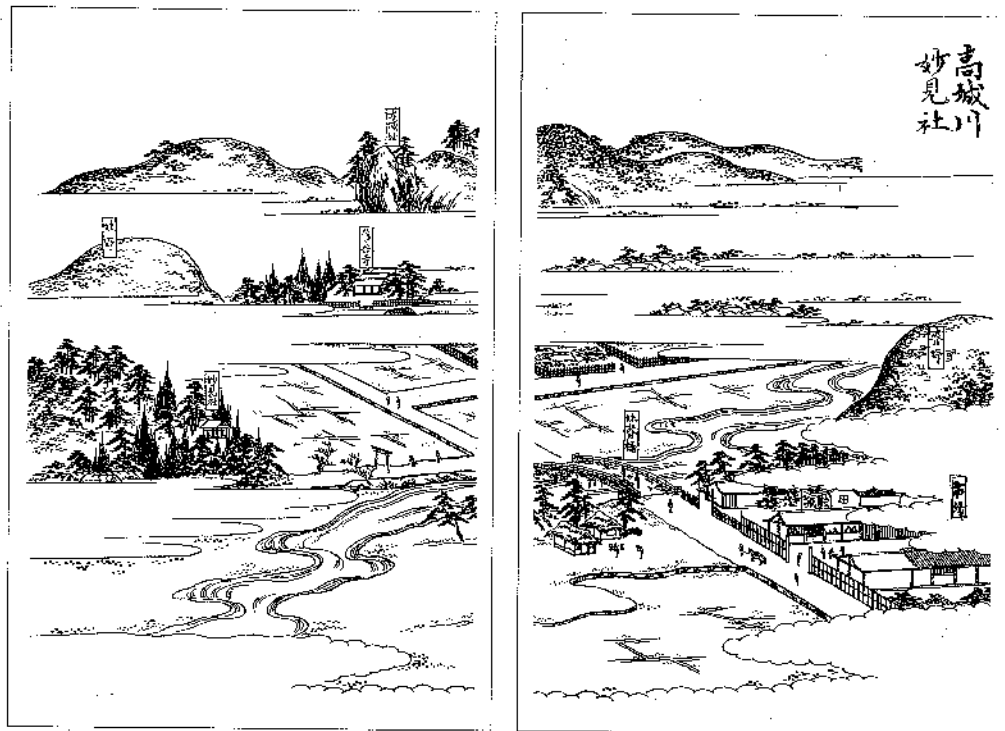
をさること未方五町許り、祭神一座北斗星正祭九月廿

九勸請年月詳かならず社司有馬某伝へいふ、往昔坂河三郎といひし人の北斗星を崇め祭るといへり、星を高城タキユウ邑の宗廟となす

高城古城址 麓村にあり地頭飯屋此ところな

り、往古渋谷太郎光重の男第六男なりといふ落合六郎

重貞高城を領してここに居住し高城氏名乗れりといふ、此城東南にハ高城川流れ廻りて北の方にハ数町に餘れる深田あり、塹星の跡なを残りて今ハ畠地となれり、又城墟の戌亥方拾余町にして内之城染之城などいへる古塁の跡あり、誰某の住居せしこと詳かならず、按するに高城の領主全盛のむかし親族従類おのゝく居住して本城援けし所ならむ、今考へからず、又城墟の西方に続きて岡あり妹野イモノといふ、また辰巳方川を隔



て、背野セノといふ岡あり、是亦城のつゝきに
 して最とも高き野岡なり、皆陣所の跡と見
 へたり、是を合せて妹背野イモセノと呼ふ、よりて
 城をも妹背の城と呼ひ伝へしといふ、又高
 城川の流れ往還の街に土橋を架して往来を
 通す妹背橋とよひ伝ふ、妹背の名由て来る
 ところを詳かにせず、今俗誤りて芋瀬の字
 を用ふ

屋形ヶ原 麓村にあり地頭飯屋の午方凡弍拾
 町許り水引大小路村風口カサクチに隣りす、上古薩
 摩の国府なりしにや、国司の住居の地なら
 む、今小高き所四方切岸にして広々たる平
 地なり、聖武帝の時国分寺を建村上帝の時
 天満宮を安置し給ふ、皆国府の證とする所
 なり

桃花山多樂院淨興寺 トウクハサンタラクキン 麓村にあり地頭飯屋の

丑方四町余、真言宗大乘院の末にして開山

尊慶上人 ソンケイ 遷化年月詳かならず 本尊軍荼利明王 六像 初め建長

中開基にて桃花山の半腹にありしに天正十

五年兵火の為に焼亡し廢に及ひたりしを隆

鏝法印 正保四年七月八日遷化 今の地に再興したりといふ、

桃花山ハ客殿の寅卯方川越にある高山なり、

開山塔今に其旧址にあり

郡玉山西来院信興寺 グンギョクサンサイライキン 麓村にあり地頭飯屋の

申西方三町許り、曹洞宗大隅帖佐総禅寺の

末にして開基年月詳かならず、本尊十一面

観音 長七尺五寸 余、遷慶作 開山玄室玖和尚 ゲンシツキウ 福呂寺大祐和尚の法嗣 遷化年月伝ハらず 初め

高城城主高城氏の菩提寺にて七堂伽藍なり

しに天正中豊臣殿下下向し給ひし後高城の

地天領となりてつゐに寺廢に及へり、然る

に邦君松齡公朝鮮の軍功によって出水高城其

外地を加へ領し給ふ、こゝにをいて総禅寺

住僧鑑嶺元珠和尚 カンレイゲンシユ 遷化年月伝ハらず に命して当寺を再

建し福昌寺心岩良信和尚をして勸請開山と

なし鑑嶺二世の往持となり大中公松齡公の

牌を安置して本邑の菩提寺となす、本尊大

悲の像ハ希代の靈仏にしてむかし高城備前

守の息女盲目あり、祈誓を掛けて百夜丑時参

拝し禱りしに結願の暁仏殿震動して天に響

き大悲の左の玉眼ほとはしり泣血七日にし

て止む、息女忽ち左眼明になりしとぞ、其

後仏工に請て玉眼を改め彩飾をかへしにま

た涙流れて玉眼曇りぬ、今に至りて其跡顕

然たり、郷里驚信し人皆奇異の思ひをなし

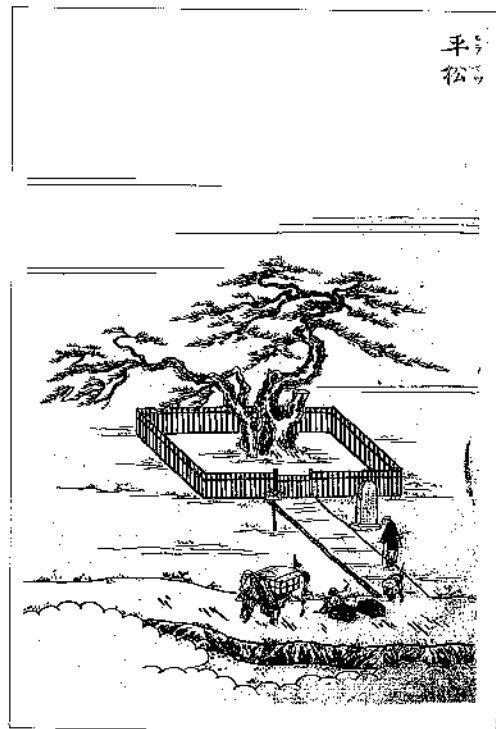
て毎月廿日参礼おほし

平松 麓村にあり往還の東傍畠中なり、地頭
飯屋午方拾四町、廻り壺丈六尺許り数千の
枝ある古松にして村民名つけて平松といふ、
何れの世に生せしや由来伝はらず、寛政十
一年己未の春地虫の為に枯木となりぬ

古松銘

薩摩州高城邑道傍有大松、爪葉鱗條鬱茂
可觀、土人号称平松、蓋以其偃蓋如薺名
之云、而往来之人或有斫之、以為明者好
事者愛惜之、告諸邑長乃命里民繚以藩籬、
因復謁余書銘於石、干時寛政甲寅歲十月
也、銘曰鬱々松樹生於道邊、繁陰覆地偃
蓋參天鸞鶴斯巢行旅爰憩、建碑刻辭勿剪
勿敗

本府山本正誼子和甫撰



一條妙見社 麦之浦村に鎮座、地頭飯屋より
戊方壺里貳拾八町はかり、往還の南側に社
殿あり、是より西方浦に至る街道坂路難所
なり、里俗一條殿の坂と呼ふ、伝へ称すい
にしへ新田宮祭祀の時勅使下向ありしに路
次にて聊かいたハリの事ありけるか常き風
にさそはれつゝに此所にしてみまかり給ひ

ぬ、一條家の人なりけるとて姓名詳かならず土俗一

條院と呼び伝へこゝに勧請せしとぞ、初め

中央嶽の半腹に勧請ありしを中古今の地に

遷し祭るといへり、年月伝はらず、中央嶽

ハ神社の卯方にあり神社の旧址今に存せり

甌島郡 薩摩の西にある嶋にして日置郡市来

湊を相距ること海上拾三里、南北に流

て二の島なり、北なるを上甌といひ南

にあるを下甌といふ、上甌の周廻拾四

里三町、下甌の周廻拾貳里貳拾町、上

甌下甌相距ること海上壹里、伊牟田の

迫門という潮汐甚たはやく潮時をもて

通船す、甌島と名付しこと由縁詳かな

らず、上甌に串瀬戸とて東西に潮の通

ふ切門あり、其中に甌形の大岩あり島

民これを甌島大明神と称し毎歳九月九

日をもて神供を備へ彼岩を祭る、よて

島の名となるともいへり、続日本紀宝

龜九年十一月の記に甌島郡見えたり、

フビシ武備志日本西海道地図に天堂といへる

島あり、其方向今の甌島にあたる、唐

山にては甌島を天堂ともいふと見えたり

り

上甌島

里村入江 上甌島北面にして船を繫へき濱あり、上甌島に渡るもの爰に着船す、纔なる

入江に石垣を築き船の頼所となす、むかし

小川氏島の領主なりし時も此村に居住した

ると見えたり、今も地頭飯屋を置て士を居

らしむ、眺望の景色尤よし

新田八幡宮 里村に鎮座、里村の地頭飯屋を

距ること巳方五拾間余、祭神一座

瓊々杵尊正祭
九月十九日

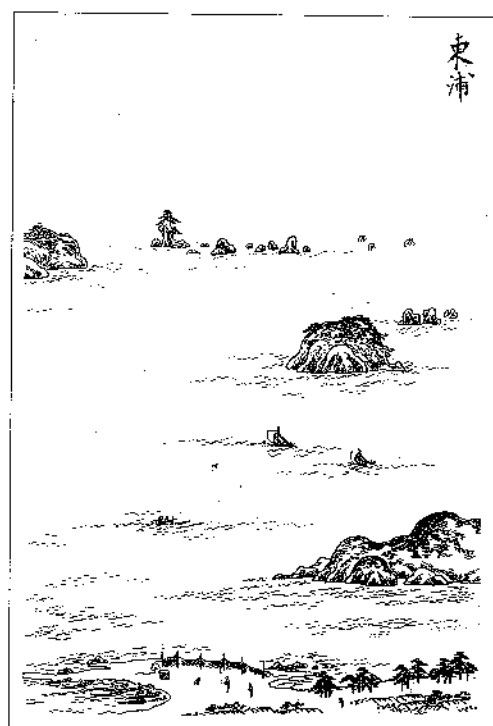
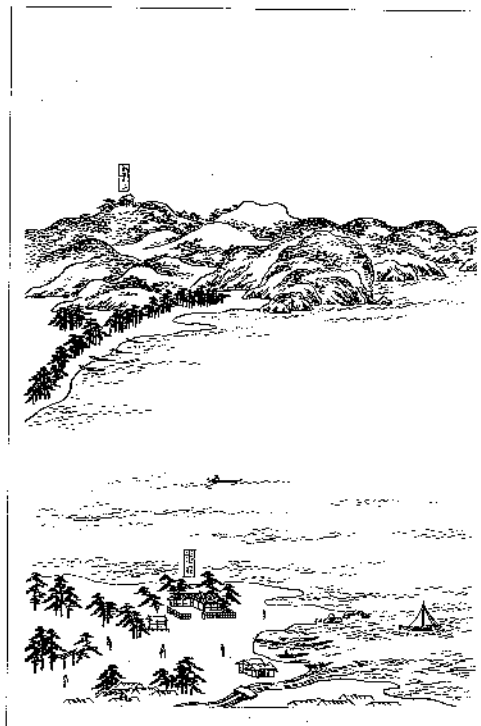
嘉祥二年薩州千台八幡新田宮の社家宮里壺
岐なるもの神体を守来りて勧請す

亀鶴城跡 里村にあり、地頭飯屋の午未方式

拾間許りにしへ小川氏甌島の領主となり
て相州鎌倉より下向しこゝに居住す、今島
となる、また辰巳方田地を隔て旧城と云陣
跡あり

大炊御門中将墓 里村にあり地頭飯屋の午方

凡壺町、大炊御門正三位左中将藤原頼国と
いひし人の墳墓なり、百八代後陽成帝慶長
十四年の冬罪ありて河辺郡硫磺島に流しつ
かハさるにより薩摩に下向せり、邦君慈眼
公姑此島にとゝめ扶助をなし給ふ、同十八



年癸丑三月十一日病死、爰に葬り法号一清

院殿湖月宗珊大居士と謚す、墓上に松を栽

て標とし島の士本田藤右衛門なるもの世々

香花を供し祭りをなす、安永六年丁酉八月

二十五日大風に其松倒れていま椿を栽てし

るしとなす、其椿僅五尺に過す親孚知譜拙記を見るに頼国は権大納

言経頼の男慶長三年左中将正三位、同十四年流罪、同十八年五月於硫磺島

堯三十七と記せり、三月堯しけるを五月とあるは都にきこえし時なるへし、

公卿補任慶長三年從三位藤頼国廿二左中将正月五日叙正三位云々、本田藤

右衛門家の旧記を按するに頼国此島にありて島の士梶原宗故か一女を妾とし

女子一人を設らる、成長の後慈眼公に奉仕し名を眷と賜ふ、廿六歳にして

て本田八郎兵衛親豊に嫁す親豊は即藤右衛門か祖先也、此由縁にて中符の

墓を祭るといふ

旭宝山西昌寺 里村にあり地頭飯屋の巳方三

町余、浄土宗鹿兒島不断光院の末にして開

山純譽上人シユンラ 不斷光院四世住持寛永十

五年壬午八月十四日遷化 本尊阿弥陀如来立像

古 寛永三丙寅の歳国命にて純譽渡海して

創建す、初め西福寺といふ禪寺ありし所な

りといへり

少将塚 西昌寺境内にあり、松木少将といへ

る人の塚にして自然石を建て表とす、慶長

十四年大炊御門頼国と共に硫磺島に配流の

身となりて薩摩に下向す、慈眼公頼国と同

しく此島にと、めて扶助をなし給ふ、寛永

五年戊辰八月廿二日爰に死す、法号松雲院

殿法譽愛慶居士、本田藤右衛門香花を手向

といふ藤右衛門等蔵の古簿に云、少將此島にすみて大炊御門中将没し

て後又彼妾梶原氏を寵愛し此服に二女一男を生ず、長女千代蚤

死、二女おいち也、邦君寛陽公に仕ふ、承応二年癸巳十月十七日痼疾を患

ひて死す、男を少兵衛といふ松木氏を称す、其子伊兵衛嗣子なし、知譜拙

記を按するに松木家は中御門家の事にして硫磺島に配流せられし人系図に

見へす、権中納言宗満の三男宗信兄宗則の養子となりて少將從四位下に拝

任す、時代此人にあたり

詠之濱 瀬上村東の海辺にあり、上甕島第一

の勝景にて大なる二の湖池あり、海鼠を生

産す、慶安元年六月寛陽公釣魚の為に此島

に渡海し梶原某か家に止宿し給ひ一日この
濱を遊観し又江内小島を巡見し給ふ、今俗
謡の御縁節は此時始るといひ伝ふ

甌島之大江

中将光久

乗船諷詠大江邊 巖渚揚波出自然 山後

山前觀不盡 陰々夏木翠翻天

甌島之小島

連山遠岫矗森々 雲物撩人拂袖吟 不換

三公斯小島 一竿垂釣自甘心

長圍山本福寺

中甌村にあり、地頭仮屋より

亥方凡四拾間

中甌村上古中津串といひしといへり、世俗に中甌を別に島あるといふ誤也、中甌は上甌の村名にして別に島あるにあらず、

甌島の地頭こゝに居住す

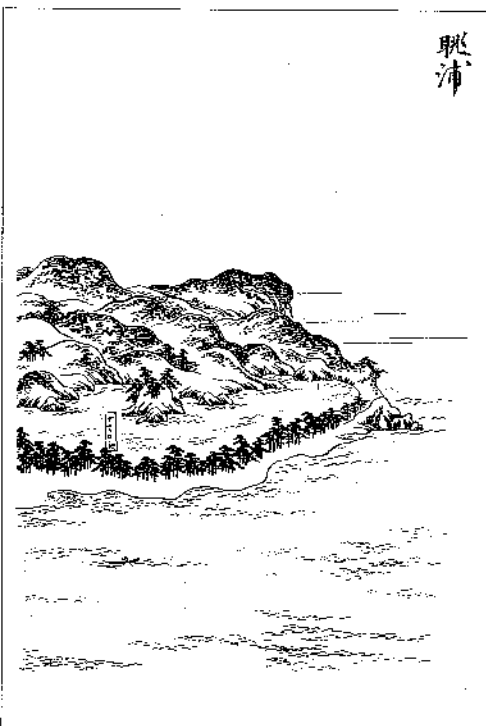
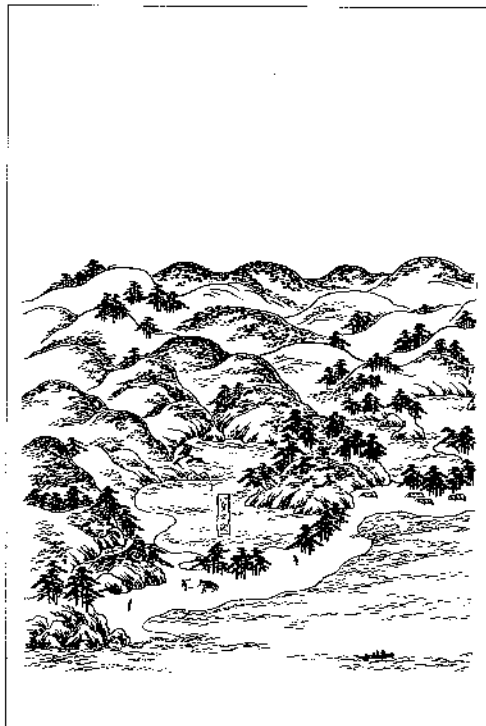
真言宗大乘院の末にして本

尊阿弥陀

立像長貳尺五寸安阿弥作

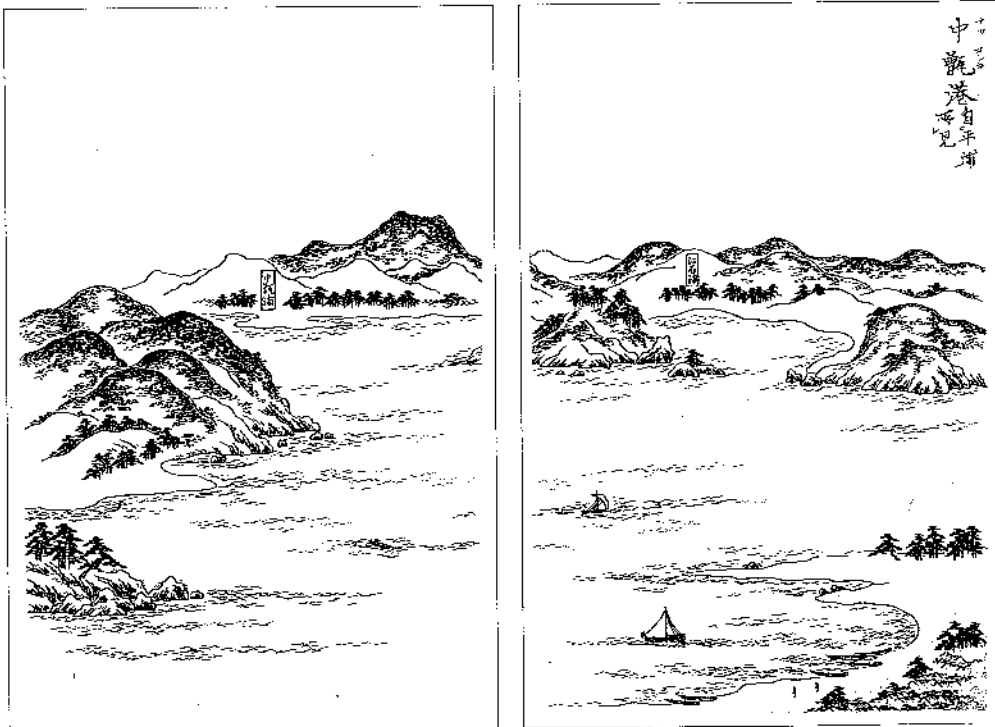
当寺は往昔宮司坊といひ

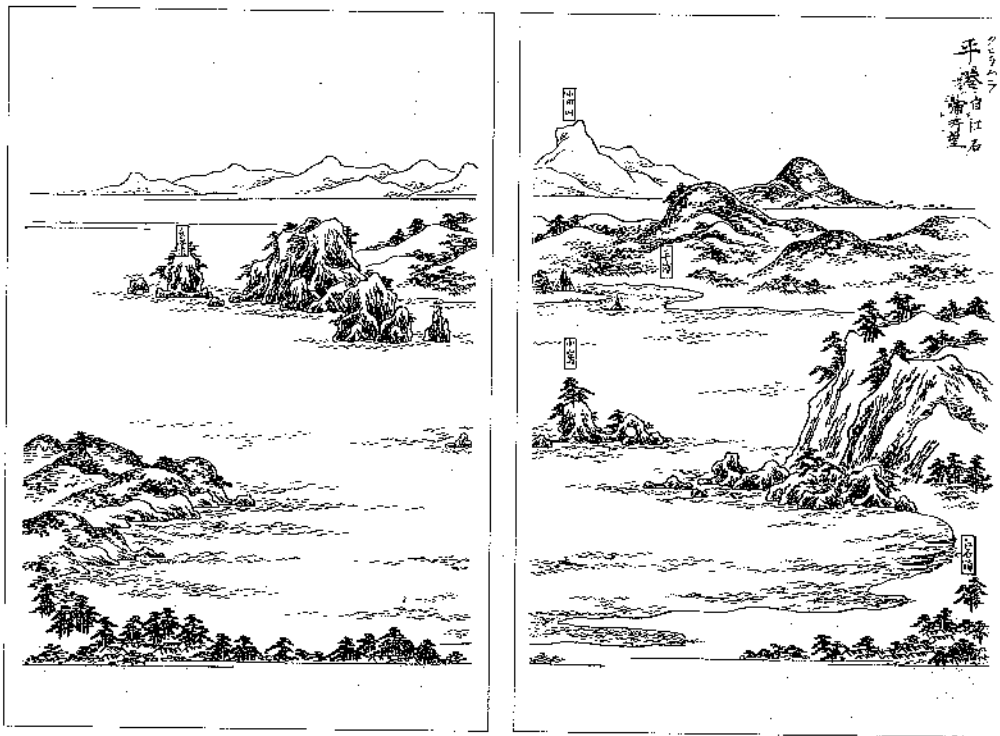
里村新八幡宮別当職にして小川氏甌島没落の時寺も廢に及びしを慶長中此島外城とな



りし時再建して本福寺と号し^{カウケイ}杲慶法印をも
て中興となす

平村 中甌村の南にあり満潮にハ一島のこと
くなり干潮には中甌に続く所なり、人家多
く平日漁獵をもて生活す、湊なく風波によ
て苦しむこと甚たおほし、こゝにをいて本
府士長崎八右衛門隆近^{タカチカ}此島に勤仕し島民の
苦難を察し海辺の大池を船繫場となさんと
欲し有司に乞て国命を奉り寛政十一年春三
月岸を崩し石をくだき泥沙を除き港を作る
其地の廻拾間四拾
間、その深さ五丈余もとより民力薄く三年を経て
其功終る、港口横拾間深壺丈三尺今は舟船
も出入して逆風の難を免かれ商舶も此港に
繋り利を失ハさるものおほし、隆近の功勞
を賞せさるハなし





甕島大明神 中甕島村串瀬戸にある大岩なり、

地頭飯屋を距ること申西方拾八町余、祭神

詳かならず、按するに海神なるへし、例祭

九月九日、串瀬戸は東西潮の通ふ切戸にし

てその中に甕形の大岩あり 甕ハ飯を炊の器黃帝始て作り給ふ、吾藩甕の飯などいふこと今にあり、日本紀孝德帝大化二年の記に有百姓就他借甕炊飯と見へたり 是を神石と崇む、

社もなく何年祭り初めしや詳かならず、上

古は島の崇廟なりしよしひ伝ふ、神職日

笠山権太夫世々祭祀を司る

下甕島

八幡新田宮 手打村に安鎮す、地頭飯屋 同村にあり手打ハ下甕島の麓なり より西方凡拾三町、祭神三座 神功皇后依神天皇玉依姫例祭九月十九日 下甕島の宗廟にて勧請年暦伝はらす、

社司口笠山織衛 ヒカサヤマオリエ

大性寺 手打村にあり地頭飯屋の卯辰方に隣

る、真言宗大乘院の末にして開山快賢法印クハイクン

元禄十三年庚辰 本尊阿弥陀主像 小川遠江守日奉公オガハトラタツミノカミヒマツリノ
九月四日遷化キンスエ

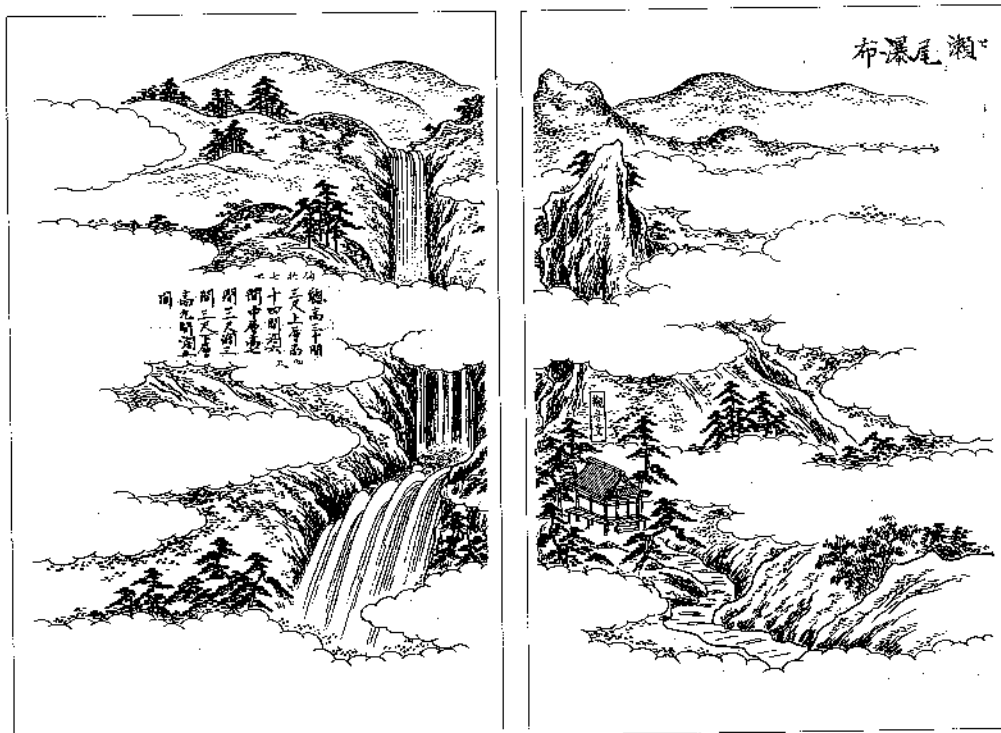
季の位牌を安置し牌面に物外応公庵主裏に
当寺再興大願主と記す、公季ハ永正六年己
巳二月七日卒す、されハ快賢法印は中興な
ること知るへし

補陀山常楽寺フタサン 手打村にあり地頭飯屋をさる

こと戌亥方志町余、曹洞宗市来金鐘寺の末
にして開山帖牛怨水和尚テウギウジヨスイ 金鐘寺イナクキンセウジ
四世 本尊正観音金鐘寺像

小川遠江守信将の位牌を安置す、開基年記
ノフマサ
詳かならず

瀬尾飛泉 下甕島青瀬アラセにあり、地頭飯屋を距
ること子丑方凡式里許り、瀬尾といふ山よ
り出て水勢少くその高きこと凡三拾間西よ
り東に落る三重の飛泉なり、下の一段は大



岩の滑にて幾筋も別れ恰も白糸を繰掛たるに似たり、瀧つほ浅く流れて青瀬の渚に至る、瀧の下に式間四方の堂あり正観音^{立像}を安置す故に観音瀧ともいへり、左右の岡は山林青邑風光をのつから壯観也、海中船を浮へ眺望するに上中下段の瀧みへたり、むかし源俊賴の朝臣山姫の嶺のこすえに引かけてさらせるぬのや瀧のしら浪と詠しけにも此等の美景ならん

雪とくる山より高し瀧の音 下瀬島 青雲

霞む日は瀧の白糸よこれけり 全

片野浦村 下瀬島の西面にて纔なる入江に人家あり、湊といへる取もなく常に浪高く荒磯にして風景はたくへるにもものなし

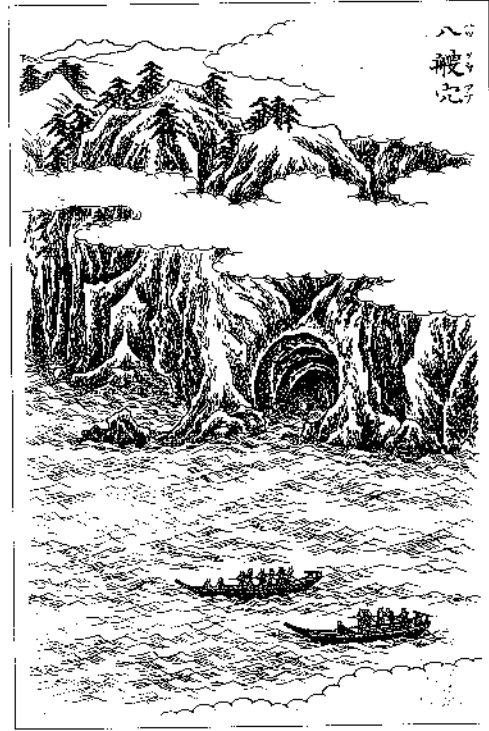
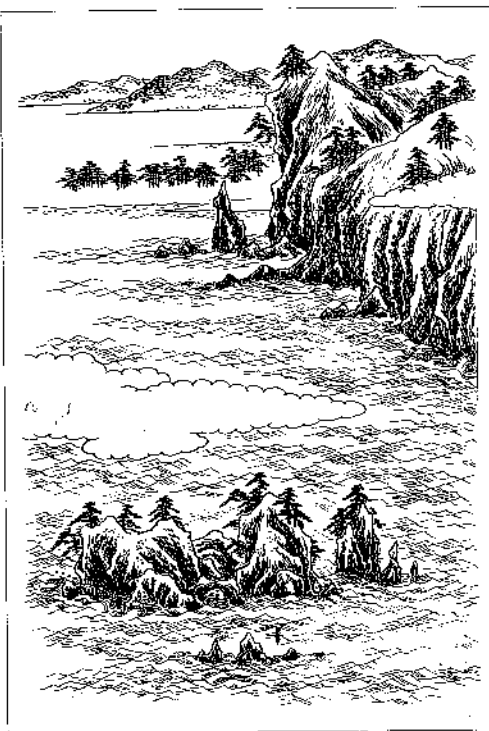
瀬々之浦村 片野浦村の隣村にて凡嵯里人家

多し、土民此村をし、の浦といふ、一日輕舟を浮へ其風光を見るに断岸千尺海中に鷹之巢といふ大岩あり、又ちう瀬といふ数十丈の嶮巖側立して下瀬島第一の絶景なり、波あらく漁船も風波静なるを得て乗船す

八艘穴 瀬々之浦村の海岸にあり伊牟田村に通船するに見る西受の洞なり、内に魚船八艘を繋ぎていかなる大風といへとも恙なき所なり 魚船は島民輕船と云其長四五間を過す よて八艘穴といふとい

へり、其洞に船を入て舷を扣ハ其響雷の落るの如く岸洞崩るにひとしく皆膽をひやして船を着るものなし

大多羅姫祠 瀬々之浦村生靈穴の隣に鎮座、祭神詳かならず、例祭五月二日九月六日十一月六日



生靈穴 瀬々之浦村にあり岸の下に式間余方の洞あり其高さ式間許り内に泉あり里俗是を生靈穴とよへり、その側に人家あり、いかなる人七月魂祭りの時此穴より生靈の出入するよしいひ習ハしけるにや、世にあやしき事おほし

既刊史料集一覧

集	史 料 名	執 筆 者
1	薩藩政要録	桃園恵真・五味克夫
2	丁丑日誌（上）	村野守次
	〃（下）	芳 即正
3	薩摩国新田神社文書	五味克夫
4	向宗禁制関係史料	桃園恵真
5	薩摩国山田文書	五味克夫・郡山良光
6	諸家大概・別本諸家大概・職掌紀原・御家譜	桃園恵真
7	薩摩国阿多郡史料・山田聖栄自記	五味克夫・郡山良光
8	御登御道中日帳御下向・列朝制度	原口虎雄
9	明治元年戊辰戦役関係史料	村野守次
10	伊能忠敬の鹿児島測量関係資料並に解説	増村 宏
11	管窮愚考・雲遊雜記傳	五味克夫
12	川上忠憲一流家譜	五味克夫・桑波田興
13	本藩人物誌	桃園恵真
14	薩陽過去帳	宮下満郎
15	備忘抄・家久公御養子御願一件	五味克夫
16	鹿児島縣地誌（上）	桐野利彦
17	〃（下）	桐野利彦
18	薩藩舊士文章	五味克夫・桑波田興
19	薩藩先公貴翰（乾）	五味克夫・桑波田興
20	〃（坤）	五味克夫・桑波田興
21	小松帯刀傳・薩藩小松帯刀履歴・小松公之記事	芳 即正
22	小松帯刀日記	芳 即正
23	新修舊鹿児島藩領国・郡・郷・村・浦・町附（上）	原口虎雄
24	〃（下）	原口虎雄
25	三州御治世要覧	宮下満郎・桑波田興
26	桂久武日記	村野守次
27	明赫記	宮下満郎
28	要用集（上）	芳 即正
29	〃（下）	芳 即正
30	桂久武書翰	村野守次
31	本藩地理拾遺集上（薩摩国）	桐野利彦
32	〃 下（大隅国・諸縣国）	宮下満郎
33	江夏十郎関係文書（上・下）	山田尚二
34	示現流関係史料	宮下満郎
35	樺山玄佐自記並雜丁未隨筆・樺山紹剣自記	晋 哲哉
36	島津世祿記	山田尚二
37	島津世家	畠中 彬
38	譯司冥加録・漂流民関係史料	宮下満郎
39	薩摩藩天保改革関係史料一	尾門義男
40	薩摩学事一・鹿児島県師範学校史料	宮下満郎
41	薩摩学事二・薩摩学事三	畠中 彬
42	薩藩名勝志（その一）	吉元正幸

薩藩名勝志(その二)

(鹿児島県史料集 第四十三集)

平成十六年三月

発行 鹿児島県史料刊行会

鹿児島市城山町七一

電話 〇九九―二三四―九五一一

FAX 〇九九―二三四―五八五四

印刷 かわち印刷有限会社

鹿児島市中央町二十七―十六

電話 〇九九―二五四―五〇五四

